

博士論文

中国考古学の特質

鹿児島国際大学大学院  
国際文化研究科 国際文化専攻

楊 帆

2021年3月

# 中国考古学の特質

# 目次

## 序章 (4)

## 第1章 中国考古学の流れ (7)

### 第1節 外国の考古学からの影響 (7)

第1項 はじめに (7)

第2項 外国の考古学からの3段階の影響 (9)

第3項 その他の要因 (17)

第4項 まとめ (18)

### 第2節 民族考古学 (20)

第1項 はじめに (20)

第2項 中国考古学における「民族考古学」の歩み (22)

第3項 「民族考古学」とその対象・目的 (23)

第4項 まとめ (25)

### 第3節 ジェンダー考古学 (27)

第1項 はじめに (27)

第2項 ジェンダー考古学以前 (27)

第3項 中国のジェンダー考古学の始まりと現状 (29)

第4項 中国の女性考古学者 (34)

第5項 まとめ (35)

### 第4節 認知考古学 (36)

第1項 はじめに (36)

第2項 中国考古学における認知考古学 (37)

第3項 まとめ (38)

### 第5節 パブリック考古学 (40)

第1項 中国のパブリック考古学 (40)

第2項 現状と問題点 (41)

第3項 事例 (42)

第4項 まとめ (45)

第2章	中国考古学と型式学	(48)
第1節	研究史と問題点	(49)
第1項	初期の中国考古学	(49)
第2項	型式学に関する中国考古学の状況	(51)
第3項	日本考古学における型式学的研究法の展開	(54)
第2節	型式学的研究法の検討	
—新石器時代中期土器での実践を通じて—		(57)
第1項	はじめに	(57)
第2項	資料と方法	(57)
第3項	型式分類と分析	(58)
第4項	層位学的検証	(65)
第5項	多変量解析の適用	(69)
第3節	考察	(81)
第1項	白音長汗遺跡の検討から	(81)
第2項	中国考古学と型式学的研究法	(82)
第3項	おわりに	(83)
第3章	中国考古学における3D技術の適用	(84)
第1節	中国考古学における三次元計測	(84)
第1項	はじめに	(84)
第2項	現状	(85)
第3項	三次元計測の実例について	(88)
第4項	三次元計測に関する傾向と問題	(94)
第5項	おわりに	(100)
第2節	中国での三次元計測の実践から	(105)
第1項	はじめに	(105)
第2項	調査	(105)
第3項	まとめ	(107)
第4章	中国考古学の研究動向分析	(111)
第1節	研究動向分析にあたって	(111)

## 目次

第1項	はじめに (111)
第2項	対象と方法 (112)
第3項	項目の設定 (114)
第2節	研究動向分析の結果とその考察 (123)
第1項	はじめに (123)
第2項	『考古』における通時的発行動向 (123)
第3項	「地域」に関する動向 (125)
第4項	「研究基金」に関する動向 (128)
第5項	対象とされる「時代」に関する動向 (129)
第6項	「記事の種類」に関する動向 (130)
第7項	「研究対象」に関する動向 (131)
第8項	「研究方法」に関する動向 (133)
第9項	「研究目的」に関する動向 (135)
第10項	おわりに (136)
第5章	中国考古学の特質 (149)
第1節	抽出された諸特徴から (149)
第2節	中国考古学の特質について (153)
結語	(155)
謝辞	(157)
文献	(158)

### 例言

1. 本論文中で引用を示す際には、中国人名は混同を避けるため姓・名ともに記した。
2. 基本的に日本語の旧字体を新字体に、中国語の繁体字を簡体字に改めて表記した。
3. 文献リストを末尾に付し、日本語文献、中国語文献、欧米語文献の順に掲載した。
4. 文献リストでは、著者の中国語名については中国語読みで配列した。

## 序 章

本論は、表題に示したとおり、「中国考古学の特質」について考察しようとするものである。

中国の考古学を特徴づけるものとして世界的によく知られているのが、周口店と北京原人、殷墟、甲骨文字、秦始皇帝の兵馬俑、馬王堆漢墓、シルクロードの諸遺跡をはじめとする著名な遺跡や遺物であろう。そして、それらは中国国民にとっての誇りでもあり続けてきた。現在の中国考古学はそうした伝統的に著名な遺跡・遺物にとどまらず、様々な調査研究が進められており、国家文物局から毎年発表される「中国十大考古新発見」からもわかるように顕著な発見が相次ぎ、それらの新たな発見が世界的なニュースとなることもしばしばである。また、現在は様々な新しい調査・研究技術が導入され、中国人考古学者による国外での調査や水中考古学などでも成果も上がっており、調査研究が活発になっていることは、そうしたニュースからもうかがえるところである。中国考古学は、まさに日進月歩の展開を見せているといえよう。

中国考古学の実態により詳しい人であれば、そのような著名な「文物」や華々しい成果の一方で、中国では人の目にとまらないおびただしい数の調査研究が行われていることや、近代的な博物館が各地で急速に整備され目を瞠るような成果が公開されていることなども知っているであろう。そうした人は、「文物」や新発見だけでなく、中国での考古学の行われ方や事情を多少とも知っているといえよう。たしかに、中国では近年の経済成長などを背景としながら、考古学は大きな展開を見せているのが現状といえる。また、国外の考古学研究者で中国考古学に関心を持つ者であれば、中国考古学とマルクス主義的歴史観との関係や、その考古学がナショナリズム・国威発揚の側面をもつことなど、イデオロギーや政治との関わりについて特に印象深く感じる人もいるであろう。

しかしながら、以上のような印象や特徴はいずれも、中国考古学に対するそれなりの見方ではあっても、表層的かつステレオタイプともいえるような一面的な見方が含まれているかもしれない。国外の考古学の専門家でさえその可能性がないわけではない。考古学は一つの学問分野ではあっても、世界的に見れば、考古学を取り巻く社会的な状況や考古学を実践する際の方法や対象は、国や地域などによって一様ではない (e.g. Trigger 1989)。それは中国考古学にももちろん当てはまることであるが、中国考古学の特質を理解するためには、実

## 序章

態をより詳しく捉え、より深く掘り下げた検討が必要となるであろうし、特に、中国以外の考古学と「意識的に」比較をし、それに基づいた理解を得ることもまた必要となると筆者は考える。

そこで筆者は本論において、中国考古学の特質について、以下のように従来とはやや異なる観点から検討・考察しようとするものである。

すなわち、本論の特色は第一に、中国国外の考古学の動向やその中国への影響を比較の観点から扱い、相対化しようとする事が挙げられる。その一環として、欧米考古学由来の理論や方法、またそれに伴う考え方の比較を扱うことはもとより、特に同じ東アジアにおいて顕著な考古学的活動がなされ、かつ中国とは少なからず異質な面をもつ日本考古学との比較も念頭に置く。その際、中国国外でまとまった紹介がなされる事が少ない中国における新しい動向について、積極的に扱うところも本論の特徴に加えられよう。

第二に、中国考古学の研究動向について記述的に把握するだけでなく、計画的に多数のデータを収集し分析的作業も行うことで多少なりとも客観的にするとともに、説得力を強める方針をとる。これについては、従来は記述的なものが多く、限られた期間やテーマに絞るなど限定されたものはあっても、本格的に行われたことはなかったと思われる。それを実施することによって、これまで指摘されていることであってもより明瞭になったり、これまで気づかれなかった特徴が抽出されたりすることも期待できる。これも本論の特徴といえることができよう。

第三に、中国考古学で現在受け入れられていない「異質な」研究法を試してみることであり。特に、異なる編年の方法を中国の素材に適用した実践についても述べる。また、近年中国で急速な普及が見られるのが「ハイテク」な手法であるが、それに関連して、筆者が三次元計測を中国で実践した際の反応をはじめ、筆者が中国で体験したことや見分したことなども本論に織り込むことで、文献などからは把握しにくい中国考古学の実態についても接近したい。

以上のような新たなアプローチを含む検討を通して、中国考古学の特質に迫ることとしたい。これまでに中国考古学の性格や特色について論じた論考はあっても、本論のような方針で中国考古学を論じたものは稀有であると考え。中国考古学はそれなりに長期にわたっており、状況に応じて複雑な変化をしながら膨大な実践がなされてきた。そのため、そのあり方を全幅にわたって検討し尽くすことはもとより困難があるが、以上のようにして検討することで、新たな理解が得られるなど成果があるものと考え。これは、中国考古学を

## 序章

多角的に評価し、より深い把握に役立てるためには必要なことであり、重要なことであろう。また、それは中国考古学自体にとって必要であるばかりでなく、これからの世界の考古学の発展を考えるうえでも、何がしかの意義があると考ええる。



## 第1章 中国考古学の流れ

中国考古学の特質を捉えるうえで、その成立と展開の過程を見ておくことは重要であろう。本章ではそれについて扱うが、欧米以外の諸国では、しばしば欧米人（一部は日本人）という自国民以外による活動によって初期の考古学の調査研究が行われたということができ、自国民による調査研究については、行われなにか定着に歳月がかかることが多かったといえよう。いずれにせよ、現在は自国民が主体となって考古学的活動を実践している国であっても、理論や方法、考古学の実践のしかたなど、多かれ少なかれ欧米からの影響を受けてきた可能性が高い。また、その国が置かれた当初の状況やその後の状況の変化などによって、展開には差があることが想定できる。

では、中国の場合、どのような過程を経てきたのであろうか。この問題は、現在の中国考古学の状況を考えるうえで重要であるが、時系列的に中国考古学史を網羅的に記述するよりも、本章では特に欧米考古学\*を中心とし、日本も含む外国の考古学からの影響——それはしばしば理論や方法という根幹とも関係する——に着目して検討や比較を行いたい。なぜならば、何を導入し何を拒絶したかなど外国との差を端的に理解しやすく、それが中国考古学の特質の形成にもつながると考えるからである。

### 第1節 外国の考古学からの影響

#### 第1項 はじめに

現在の中国考古学には、以下のような独特な特徴があると考えられる。

まず、編年研究は重視されるが、研究の基礎ともいえる土器編年など、その方法についての意識は高くなく、認識も不十分である可能性があることが挙げられる。このことは、編年を極めて重視してきた日本の考古学者にとっては特にそう感じられるであろう。そのため、

---

\*本論で「欧米考古学」というときは、特に断りのない限り西ヨーロッパと北米の考古学を包括している。

日本の精密な編年研究やそれに基づく細かな議論のような顕著な成果に乏しいという現状を生み出している可能性があり、さらにそれと密接に関係すると思われる発掘の頻度や密度、実測図の図化の頻度や精度などの制限もある。すなわち、広域にも地域ごとにも詳細な編年研究が行われている日本と比較して、そのような編年研究が希薄であることは、編年への志向性を含む研究者の意識と、それを可能にする資料的条件など——それはまた意識の表れである可能性がある——が影響していることが考えられる。

また、重要な遺跡の発掘現場では3D計測はもとより、様々な最新のハイテク技術がしばしば使用されるようになっており、これは欧米考古学からの影響である可能性が高い。そうした技術導入の背景には国家の経済力の発展と民族主義の高揚があるとみられるが、現在、発掘成果で顕著なものは、マスコミやインターネットなどを通してリアルタイムで国民に伝えられるようになってきている。しかし、現在の傾向として、地道な調査研究よりもニュース性の高い「重大な」考古学の「新発見」を重視する傾向が強いということも特徴として挙げられる。

さらに、欧米考古学の影響を受けて、中国でも「パブリック考古学」に相当する活動が盛んになりつつあり（楊帆 2018a）、「ジェンダー考古学」も新しい研究視点として紹介されるなどしている。さらに、より多くの研究者、特に若手研究者がプロセス考古学に由来する研究方法や技術などに目を向け、研究に応用するようになってきた。しかし、中国考古学ではプロセス考古学の根幹といえる仮説演繹法やミドルレンジセオリーなどに基づいた、体系的なプロセス考古学の実践研究はほとんどないように見受けられる。すなわち、体系的な導入というより、技術・手法や概念などの「つまみ食い」というべき現状があることが、筆者にはうかがえるのである。

興味深いことに、近年は英語で書かれた文献が翻訳されることが多くなっており、日本よりもかなり多い\*。しかし、20世紀後半からの数十年で文化史・伝播論から脱却する方向で理論と方法を変化させてきた欧米の考古学の歩みに比べて、一部の研究者を除き文化史・伝播論的範囲といえる枠組みに未だにとどまっている中国の多くの考古学者にとって、欧米流の理論や概念は読んでもほとんど理解できないという問題もある。さらに、ナショナリズム

---

\* 日本では、L. R. Binford や C. Renfrew、I. Hodder など世界的に著名な考古学者の著書でさえほとんど翻訳されていない。一方、隣接学問といえる文化人類学などでは翻訳本が多く出版されてことから、逆に日本考古学のほうが極端に少なすぎるという見方もでき、興味深い現象といえよう。

ムとマルクス主義的性質を強く帯び、それを拠り所に行っているともいえる中国考古学にとって、新しいものを導入して考古学の近代化を図りながら、それと同時に欧米的思想を含む考古学的枠組みに染まってしまうことを避けることを両立することは、難しい問題である。どれが保持すべき中国なりの特長で、どれが中国考古学として適切なのか、どれが学ぶべきで更新すべきものかという問題は、欧米の考古学に接した中国人考古学者にしばしば葛藤をもたらす。ひいては、欧米考古学とも、そこから距離を置いた独自性をもつ日本考古学とも、様々な点で大きな相違が生じており、欧米で創造され発展してきた考古学理論を中国考古学に応用・移植することに意義があるのか、という疑問も中国考古学者の間でしばしば聞かれるところである。

このように現状を瞥見するだけでも、中国考古学には独特な面があることは確かであろう。ここでは、外国からの影響に注目して中国考古学の展開をみるとともに、プロセス考古学、ポストプロセス考古学、ジェンダー考古学、パブリック考古学あるいは認知考古学といった、理論や外国考古学の動向の影響が中国考古学でどのような現状にあるかを検討する。それに基づき、中国考古学の現状を形成する根本的な要因、または中国考古学の特性の把握の手がかりとしたい。

### 第2項 外国の考古学からの3段階の影響

中国考古学への外国からの影響については、時期とともに変化があると考えられる。まず以下では、時代背景を考慮に入れながら、学史に関する既存の研究も紐解きつつ、概観することにする。

#### 中華人民共和国成立前(～1949)

中国考古学史において、「新中国」すなわち中華人民共和国の成立が大きな画期とされることが常である。ここでは、その画期よりも前の段階の中国における考古学の導入期について記す。

中国考古学の成立について、清代以前からの長い歴史をもち独自性のある「金石学」こそ考古学の前身であると信じる中国人考古学者もいるが、その評価はともあれ、そうした金石文による伝統的な研究方法ではなく科学的発掘調査を通して資料を収集し研究することは、スウェーデンの J. G. Andersson による仰韶文化の発掘をはじめとして 1920 年代に開始さ

れたことはよく知られているとおりであろう。しかし、そのような欧米人研究者による活動以前に、広義の「五四運動」に包括される旧文化的な儒教など伝統的・封建的思想への批判と西洋化推進の一連の動きによって、地質学や古生物学などの自然科学がすでに盛んであり、これは近代中国考古学の形成の基盤となったとされる（陳星燦 1997；また Trigger 1989 参照）。西洋の先進思想の影響を受けた中国の「疑古派」は、三皇五帝を正史とする古代史書を疑ったり批判したりする活動を行った（傅斯年 2003）。そこで、真の古代の歴史の構築には考古資料の発掘に着手するしかないと考えた一部の学者は、科学的な考古学を推進すべきであること、書齋から出て発掘したり研究したりすべきだということをアピールした（陳星燦 1997）。ただし当時、発掘や研究などを実施した研究者のほとんどは考古学が専門ではなく、欧米諸国あるいは日本に留学経験のある地質学や人類学といった考古学以外の分野であり、西洋流の考古学的な発掘や研究方法についても僅かしか理解できていなかったとされる。

Andersson をはじめとする外国人による調査と発表に対し、五四運動からのナショナリズムの高揚と相俟って中国の学者は Andersson の唱えた「仰韶文化西來說」を強く拒否し、アメリカに留学しハーバード大学で人類学の博士号を取得した李濟によって 2m 方眼のグリッド調査で三次元記載法を使用した発掘が 1926 年に実施された（飯島 2003）。殷墟の発見によって、奇しくも「疑古派」の予想とは裏腹に（Trigger 1989）、史書における商王朝の記録の信頼性が高まった結果、中国考古学は「歴史学」として今日まで位置づけられていると陳淳（2018）は述べている。ちなみに日本では、アメリカ人動物学者の E. S. Morse による 1877 年の大森貝塚の調査を嚆矢として考古学的調査が開始され、間もなく日本人による調査が展開した。Morse の「食人説」への批判や人種論が繰り返されることになったが、そこには日本人のナショナリズム・民族意識が関係したと考えられる。日本のほうが中国にかなり先んじて考古学的調査が実施された点は相違するが、近代における考古学の受容の初期の過程として類似した面があると思われる。いずれにせよ日本を除けば、中国は 20 世紀前半のアジアにおいて自国民による組織的な調査が行われた極めて稀な国ということができよう。

この時期、留学経験のある研究者たちが西洋の考古学の書籍を翻訳している。中にはヨーロッパの考古学を日本に紹介し大きな功績を残した、濱田耕作による日本語への訳本や著書から中国語に翻訳されたものがある。『ミハエリス氏美術考古学発見史』（ミハエリス（濱田訳）1927）を訳した『美術考古学発現史』（Michaelis（郭沫若訳）1929）、西洋考古学の

方法をわかりやすく示した『通論考古学』（濱田 1922）を訳した『考古学通論』（濱田（兪劍華訳）1931）、O. Montelius の型式学的研究法を日本に紹介した『考古学研究法』（モンテリウス（濱田訳）1932）を訳した『考古学研究法』（孟徳魯斯（鄭師許・胡肇椿訳）1935a-e, 1936 ; 原典からの翻訳に蒙徳留斯（滕固訳）1937 がある）がそれであり、これらは大きな反響を呼んだが、五四運動の頃のマルクス主義に関わる書籍についても日本語から翻訳されたものが多い（陳星燦 1997）。このように、欧米や日本から受けた影響は大きいものがある。

中国東北部（満州）を中心として考古学的活動を行った日本人考古学者を除き、1937 年以降には日中戦争により欧米人考古学者が中国から撤退することとなり、引き続き戦争と内戦の影響によって外国考古学との関わりがほとんどなくなった。したがって、中国の初期の考古学において欧米から影響を受けたのは比較的短期間であったことになる。このことは注意しておく必要がある。

#### 中華人民共和国成立後(1949～)

1949 年、「新中国」すなわち中華人民共和国が成立したが、東西冷戦の構造など複雑な国際政治情勢において中国考古学と外国の考古学との間の往来がほぼ断絶する中で、中国と政治的に強い結びつきがあるソ連は例外であり、中国考古学はソ連考古学の影響を強く受けることとなった。このあたりの中国考古学の動向について政治状況と国際関係に触れた研究はすでにあるが、当時のソ連考古学との関係について詳しく述べられた文献がある（Trigger 1989 ; 劉斌・張婷 2016）。以下、ソ連考古学との関係については主にそれらを参考にしつつ記述する。

上記の事情に加え、1953 年、「ソビエト連邦の先進経験を学ぼう」と毛沢東が呼び掛けたことも影響して、ソ連考古学を全面的に学ぶことが推進された。ソ連と同様、マルクス主義を国家意識および最高の指導的イデオロギーとする中国では、考古学に対する考え方が以下のように大きく変化した。

1) 考古学の歴史学としての位置づけがさらに強化された。歴史学に属する考古学こそマルクス主義の考古学であり、それが「ブルジョワ考古学」との本質的な違いであるとソ連では考えられ、同様の考え方をとる考古学者が中国で大多数を占めることとなった。周口店の調査などで著名な裴文中は旧石器時代の考古学は自然科学の一面を持つと考えていたが、「ブルジョワ考古学の泥穴に陥る」（曾騏 1959 : 10）、「歴史科学から外れる」（曾騏 1959 :

11) と批判され、旧石器時代の研究が「歴史科学に役立つべき」、「自然科学の観点から社会科学の分野に変わらなければならない」（裴文中 1959：63-64）と考えを転換せざるを得なかった（劉斌・張婷 2016）。マルクス主義的唯物史観を持つソ連の考古学者は、考古学が歴史学であることを徹底的に主張しつつ歴史の発展法則を信じ、それを信じない「ブルジョワ考古学」や型式学（下記）を批判した。徹底したマルクス主義を指導思想とした中国考古学も同様であり、現在までそのあり方の基本は変わるところがない。

2) 型式学への批判。中国語に翻訳されたソ連の考古学の論著では、ブルジョワ考古学の思想としての型式学は「唯心論」を宣伝するものであるという主張がしばしば見られ、当時の中国人考古学者もその影響を強く受けた。現在の中国考古学で型式学の代表的研究と見なされている蘇秉琦（1941（1984b 所収））の「瓦鬲的研究」は、北大考古專業資産階級學術批判小組（1958）によって『考古通訊』（現在の『考古』）誌上でその型式学研究法を「ブルジョワの學術思想」として強く批判された。このように、學術研究が政治的闘争と密接に結び付けられることとなったのである。さらに、マルクス主義と毛沢東思想の指導の厳密な遵守を求める当時の社会環境において、器物の形態変化によって年代序列を求める研究法は「唯心論」、すなわちただの主観的な仮説に過ぎないとされ、危険な研究法として批判されていった。なお、文化大革命の終結後も国家指導のイデオロギーが変わったわけではなく、型式学への偏見は今日でもある程度は続いているように思われる。

3) 社会発展に関するアメリカの人類学者 L. H. Morgan（1877）の著書『古代社会』は、マルクスとエンゲルスによって評価され、社会構造や唯物論など彼らの思想や著書に影響を与えたとされている。したがって、ソ連の考古学者は、血統などの氏族体系の研究を重視し、このような研究のあり方は 1950 年代にソ連の文献を通して中国考古学に影響を与え、それから 1980 年代に至る中国新石器時代や古代の性的分業などについての研究において、母系（母権）制度と父系（父権）制度が重視された（劉斌・張婷 2016）。

このように、1950 年代から 1960 年代前半まではソ連の考古学から多くの思想・概念・用語や調査法が導入されたが、1960 年代の半ばに中国とソ連との間の国境紛争を引き金として、両国の政治的関係が悪化した。それにより、中ソ両国のそれまでの考古学的交流は一転して相互の政治的観点の批判へと変化した（劉斌・張婷 2016）。ここに、「新中国」建国後の中国考古学が保っていた外国の考古学との唯一の橋を失うことになったのである。

その後すぐに、中国では「文化大革命」（1966～1976）が始まったが、それと同時期のアメリカでは新たな考古学理論に基づくプロセス考古学（ニューアーケオロジー）が盛んであ

った。文化大革命の進行とともに『考古通訊』(現在の『考古』)、『文物』、『考古学報』が続々と休刊し(曹兵武 2009)、考古学の研究者や学生は、「上山下郷運動」のために研究の現場から離れた。世界的なニュースとなった1972年の「馬王堆漢墓」の発掘でさえ、極端な予算不足から撮影用のフィルムが白黒の40本しか入手できなかったうえ、期限切れで廃棄されたほどであったという(李晶晶 2009)。文化大革命の間は、少数の重要遺跡の発掘調査以外、考古学は一切を停止したといっても過言ではない。

その当時の中国人考古学者は、中国的なマルクス主義や毛沢東思想にそぐわない欧米考古学流の方法論や研究方法について様々に批判的態度をとる中で、こと放射性炭素年代測定法をはじめとする科学的測定法の導入に関しては、中国社会科学院考古研究所で1960年代から開始されており、中国考古学ではその後盛んに使用されて現在に至っている(Olsen 1987)。

ポストプロセス考古学が欧米で台頭する1980年代以降については、「区系類型論」を提唱した蘇秉琦らの考え(蘇・殷 1981)が、中国考古学における支配的な枠組みとなった。それ以前、1970年代までの中国考古学では、マルクス主義的發展段階論という絶対的なものに「中原」を中心とする一元的な文化史観を加えた枠組みが支配的であった。しかし、各地の新石器時代の調査などによって明らかにされてきた地域的な文化的多様性など複雑な実態を、より「適切に」捉えることに成功したのが「区系類型論」といえよう。これは、中国の地域による文化の多様性を併行的進化とし、それが中国というまとまりを形作っていたとするものであり、マルクス主義的社会進化の枠組みを侵すことなく、中国という全体的な統一性や固有性も否定することなく、地域文化をも論じることもできるものであり(Trigger 1989)、受け入れられたといえよう。

ちなみに、この「区系類型論」の理論的基盤には型式学が関わっているが、いかなる分類であっても「究極的客観性」を付与できないため(中園 2004)、当時の中国考古学的な言い回しをすれば「唯心論」に陥ってしまうという危険性がある。「区系類型論」における編年では、型式学による序列ではなく、層位あるいは切り合い関係という外的基準に従って、それを根拠として時期を分けることとなる。この点については第2章でも論じるが、型式学が非常に重視される日本考古学とは対極をなしているといえよう。

ハーバード大学の張光直(K. C. Chang)は、中国でアメリカ考古学の現状や理論・方法などをしばしば紹介しており(張光直 1986)、中国の考古学者や学生が国外の中国のコンテクストとはかなり異質な——考古学のパラダイム、考古学的理論に触れることとなっ

た。ただし、プロセス考古学は伝統的考古学と激しく対立する状況にあり、中国の社会環境を考慮したためかもしれないが、不用意な誤解を引き起こさないように、張光直は理論についての話題には非常に慎重であったとされる（陳淳 2017）。しかし、その数年後の 1991 年になると張光直は、B. G. Trigger（1978）による『Time and Traditions: Essays in Archaeological Interpretation』の中国語版の序文で、中国考古学は考古学的資料の収集と調査に注意を払う一方で理論を主観的として信頼しないが、それならば考古学資料を理論に硬直的に当てはめる方法は厳密な研究方法ではない、ということを鋭く指摘している（張光直 1991）。

当時の中国における考古学の理論をめぐる問題については、プロセス考古学（ニューアーケオロジー）を主導した L. R. Binford へのインタビュー記事\*からもよく理解できる（劉景之訳 2001）。それによれば、1985 年に Binford は中国を訪問しており、それをもとに中国考古学の問題について率直に述べ、鋭い批判も加えている。すなわち Binford は、中国の大学での考古学教育は「非常に異常」であること、そのために中国人考古学者は先進的技術に関心を持って理論とパラダイムの役割を理解しておらず、考古学を研究するために理論をどのように適用するかを知らないことなどを評している（劉景之訳 2001）。Binford が指摘した「異常」な教育方法、すなわち授業をディスカッション形式で展開させることなく、要点を学ばせるだけで理論と分析についての能力を向上させない傾向はまだ残っている。このインタビューでは、周口店の原人が火を使用したとされる痕跡について中国人研究者と Binford の見解が合わなかったことには言及されていないが、Binford の見解は当時中国で猛烈な批判を巻き起こし、その結果、もともと欧米の考古学理論に疎く理解が困難であった中国の考古学者は、いっそう拒否反応を起こすこととなった。

そのような反応の一方で、日本で後藤明（後藤 1984）が欧米考古学の理論・方法の動向などを紹介した「欧米考古学の動向—理論と方法論の再検討を中心に—」が、1986 年に中国語に訳され発表されている（後藤（袁靖・李峰訳）1986）。また、プロセス考古学がアメリカで形成された事情を論述する論文や、新進化論を含む理論についての紹介（李富強 1988）なども見られるようになった。このように 1980 年代の中国考古学の環境では、張光直や Binford らの活動の影響が中国考古学の調査研究に表立って生じるまでには至らなかったが、硬直化したともいえるそれまでの中国考古学が 1980 年代末までに、ごく僅かであって

---

\* 1985 年 9 月のニューメキシコ大学での英文インタビュー記事を、中国語に翻訳されたものである。



も変化し、1990年代に入ってから中国考古学の変化の重要な基盤となったということができよう。

### 1990年代～現在

こうして1990年代を迎えた。中国では『改革開放』が深化し、国外からの情報が多くなるとともに、中国の考古学者は自らの考古学と外国の考古学、特に欧米考古学との間のギャップを感じるようになった。欧米考古学の最新技術と研究方法、プロセス考古学やポストプロセス考古学、そして認知考古学に至るまで、様々な論文や記事を翻訳して考古学関係の雑誌で発表したり、欧米考古学の訳本をシリーズ出版したりするなど、顕著な展開が見られるようになった。しかし、欧米考古学において諸理論が形成された背景や、欧米のコンテクストやイデオロギーを理解しにくい中国人考古学者の多くは、理論よりも花粉分析のような自然科学的な分析手法・技術のほうにより関心を持ち、一方で、「区系類型論」における編年研究に没頭するようになった。

上で見てきたように、「新中国」の成立以来、中国人考古学者は、社会発展史に強い関心を持ってきたとはいえ、外国人考古学者による理論や研究方法はもとより、それが外国在住の中国人考古学者によって開発されたものであっても、中国考古学でほとんど適用されていない\* (Falkenhausen 2006 : 13)。

イギリス考古学界の重鎮 C. Renfrew (1994) は、楊建華 (1999) による『外国考古学史』の序文で、中国人考古学者は観念と理論の革新を重視するべきと述べた。Renfrew は、自身の経験から最も難しい進歩は考え方の進歩であり、真の考古学史は考古学的思想の発展史であるとの指摘をしており、中国人考古学者が古代社会の構造を再構築するという目標を達するためには、新たな発見や発掘調査に頼るのではなく、分析方法の進歩と理論、パラダイムの発展によるほうがよいとしている (克林・倫福儒 1994)。このように、1980年代からの張光直や Binford、Trigger をはじめとする欧米考古学的観点からの指摘は、引き続きなされており、特に理論やパラダイムに関して一貫した指摘がなされているところが注目できる。

そして、欧米考古学との格差を縮めるために、最先端技術を導入するとともに、外国人研究者が中国の考古学機関との共同研究として中国国内で発掘調査をすることが許可される

---

\* そのように理論が欠如した中国考古学は、欧米考古学から記述的であるとして批判されるが、一方で究極の目標が説明にあるという認識も提示されている (Olsen 1987)。

こととなった。その後、欧米で考古学を学ぶ留学生を増やすなどした結果、欧米考古学の最新技術がリアルタイムで中国に伝えられるようになると同時に、学位を取得して帰国する優秀な研究者を国内の大学へ迎え入れるようになった。彼らが行う欧米考古学に関する講義は、大学で行われる講義のうちの僅かに過ぎないが、研究者も学生も、型式学と層位学以外の欧米考古学の理論を理解する者が現れ、それを用いた研究にも取り組む例が出るようになっていった。

近年、アメリカの G. R. Willey によるセトルメント・アーケオロジー、セトルメント・パターンの理論は、中国考古学において広く受け入れられ、国家的な大規模プロジェクトといえる 2000 年代の「中華文明探源プロジェクト」にも適用されている。それとともに、農耕の起源は注目されることになり、環境考古学と植物考古学の発展を強く推進してきた（陳淳 2017）。また、「最適採食理論」、「ブロードスペクトラム革命」、「人口圧理論」、「競争的饗宴理論」などの理論や概念の影響を受けて、中国における農耕起源の研究は発掘された作物の識別をメインとして、「いつ」と「どこ」を特定するためであった発掘と調査から、農耕の要因について議論する研究へと変化してきた（潘艶・陳淳 2012；陳淳 2017）。そのほか、農耕の起源についての理論の紹介や、考古学的発見と民族学や自然科学を結び付けて稲作と社会発展の関係を説明する研究、あるいはプロセス考古学の文化生態学的理論を用いた研究は、中国人考古学者の欧米考古学的理論に対する新たな試みとなった（呂烈丹 2012；陳勝前 2013）。

「一帯一路」の国家戦略および中国における海外関連の考古学的研究の増加の背景の下で、2013 年から中国社会科学院と上海市人民政府が主催する「Shanghai Archaeology Forum（世界考古論壇・上海）」が開催されるようになり、継続している。これは中国人考古学者が国際的考古学活動を現実するためのコミュニケーションプラットフォームを提供し、中国考古学の国際化を促進しようとするもので、世界から著名な考古学者を招いて大掛かりに行われており、『パブリック考古学論壇』や『女性考古と女性遺産検討会』など、中国の伝統的考古学と異なるテーマでの発表や議論も行われている（Shanghai Archaeology Forum 世界考古論壇・上海 2020）。

現在の中国考古学において、プロセス考古学に由来する理論や方法論が盛り上がりを見せているのとは異なり、ポストプロセス考古学における理論の基盤と研究方法についての深い理解が欠けており、特にイデオロギー的制約のある相対主義的な考え方などはまだこの先の問題といえる（陳勝前・李彬森 2015）。現在までのところ、ポストプロセス考古学に

関係する著作は、例えば I. Hodder の『Reading the Past』、B. G. Trigger の『A History of Archaeological Thought』、M. Johnson の『Archaeological Theory: An Introduction』、K. R. Dark の『Theoretical Archaeology』、C. Renfrew and P. G. Bahn の『Archaeology: Theories, Methods, and Practice』、T. C. Patterson によるポストプロセス考古学と密接に関連するマルクス主義の著作『Marx's Ghost: Conversations with Archaeologists』などが翻訳されており、Hodder へのインタビューもある(艾婉喬訳 2013)。陳勝前・李彬森(2015)のように、ポストプロセス考古学をよく理解している一部の中国人考古学者は、ポストプロセス考古学は欧米社会の成熟、ポストモダニズムとポストモダン科学の台頭に大きく影響を受けて形成されたことを知っている。しかし、そうした背景がない(あるいは相容れない)中国考古学では、ポストプロセス考古学の適用は抑えられているようである。

認知考古学は、中国人考古学者にとってより新たな理論である。楊建華・張文立(1996)によってヨーロッパにおける認知考古学の台頭について紹介されたが、認知考古学に関わる論文は 2000 年以降いくつか見られ、その中には K. V. Flannery and J. Marcus の『Cognitive Archaeology』の翻訳や、新石器時代の宗教などの議論を含む。

技術面では、水中考古学、環境考古学、植物考古学などが盛んになっている。また、デジタル技術の応用も盛んになってきており、3D 技術と VR 再生を利用してバーチャルな考古学実験室が設置される大学もある(張佳 2018)。このように先端的技術の積極的な導入が、特に 1990 年代以降一貫して行われているのは特徴的であり、非欧米国では随一でありつづけてきたともいえる考古学先進国の日本と比較しても、現在は同等かより徹底しているとさえいえる状況となっていると思われる。

その他、欧米考古学に由来する理論や方法、研究トピックなども紹介されており、さながら総花的に欧米考古学由来の理論・方法・研究トピック・新技術を貪欲に導入している(王巍 2019)。ただし、それらの定着の度合いについては、それぞれ差がある。全体的に、理論より技術が重視される傾向が強く、欧米考古学において多様化する研究と各理論に関する議論については、中国人考古学者はほとんど注目していない。このように理論を徹底的に理解しようとせずに、表面的に無理に当てはめるなどの問題もあるようである。

### 第 3 項 その他の要因

中国考古学における外国からの影響については概ね以上のような状況があり、また独特

の背景や特徴があった。このような考古学を形成してきた要因について、各時期の中国に係る国際的な状況や、中国の政治状況などの国内的な状況に大きく影響を受けてきたことが指摘できよう。

中国考古学は、その成立の初期から民族主義的な色彩を根深く持っているとしばしば言われており、「新中国」建国後の国威発揚の目的のもと、それに貢献すべく考古学はいつも民族主義的な色彩を保持したとみられる。それはおそらく、中国考古学のユニークな特徴を形成するいくつかの根本的な要因のうちの重要な部分を占め、欧米に由来する考古学理論が紹介にとどまったり、しばしば表面的にのみ受容されたりした要因でもあろう。その一方で、他の要因として、中国の歴史的コンテキストや中国国民の心性あるいは考古学者の置かれた状況なども無関係ではないであろう。前述の通り中国人による近代考古学の初めに史書の夏商の实在が発掘調査で証明されたことは、考古学の民族主義的傾向の強化にもつながり、中国の歴史を復元するという今日まで続く中国考古学の使命にも結びついてきたようである。

中国人の伝統的な思想・性向として、単一のイデオロギーを重んじるということはよく指摘される。ただし、それは中国に限ったことではなく人間のもつ傾向ともいえるため、鵜呑みにはできないが、今日の中国的考古学の独特なあり方を形作った要因の一つである可能性は考えられる。いずれにせよ、「新中国」の成立後の中国考古学はマルクス主義という国家的イデオロギーに適合した形で各種の実践を行ってきた。そうして考古学者は、様々な段階を経ながらも改革開放や経済発展の深化など取り巻く状況の変化とともに、新たな調査技術の導入や新たな調査項目などに直面しながらも、欧米のようなパラダイムの大きな変換にも立ち会うことなく今日に至っているようである。

### 第4項 まとめ

以上のように、中国考古学はその成立期から外国の考古学の様々な影響を受けてきた。初期の頃の欧米や日本からの影響、そして日中戦争を契機とする外国人研究者の撤退、内戦を経た後の「新中国」成立以後のソ連考古学との蜜月、その決裂と孤立などを経て、1990年代以降の中国考古学は、それ以前のものとは大きく様変わりし、欧米考古学の理論や方法に接近してきたことになる。それは世界のグローバル化と並行した「改革開放」や「一帯一路」などの国家戦略、そして経済成長を背景とした中国国内の変化に明らかに連動した学界の

変化ということができる。と考える。

このように見てくると、中国考古学は激動の歴史を経ているといっても過言ではないが、調査による資料の蓄積という面を除いて、学術的実践と議論を通じた純粋に内部的な発展はむしろ影が薄く、いかに学界の外部的要素つまり国家間の関係や国内の政治状況、あるいは国家の方針など、考古学を取り巻く状況に左右されてきたかということを感じざるを得ない。これは多かれ少なかれ、他国の考古学でも見られることであろうが、特に顕著でユニークなものの一つが中国考古学ということができる。

中国人考古学者には、外国由来の考古学理論を中国考古学に適合する形で、適用する方法を模索する研究者もごく一部ではあるが存在する。しかしながら、考古学理論がそのままの形で受容されない要因としては、中国考古学のたどってきた歴史とそこから形成されてきた考古学者の心性や態度があるとみられるが、かつてのように国外の情報の得にくさや偏りの問題や、特に「新中国」建国以後における国家の指導的思想に抵触しない形をとらざるを得なかったという事情も大きいであろう。

近年では、中国人考古学者による英語論文が国際的な有名科学誌や欧米誌に発表されることや、国際的な共同研究、国際学会やシンポジウムも多くなっており、かつてのような国際的な孤立ともいえる状況とは異なってきたことが強く感じられる。とはいえ、高度な科学的方法を駆使した調査も行われている一方で、中国国内の各地で実際に行われている調査研究や遺跡の調査などでは、相変わらず伝統的な考古学も併存しているのが実態であり、理論や方法への対応という点では大きく二極化している可能性が十分に考えられる。したがって、一面のみをとらえず総体としての実態を評価することも必要であろう。

## 第2節 民族考古学

以下の節では、中国考古学における欧米考古学由来、またはそれと密接に関係する理論や考え方に関する事柄を概観していく。ここではそのうち、「民族考古学」について扱い、中国考古学の特徴を抽出する手がかりとしたい。

なお、型式学の扱いについては中国における考古学的実践に広く関わるため、次章で取り上げる。

### 第1項 はじめに

考古学的過去の復元に民族誌を役立てることは古くから行われてきたが、1960年代の北米におけるニューアーケオロジ（プロセス考古学）の台頭以後、ミドルレンジ研究の一環として開始されたエスノアーケオロジ（ethnoarchaeology）は、過去と現在の橋渡しとして重要なものと位置づけられ、プロセス考古学の特徴の1つといえる。その脈絡においてエスノアーケオロジは、プロセス考古学がその目的を達成するための重要な方法の1つとして構築・確立させた方法といえることができる（Binford 1978）。その後もエスノアーケオロジ（民族考古学）はさらに展開・発展を見せ、考古学における一方法としてだけでなく、それ自体が現代における重要な分野として認知され、様々な調査研究が行われているように見受けられる。

中国で「民族考古学」という用語自体は、明確な形としては1980年代に中国に導入されたものである。「改革開放」の下、外国の情報が多く入ってきたことが背景とみられ、プロセス考古学の枠組みによるエスノアーケオロジや、その後の欧米人研究者によって展開・発展されていたエスノアーケオロジの影響が少なからずあったと考えられる。ただし、中国におけるその位置づけや実践の方法などをめぐって、様々な解釈や提案が出されるなど研究者の間で幾多の議論が繰り広げられ、しばらくの間は錯綜した状況も見られたが、「民族考古学」は中国では盛んに実施され深化してきたといえる。そのような経緯と状況も中国考古学の特徴に迫るための材料となる可能性が考えられよう。

外国の理論や研究結果などが紹介される際、その理論についての語彙、定義、および方法などの翻訳は、最初の重要なステップでもあろう。特に日本語のように片仮名で表記するよ

うな方法がない中国では、ethnoarchaeologyの「ethno-」と「archaeology」を分けて、それぞれを訳した「民族」と「考古学」を合わせて、「民族考古学」と認識されたようである。ただし、翻訳の常のこととして、「ethno-」と中国語の「民族」とは指し示す意味内容に実際にはずれがあり、その正確さについて議論したり、様々な代替命名法を提案したりする研究者もあった。何篤(1989)はethnoarchaeologyを「民族誌考古」と訳した。郭立新(1997)は、ethnoarchaeologyの成果は民族誌の形で保存され、考古学者はそれを利用することが多いため、一般的な民族誌と異なり「考古民族誌」と考えたほうがよいとしている。俞偉超と曹兵武はethnoarchaeologyを「民族学的考古学」と見なし、曹兵武(1991)はその研究範囲は考古学より広いと考える。また、梁釗韜・張寿祺(1983)や陳淳(1992)は「民族考古学」と訳したが、陳淳(1992)は厳密に定義する必要があるとする。韓建業(1993)は、ethnoarchaeologyを「考古民族学」とするのが合理的であるとしている。

以上のように様々な訳が提案されたが、全体的に見て、「民族考古学」が広く受け入れられており基本的に定着しているといえる。ただし、その意味内容については、上のように様々な捉え方があった。そうしたものはいずれも、考古学的過去が「未開」の世界に遺存しているとみるような素朴なものはないとしても、20世紀前半に世界で行われたような「民族考古学」と親和性のあるもの、プロセス考古学の脈絡で新たな役割が付与された「エスノアーケオロジー」ととらえるもの、また両者を包括させるものなどがあって一様というわけではなく、ニュアンスが異なることも多い。民族考古学について、独立した分野と主張する意見もあれば、考古学の中の一方法であるとする意見もある。

一方、プロセス考古学を実施するにあたって必要なもの、根幹となるものの一つととらえれば、当然プロセス考古学の理論や思想とセットで用いられるべきものと考えられるが、実際にはその理解や中国での実際の実践に幅があり、我流の解釈を含めて、民族考古学は様々な解釈されたといえよう。

後述するように、中国の民族考古学に関して議論が盛んになった契機には、中国人考古学者が自覚するかしないかは別として、プロセス考古学の影響を無視できないと考える。プロセス考古学は、歴史学としての考古学の否定という点を含めて、文化史的・伝播論的色彩の濃い伝統的考古学とは衝突するものと考えられ、プロセス考古学を真に導入するとすればそれは一種のパラダイム変換にあたると思われる。しかし、中国では、それに相当するような大変化というより、特に1980年代から1990年代にかけては、中国考古学で支配的なマルクス主義的あるいはマルクス主義を背景にもつ理論とその実践の方法を変えるという

意識をほとんど伴わず、それらを基本的に維持したまま、「民族考古学」という用語が移植されたとみてよかろう。

## 第2項 中国考古学における「民族考古学」の歩み

中国考古学における民族誌的類推やそれに類似する考え方自体は、近代考古学の誕生以後から、あるいはそれ以前から存在したと考えるむきがあるが、このような言説は、新しい学問分野や考え方の出現を論じる際には、往々にして見られることであろう。民族誌を参照することは日本でも戦前あるいはそれ以前から行われており、中国独自の発想というよりも、むしろ考古学の揺籃期から欧米にも見られたことといえよう。

民族考古学で優れた多くの足跡を残した汪寧生（1987）は、民族考古学の基本となる考えは中国人にとって長い歴史があるとする。そして、辺境の遠隔地に残ったものから先進地では姿を消したのを知る実例として「天子失官、学在四夷」（左伝 昭公十七年）、「礼失而求諸野」（漢書・芸文志）、「中国失礼求之四夷」（三国志 魏書 烏桓鮮卑東夷伝）を挙げるレトリックを用いている（汪寧生 1987）。このように古くから存在するという言説は意外にあり、辺境から古を理解する民族考古学を中国は率先して行ってきたという誤解や、民族考古学が少数民族のみを研究する分野という誤解を招く傾向に寄与しているかもしれない。しかしながら、これら汪寧生などの1980年代から活躍した民族考古学者は、実際には欧米の考古学や人類学の刺激を受けつつ、民族考古学に集中的に取り組んでいったことは注目できる。彼らは1980年代に欧米考古学あるいはプロセス考古学の理論や思想をそのまま中国で実践したというより、それらの刺激を受けつつ、一定の理解をしながら再解釈して実施していったといえるであろう。

さかのぼって、「五四運動」後、西洋の近代考古学と民族学が中国に浸透したが、蔡元培（1926）は「考古学資料における詳細な役割を知るために民族学によって証明される必要がある」と述べ、「疑古派」の創始者の顧頡剛は民族学と民俗学資料を使用して古代の習俗とシステムを考察し、民族学者の凌純生も古代の宗廟や陵寢制度を研究した（汪寧生 1987）。こうした段階を経て「新中国」建設以後には、国内各地の少数民族の失われゆく習俗と文化伝統の保護のために調査と記録に取り組まれるようになったとされ、蔡葵（1992）によれば、当時、考古学の専門的訓練を受けた汪寧生、李仰松、宋兆麟ら一部の研究者がそうした少数民族調査に参加しており、後に中国民族考古学の代表者となった。その成果は、考古学



的解釈に役立つものが含まれているという。

中国の「改革開放」に伴い、プロセス考古学も「民族考古学 ethnoarchaeology」も、中国の考古学者に紹介された（梁釗韜・張寿祺 1983）。この論文が発表されると間もなく中国の考古学界では議論が始まり、1980年代後半にかけて容観瓊（1985）、張寿祺（1986）、汪寧生（1987）などをはじめ多くの研究者が、既に述べたような名称をめぐる問題、民族考古学の意義や対象の範囲、あるいは中国の既存の学問の歴史で古くまでさかのぼる／さかのぼらないなどについて、議論が沸騰していくのである。そうした初期の議論の時期や内容をも、欧米考古学や人類学の情報の刺激があったことは明らかであり、それに加えて研究者の経歴や学識、立場などの差が見解の差に影響していると思われるが、そこには立ち入らない。いずれにせよ、民族考古学をめぐるここまで議論・論争が行われたことは、それ自体興味深いことといえる。

前述のように、民族考古学の定義をめぐる議論は1980年代の中国の民族考古学において大きな焦点であった。1980年代末、D. Stiles (1977) の「Ethnoarchaeology: A Discussion of Methods and Applications」が翻訳され発表されたが（丹尼爾・史泰爾斯（謝仲礼訳）1989）、これを含め欧米における民族考古学の論著などがいくつも紹介され、それらを通じて民族考古学の定義や考え方、方法など様々な面で、中国の民族考古学に影響を与えたとされる。汪寧生も自らの研究をまとめてほぼ同じ見解に至ったとされており、こうして、1980年代から90年代にかけて様々な議論を経ながらも、民族考古学の代表的なやり方である「民族誌的類推」、「仮説またはモデルの提出」、「仮説またはモデルの検証」などをはじめ、民族考古学の体系的な理解が進むとともに、中国での地位が開拓されていったようである（陳虹利 2018）。議論だけでなく実際の現場での調査研究も推進されていったが、2000年代以降は民族考古学をどう位置づけるかといった議論の状況から脱却していったようである。

### 第3項 「民族考古学」とその対象・目的

中国の民族考古学を巡っては、上記のように複雑な経緯がある。蔡葵（1992）は、中国の民族考古学は1930年代に芽生え、1958～1965年に形成され、1970年代以降に開発されたとした。これなどもプロセス考古学における ethnoarchaeology 以前からの動向とみる立場といえる。

一方、韓建業（1993）は、考古学的現象を解釈するためにモデルを提供することを目的とした革新的な「ethnoarchaeology」が1950年代に欧米で初めて登場したとし、1950年代から中国の考古学者が実施した少数民族調査から中国の民族考古学はさほど進展しておらず、特に社会組織、人間の行動、考古学的遺物の関係に関する研究には実例がほとんどなく、モデルを形成していないとした。さらに、遺跡からそのような問題をいかにして反映するかにはほとんど注意が払われていないとも指摘し、当時の一部の学者が、民族考古学の真の意味を理解せず「以前の仕事を正式な称号に変更する必要性を感じただけのために、民族考古学という名前を勝手に採用した」と強く批判した（韓建業1993）。

また、容（1999）は中国の民族考古学の事情や立場を重視し、静的な考古学資料が動的な理解を得るため、さまざまな民族誌データを使用して考古学資料を類推する分析を行うことを強調する。その研究は遺跡や遺物がいかにして当時のイデオロギーや宗教信仰、習俗などを反映するかに及ぶものであり、地域史や少数民族史に関する問題の解決に貢献するとしている（容観瓊1999）。

ここで、注意しておかなければならないのは、中国では「民族考古」という場合、しばしば漢民族以外の少数民族における考古学とみなされていることである。少数民族は周辺部に住むことが多いため、「辺疆考古」と呼ばれることもある。さらに、宋兆麟（1986）は、「民族考古学」は突厥考古、百越考古、西夏考古といった少数民族地域の考古学を指すべきと考えている。また彼は、「民族考古学」は考古学者が少数民族地域で考古学的調査を実施し、その起源と発展を研究しながら少数民族と漢民族の関係を研究することと主張する。このように、中国的に解釈され意味内容が大きく異なることも多い。

そのほかにも様々な見解が出されている：文字記録が欠如した少数民族の歴史復元（郭立新1997）；少数民族の地域で行われている考古学研究は「民族考古」であり「民族考古学」とは異なる（汪寧生2007）；民族考古学は「民族考古」ではなく辺疆考古は国境地域の少数民族地域に対する考古研究であり民族考古学とは程遠い、民族考古学の本質は民族学的アプローチのみを通して考古学資料を研究すること（汪仁湘2005）；辺疆考古学に民族考古学の理論と方法を適用すれば、器物の発見と文化の再構築を目標とする伝統的な考古学研究を打ち破ることができる（李東紅2005, 2008）。

ここに列挙した以外にも様々な見解があり、やはり百家争鳴の感がある。しかし、少数民族やある地域に焦点を当てた考古学研究は、基本的に通常の考古学とみなせよう。そのため、欧米における ethnoarchaeology——純粋なプロセス考古学あるいはそこから距離を置くも

のを含めて——とは、基本的に異質な考えが多く含まれているということは確かであろう。実際のところ、中国の考古学者がプロセス考古学やポストプロセス考古学といった思想や枠組みが異質な欧米の考古学理論を紹介する際に、それらの理論の成立の詳細な事情や根本的な要因についての解説を曖昧にすることも多い。すなわち、イデオロギーの違いを無視したり曖昧にしたりする傾向が強いのである。

したがって、欧米考古学に直接触れることが難しい多数の考古学者は、ethnoarchaeologyが自分たちの想像を超えるような問いを含んでいることを見落とす者がかなりいたと考える。

### 第4項 まとめ

1990年代あるいは2000年代以降、欧米考古学の理論が少しずつ理解され方法も導入されていくに伴い、中国考古学ではそれらの理論と方法に関する議論も徐々に深まっていったが、中でも民族考古学は非常に盛んに議論が交わされたものの1つである。既に述べたような「民族考古学」の名称をめぐる議論はもとより、その中国における研究の起源、民族考古学の対象や目的、その方法などには様々なものがあり、ここで扱った以外にも論文や著作等での議論は枚挙に暇がないほどである。民族考古学は「新中国」建国以降の中国考古学における欧米由来の理論・方法のうち、誤解や変質があったとしても、ある意味で最も急速に受け容れられたものといえるかもしれない。

しかし、実際に普及しているそれは、欧米の考古学理論とは一定程度切り離れた形で、中国考古学の脈絡の中で比較的自由に再解釈され、自らの考古学に比較的適合した様々な形に変容されたものが多く含まれるともいうことができよう。特に、翻訳や、新しい論文では欧米の事情や理論的背景をかなり正確に述べたものがあるにもかかわらず、全体としてはそれが正確に理解されなかったことが強く働いているといえよう。

こうした状況には中国考古学に関する、強いイデオロギー的背景や、旧ソ連考古学の影響と「歴史学としての考古学」への強い傾倒などに加え、学問的な国家への忠誠も価値観として存在していることも、様々な要因があることは想像に難くない。それだけでなく、現代の中国にとって少数民族をどう扱っていくかは、歴史学や考古学あるいは人類学的問題にとどまらず、社会的にも政治的にも重要な関心事であることが重要な要因として働いている可能性が十分考えられよう。誤解または都合のよい再解釈であったとしても、百家争鳴とな

るような活発な議論が行われたこともまた、その証左といえるかもしれない。

### 第3節 ジェンダー考古学

本節では、中国考古学における欧米考古学由来の理論や概念に関連して、ジェンダー考古学を扱う。ジェンダー考古学は、中国考古学にとってかなり新しい動きであるが、その受け入れられ方や理解のされ方はどうであろうか。ここにも中国なりの特質を考える手がかりがある。

#### 第1項 はじめに

最初に明らかにしなければならないことは、「ジェンダー考古学」と考古学における「性的分業」についての研究は、もちろん両者の間に関係はあってもその経緯や背景となる考え方に違いがあり、両者は基本的には区別されなければならないということである。なぜこのように書くかといえば、中国考古学では混同して理解するむきがあるからである。

やはり、中国で欧米考古学の影響が強まった1990年代に、ジェンダー考古学は紹介された。それ以降、前述の民族考古学ほどの活発な議論とはいえないが、ある程度の取り組みがなされ、考古学者間にも認知されるようになってきた。

ここでは、中国考古学におけるジェンダー考古学の受容とその実態などについて論じるが、まず次項では、ジェンダー考古学が紹介される前の状況について述べる。

#### 第2項 ジェンダー考古学以前

中国のフェミニスト運動は、20世紀初頭までに、男女平等、自由結婚、女性教育など、女性の権利を主張する男性知識人によって始まったと一般に考えられている。当時の「婦女解放」運動は、男性知識人を主体とした啓蒙主義と民族主義運動の一部といわれる。1920年代に中国で近代考古学が誕生してから1949年の新中国成立より前の期間では、主に出土文字資料を使用して、商朝の婚姻制度と母権制をめぐる検討した。1930年に郭沫若による『中国古代社会研究』が発表されたが、そこで甲骨文字に記録された内容から商朝の婚姻制度を推測する研究が行われた。それが中国考古学における古代社会の性的分業に関する初めての研究と見なされている（郭沫若 2011）。

「新中国」の成立以降、欧米考古学からの影響が考古学に様々に出現する 1990 年代より前、すなわち 1980 年代までについては、出土した考古学資料を通して先史時代の男女比や男女の葬制の差異、副葬品、墓の配置などに着目し、それに基づいて婚姻制度や家族関係を導き出した研究がしばしば見られる。そして、当時の社会において、男性に主導権が握られていたか、それとも女性に握られていたかなどにも言及されている。1950 年代から 1960 年代半ばまでの中国とソ連との蜜月により、中国考古学はソ連考古学の影響を受けたが、その影響はソ連との決別を経ても 1980 年代にまで及んだといつてよい。中国ではマルクス主義的な考古学を確立するため、マルクス主義理論を指導方針として厳密に遵守した。したがって、中国考古学者はマルクス主義（唯物史観）による社会発展段階を重視し、それを主な研究目的として論議するだけでなく、出土した考古学資料を通して、マルクス主義者が支持する「母権制→父権制→奴隷制→封建制」という社会発展段階の図式を証明・説明するのが考古学の目的であった（李伯謙 2006 : i）。

その時期、性的分業についての研究は、しばしば埋葬を対象として行われ、人骨によって被葬者の性別を判別し、被葬者の男女間で差異やパターンを抽出することによって婚姻制度や家族関係を復元しようとしたものが典型的なものである。前述のように社会における男女間の主導権についても論述が及んでいる。そうした検討の結果は、エンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』での先史時代における婚姻制度についての議論とよく一致しており、このように、埋葬時点での社会の発展段階がマルクス主義者が提唱した社会発展段階のどこに当てはまるかをもって結論とするパターンが多く見られる。

このように、中国の考古学者は性的分業についての研究を以前から行っており、伝統的に非常に重視してきたように見えるが、それをフェミニズムやジェンダー考古学との関わりで論じるには無理がある。すなわち、考古学者の G. Shelach（吉迪）は、それらの伝統的な研究法は単にマルクス主義考古学の研究モデルの派生物に過ぎないこと、先史時代の考古学的文化がいかにユニークな社会モデルであるかを議論したりその社会が母系社会であるか父系社会であるかを判断したりすることを踏まえて、社会変化に関するマルクス主義の基本理論を実証するだけであって、ジェンダー自体とは関係ないということを喝破した（吉迪（李静霞訳）2006）。

厳しくいえば、性的分業について研究した 1980 年代までの中国の考古学者は、古代のジェンダー間の差異やその差異を形成する要因を研究するためではなく、むしろ L. H. Morgan が提案しマルクス主義者が採用し擁護した社会発展段階を実証・擁護するためであ

るといえる。すなわち、マルクス主義理論は研究を行うために用いられるのではなく、研究の目的・終点であった。こうしたマルクス主義理論に対する扱いは、性別分業に関する当時の研究にとどまらず、そのほかに実施された様々な研究を考える際の有効な着眼点となる。

1990年代から現在までについて述べると、それまでの伝統的な性的分業についての研究が大幅に減少して停滞期に入ったのが1990年代である。性的分業についてより適切な研究が行われたり、さらなる展開を迎えたりする前に、中国考古学では別の問題についての研究が脚光を浴びるようになっていった。性的分業についての研究の停滞が、研究の主題の流行り廃り・移行と容易に関係するのであれば、過去の性的分業を真に解明することが目的ではなかったことになろうが、それについての確証はない。

### 第3項 中国のジェンダー考古学の始まりと現状

一方、欧米考古学との接触や交流の増加に伴い、欧米で進行中の様々な考古学的研究方法や理論が徐々に浸透してきた。1990年代以降、中国社会では女性主義が大きく発展し徐々に多くの分野に影響を及ぼしてきたが、まだしばらくの間は考古学には及んでなかったといえる。既に述べたように1990年代から欧米の理論や方法の紹介が多く行われるようになるが、下記のように2000年代に入ってようやく、ジェンダー考古学が中国考古学界に紹介された。

2004年、M. H. Johnson (1999) の『Archaeological Theory : An Introduction』の第8章から王蘇琦(2004)によって翻訳された「考古学与性別」(Archaeology and Gender)が、中国考古学では初めてポストモダンなどの観点を持つ欧米のジェンダー考古学を紹介したものである。同年、外国人考古学者とアメリカ在住の中国人考古学者によって書かれた『Gender and Chinese Archaeology』(Linduff and Yan Sun 2004)が出版され、2006年にその本は『性別研究与中国考古学』(林嘉琳・孫岩 2006)として中国語に翻訳された。したがって、中国の考古学者の目に触れ、一部の考古学者にはジェンダー考古学の重要性と必要性が認識されることになったが、学界全体では注目を集めなかった。多くの考古学者のジェンダー考古学についての理解は、伝統的な性的分業の研究を言い換えたもの、あるいは女性をメインとする研究という程度で、非常に浅かったといえる。

ほぼ同時期に、復旦大学の陳淳・孔徳貞(2006)によって発表された「性別考古学与玉璜

「社会観察」は、中国に在住する中国人考古学者が初めて欧米流といえるジェンダー考古学の観点から行った研究であり、古代の社会的な複雑性と早期国家形成期のジェンダー関係に注意すべきであることを述べた。そして論文中では、新石器時代の河姆渡文化～崧沢文化で、女性の副葬品が貴重な翡翠製装飾品などであるのに対し、男性は単純な生産用具と生活用品であるため女性の地位が高い母系社会と考えられているが、女性の地位が尊重されたのは経済活動の中で重要視されたからではなく、フェミニスト社会だったとはいえないと主張し、女性が社会的安定と結束を維持する役割を果たしていたとみた（陳淳・孔徳貞 2006）。このように、いわば本格的なジェンダー考古学は 2000 年代に入ってから開始されたのである。

ここで、中国国内で発表されたジェンダー考古学関連の論文・書籍を一覧にまとめてみる（表 1）。これは、中国学術文献オンラインサービス CNKI（China National Knowledge Infrastructure）のデータベースを利用して抽出したものであるが、このデータベースには修士（碩士）論文と博士論文のデータも収録されており、同様に検索した。ただし、修士論文については全件が収録されているわけではなく、「中国優秀碩士学位論文」に限られている。また、学士論文については、論文の被引用文献などで見い出されたものなど、筆者の調べによる。したがって、完全に網羅したものとはいえないが、概ね動向の把握には役立つと考える。

欧米におけるジェンダー考古学の紹介などを除き、30 件をリストアップすることができた。このうち No.1～27 が学術雑誌の論文と学位論文である。書籍を末尾の No.28～30 に挙げている。論文は 2006 年から 2018 年までの間に 27 件が出されている。上述した陳淳・孔徳貞（2006）は No.1 にあるが、その研究方法は考古学者と学生がジェンダー考古学の研究を行う際に重要な参考にされているようである。

これらの文献には中国語でジェンダーを意味する「性別」やジェンダー考古学「性別考古」という用語が用いられているが、学位論文を含むそれら計 27 件の文献の中 21 件が墳墓を分析資料とするものであり、明らかに偏りがみられる。

このような偏りについて、墳墓関連の資料やデータが手に入りやすいなどの事情も可能性としては留保しておく必要があるが、ジェンダー考古学が中国で紹介される以前に行われていた墳墓遺跡での性別分業の研究という伝統との関係が多分に考えられよう。本来、ジェンダー考古学が扱う対象は幅広く、過去のジェンダー関係の復元に限っても、人間活動の及ぶ様々な場が対象となり得るはずである。これらの研究では、性的差異が古代社会の中で



表1 中国におけるジェンダー考古学関連の論文・書籍

No.	論文タイトル	著者	掲載誌/学位論文/書籍	出版年
1	「性別考古与玉璜的社会学觀察」	陳淳・孔徳貞	『考古与文物』4	2006年4期
2	「墓葬習俗中的性別研究—以賈湖遺址為例」	王建文・張童心	『四川文物』	2008年6期
3	「晋系墓葬性別的考古学研究」	林永昌	北京大学碩士論文	2008年
4	「中原地区西周墓葬性別研究」	顔孔昭	北京大学博士論文	2008年
5	「性別角色与社会習俗研究」	王建文	上海大学碩士論文	2009年
6	「先秦女性研究—从社会性別視角的考察与分析」	白路	南開大学博士論文	2009年
7	「墓葬習俗中的性別角色和年齡結構觀察—以忻州窯子為例」	李丹	『伝承』	2010年3期
8	「甘青地区新石器時代性別考古研究初探」	樊鑫	中山大学学士論文	2010年
9	「性別視角下的商周婚姻、家族与政治」	耿超	南開大学博士論文	2010年
10	「以安陽殷墟女性墓葬為例再析當時女性的社会地位」	曹芳芳	河南大学学士論文	2011年
11	「民和陽山墓地的性別角色研究」	花晴	西北大学学士論文	2011年
12	「天馬一曲村遺址西周墓葬的性別考古学研究」	郭璐莎	広西師範大学碩士論文	2012年
13	「性別角色与社会習俗研究—以賈湖遺址為例」	王建文	『上海博物館集刊』	2012年0期
14	「新疆史前“化粧棒”器物組合的性別考古学研究」	王鵬輝	『辺疆考古研究』	2012年1期
15	「伝統考古学視野下的“女神”学説」	曲風	『社会学家茶座』	2012年4期
16	「“女神論”検討」	曲風	『重慶文理学院学报(社会科学版)』	2014年1期
17	「新中国女考古学家群体的形成發展与職業狀況」	章梅芳・孟欣	『中原文物』	2014年2期
18	「代海墓地性別考古学的初步研究」	徐政	『東方考古』	2014年12期
19	「甘青地区新石器時代墓葬的性別考古学研究」	馬洪連	西北師範大学碩士論文	2014年
20	「興隆窪文化房屋内遺存反映的性別問題」	喬玉	『北方文物』	2014年4期
21	「晋侯墓葬制度所反映的性別差異」	鞠栄坤	『史志学刊』	2016年3期
22	「石鼓山墓地性別考古学研究」	孫曉鵬	『三代考古』	2017年1期
23	「从生物考古学角度看山西榆次明清時期平民的兩性差異」	朱泓・侯侃・王曉毅	『吉林人学社会科学学报』	2017年7期
24	「東周時期齐国墓葬的性別考古分析—以新泰周家庄墓地為中心」	張森	山東大学碩士論文	2018年
25	「人類学視角下的中国性別考古学」	濮文清	南京大学碩士論文	2018年
26	「生物考古学視野下的梁帶村芮国居民性別分工初探索」	穆艾嘉・陳靚	『文博』	2018年5期
27	「殷墟墓葬两性社会角色的考古学研究」	王祁	『江汉考古』	2019年1期
28	『性別研究与中国考古学』	林嘉琳・孫岩(編)	書籍(科学出版社)	2006年
29	『女性考古与女性遺產』	賀雲翱(編)	書籍(南京大学出版社)	2011年
30	『甘青地区史前時代遺存的性別考古学研究』	儀明潔・樊鑫	書籍(科学出版社)	2018年

どこに表れるのかをメインとしており、社会的慣習、社会的役割、社会的概念、および権力構造などに関する研究が少ないという状況がうかがえ、現在まで続いていることになる。したがって、理論的背景や思想などとの関連が希薄な形で実践が行われている中国の「ジェンダー考古学」の実態の主要な一端を示している可能性が高いと考える。

そのほか、No.6 と 9 は甲骨文字を含む史料を対象とする論文であり、No.20 は唯一の 1 つの集落関連の資料を分析する論文である。また、No.15 と 16 はやや毛色を異にしており、トルコのチャタル・ヒュユク (Çatalhöyük) 遺跡の女性像について母神像ともされ母系社会とも解釈されたが、I. Hodder (2006) らは人骨の安定同位体分析や人骨の摩耗パターンの分析、死後分離された頭蓋骨の数などから男性と女性は平等の地位であったと考えた。それをもとに、中国の考古学者、特に紅山文化の「女神廟」の研究者の注意を喚起しようとしたものである (曲風 2012, 2014)。

No.25 は、欧米のフェミニズム運動と中国の女性解放運動を回顧したうえで、2000 年代から出現した中国のジェンダー考古学は欧米のジェンダー考古学のようにフェミニズムの影響を受けて形成されたものではなく、単に欧米考古学の影響を受けて模倣したものであったと指摘している。そして、それは中国考古学でフェミニズムとジェンダーに関わる理論や考え方などが欠如している原因でもともと考えている (濮文清 2018)。これは修士論文であるが、上記のような中国での現状において非常に重要な指摘であり、このような指摘もあることは明記しておきたい。

なお、表 1 では学士～博士の学位論文が 12 件と半数近くを占めており、ジェンダー考古学——中国流のものが多く含まれるが——は若い人には受け入れられやすいことを示唆するのかもしれない。しかし、仮にそうであったとしても、考古学で生産される多くの論文の中で、ジェンダーに関する研究が非常にマイナーであることに変わりはない。一方、ほとんどの中国の考古学者や学生は、ジェンダー考古学 (性別考古学) は、フェミニズムや抑圧に対する社会的な問題意識などとの関係があることを理解していると思われるが、実際にジェンダーに関する研究を行う際には、フェミニズムや社会運動との距離を保ちながら、現代の政治を遠ざけた研究を行う傾向が強い。表に挙げた論文では、ごく一部を除いて伝統的な研究方法や問題意識を払拭できていないものが大部分であり、伝統に基づく研究の中にジェンダー考古学の用語なり考え方なりを加えたものが多いように思われる。端的に言えば、既存の価値観の枠組みや中国考古学の枠組みを覆すようなラディカルなものではない、ということになる。

さて、そのように中国では、ジェンダー考古学としては特殊な面があるが、もともと、より一般的な面が示されていなかったわけではない。先に提示した『性別研究与中国考古学』（林嘉琳・孫岩 2006）は、中国におけるジェンダー考古学の先駆的なものであるが、欧米流の考古学理論の観点から中国の考古学資料を研究するこの論文集は、構成される全 12 篇の論文のうち、学史と理論の面から「新中国」の考古学界におけるジェンダーに関する研究を概説した 1 篇を除けば、他の 11 篇がいずれも墳墓・埋葬を資料として書かれたものである。研究内容は、「新石器時代から漢王朝までのジェンダー問題、男性と女性の社会的役割、社会地位、分業、いかにして財産を入手するか、権力関係などを含むあらゆる側面を網羅しており、黄河中流、平原から北西甘肅地域、万里長城、及び南西の雲南までの考古学的文化に及んでいる」と評されている（章梅芳 2008 : 93）。外国の考古学理論の観点を持って中国考古学資料を研究するこの論文集では、中国考古学における既存の性的分業における研究を批判するだけでなく、いくつかの意見を認める態度を持っている（吉迪（李静霞訳）2006 : 6-9）。

また同書では、①葬儀における男女の差異と死者の生前の社会役割と地位との間では必ずしも直接的に対等ではないこと、②中国の考古学者は「男性は外に出て働き、女性は家で家庭を守る」という性別役割分業が先史時代には既に形成されていたと根深く信じており、そのため考古学者は墓の副葬品類が男女で区別されることを予想し、循環論に陥りがちとなる、ということ指摘している（孫岩・楊紅育 2006）。批判として指摘されたこれら 2 点については、残念ながら、現在も中国の考古学の論文では見受けられる。さらに、著者らは女性に焦点を当てるだけでなく、女性の中で存在する階層的差異を含めて性別役割、分業と権力関係をも分析し、すなわち「woman」のみに注目するのではなく「gender」を中心として議論した（林嘉琳 2006）。しかし既に述べたように、その後の論文ではそのような視点はほとんどとられなかった、ということになる。

2010 年に南京大学歴史文化自然遺産研究所によって、ジェンダー考古学に関する中国で初めての学術会議である「女性考古学と女性遺産に関するシンポジウム」が開催された。その後、論文集として No.29 の『女性考古学と女性遺産』が出版されたが（賀雲翹編 2011）、考古資料のみをめぐる論議だけでなく女性考古学者や女性の非物質文化も対象に含まれた。やはり、ここでも中国におけるその後の論文にはほとんど影響を与えていないようである。しかし、このようなシンポジウムと論文集の存在や、No.25 のような論文の存在は、中国考古学で画一化し本来的意義にも欠けがちなジェンダー考古学の多様化と深化への潜在的な

可能性を示しているのかもしれない。

2018 年に出版された No.30 『甘青地区史前時代遺存的性別考古学研究』（儀明潔・樊鑫 2018）では、欧米のジェンダー考古学の台頭と発展についての社会的背景と考古学的背景を論じたうえで、甘肅省・青海省地域の先史時代における多くの考古学的文化のジェンダーおよびジェンダーと関わる社会文化現象を分析している。従来は墓や副葬品などを分析の対象とすることが専らであったが、本書では人物像の性別の識別や、「gender code」、「sexual ambiguity of anthropomorphic images in prehistory」などの研究が試みられている。

#### 第 4 項 中国の女性考古学者

ジェンダー考古学では研究主体である研究者自体に目を向けた研究も含まれるが、中国ではそのような研究はほとんどない。女性考古学者についての論述はごく僅かの傑出した女性を中心として紹介する程度であるが、「新中国女考古学家群体的形成发展与職業状況」が数少ない例外といえる（章梅芳・孟欣 2014）。

この論文では、現在の中国考古学に影響を持つ 1970 年代以前に生まれた女性考古学者 161 人を分析対象として、その人数、教育レベル、就職現状、研究方向、学術的地位および研究成果について詳細なデータを集め、それを踏まえて中国の女性考古学者がどのような職業状態にあるかということと、その特徴を明らかにし、さらに、新中国の女性考古学者の学術面と社会面についての貢献と影響を評価している。

しかし、同論文では 1970 年代以後に生まれた女性考古学者を分析対象から除き、また影響力をもつという限定があり、データ収集の際に『中国当代文博專家誌』（中国文物学会編 2009）を基礎として、『中国社会科学院考古研究所同仁録』（中国社会科学院考古研究所編 2010）や、各博物館、考古研究所、大学の考古学の学部や学科の教員情報しか扱っていなかった。すなわち、若手研究者や他の関連機関に就職した女性たちを含めていないということである。そのような制約はあるが、論文では、男性考古学者数は女性考古学者より遥かに多いこと、発掘経験のある男性考古学者は 88% であるのに対して女性考古学者は 12% であるという大きな差が示されている。また、2009 年と 2012 年の 2 年間に遺跡の発掘調査チームリーダーの資格を得るために申し込み、研修に参加した合計人数は、男性が 610 人、女性が 38 人しかいなかったことも判明している（章梅芳・孟欣 2014）。

著者らは女性考古学者の世代ごとの動向にも注目しており、中国において考古学への国家的な重視と支持の増大につれて女性考古学者は年々増加していると考えられるが、「第二世代」（1920～40年生まれ）と「第三世代」（1950～60年生まれ）の影響力によって、今後学際的な専攻を卒業した高学歴の女性たちが考古学に参入するとみている（章梅芳・孟欣 2014）。

### 第5項 まとめ

上で中国のジェンダー考古学に関する濮文清（2018）の修士論文での指摘にふれたが、欧米考古学の表面的な模倣に過ぎないという批判は、ある意味で的を射ていると思われる。確かに、近年の論文は陳淳・孔徳貞（2006）の影響や、おそらくそれ以前の伝統的な研究の影響もあり、考古学的過去における性的差異に関する研究が多く、かなり偏りがあることは否めない。それは欧米のジェンダー考古学の出現の背景や、固有とされる価値観を揺さぶり相対化するような思想はもとより、ポストモダンもしくはポストプロセス考古学などの思潮とは一線を画しているように筆者には見える。まして、権力構造やLGBTをテーマにするなど多様な展開と深化を見せている欧米考古学における状況とは、かけ離れていると思われる。ただし、濮文清（2018）の修士論文にみるような指摘が出てきていることは、変化の兆候なのかもしれない。

1990年代以降の中国考古学において、欧米考古学の理論や方法を形だけ、言い換えれば用語や概念の一部を導入する傾向は、このようにジェンダー考古学に顕著であるが、本論の他の節で扱った各トピックでも看取される。

## 第4節 認知考古学

本節では、中国考古学における認知考古学について述べる。前節までで民族考古学とジェンダー考古学を扱ったが、中国の考古学者にとって認知考古学は、それらと比べてもより新しいものといえることができる。そのため、研究の蓄積という点で日が浅く、考古学研究に広く拡散したり定着したりしているとはいえないが、これまでの状況からどのようなことがうかがえるであろうか。

### 第1項 はじめに

認知考古学 (cognitive archaeology) は、中国の考古学者にとってはより新たな理論ないし分野といえることができる。これも欧米考古学から中国に持ち込まれたものである。ポストプロセス考古学が開始される頃、プロセス考古学の立場からの対処として「心の考古学」が始まったとされ (松本 2000 : 24)、C. Renfrew (1982) の著作があるが、ポストプロセス考古学の隆盛期である 1980 年代を経て、1990 年代には欧米考古学において大きく展開を見せて現在に至る (松本 2000, 2003)。欧米の考古学界ではすでに広く定着しているといえよう。

中国について述べる前に、同じく非欧米考古学を実践し隣接する日本考古学での認知考古学の導入について見てみると、日本では松本直子らが 1990 年代に主唱し、遅くとも 2000 年頃までに研究が行われるようになったことが知られている。認知考古学の理論と実践をした松本 (2000) の学位論文の出版や、概説書 (松本ほか編 2003) の出版により広く知られるようになった。その当初から cognitive archaeology は「認知考古学」と訳されてきており \* (松本 2003 : 4)、名称は定着しているといえる。中国語で「cognition」は「認知」、「知覚」、「認識」と翻訳されることから、「認知考古学」と「認識考古学」という 2 種類の呼び方があるが、「認知考古学」のほうが主流とみられる。本論では、「認知考古学」を使うことにする。

---

\* なぜ「認識考古学」やその他の名称を用いず、「認知考古学」とするかについては、松本 (2003 : 4) に詳しい。

## 第2項 中国考古学における認知考古学

1996年、楊建華・張立文（1996）によって、ヨーロッパにおける認知考古学の台頭について紹介された。おそらくこれが中国考古学における最初の認知考古学の紹介であろう。その後、湯恵生（2004）は、旧石器時代の石斧の認知考古学的研究を行ったが、石斧が美術品でありえるかという問題\*について、認知考古学と結びつけて考えるべきとした上で、イギリスの認知考古学者 S. Mithen の「sexual selection（性的選択説）」を紹介している。認知考古学が紹介されるまでは、そうした旧石器芸術について考古学的な論述や論証をする考古学者は中国にはいなかった。

陳淳ら（2002）は、前期旧石器時代の小長梁遺跡の打製石器について認知考古学的検討を行った。加工技術や二次加工の痕跡の観察、使用痕分析などを行い、T. Wynn の幾何学的空間の概念によって知能を測定する研究方法を用いて、同遺跡の打製石器の製作技術は、現在の12歳の子どもの認知レベルを超えないとした。

また、新石器時代の興隆窪文化における廃屋墓の観察を通して、王闢（2011）は認知考古学を標榜しつつ「興隆窪人」の精神世界についての探求を試み、当時の「心」の研究をした。彼は、興隆窪遺跡の廃屋墓の特殊性を、考古学者が強い宗教的意義を持つ特別な埋葬システムと考えたり（劉国祥 2004）、祖先崇拜（陳葦 2008）と考えたりすることを批判し、愛する人の死への消極的表現とみて、当時すでに家族関係があったと考えた。

また、副葬された玉製品の位置から、玉製品は被葬者の階層を強調するために使用されたものではなく、単に当時の人が美を追求するために使用されたものかもしれないと考えた（王闢 2011）。筆者は、この結論をそのまま鵜呑みすることはできないと考えるが、彼は認知考古学の観点から中国新石器時代の遺跡を分析しようとしたはじめての考古学者といえよう。

そのほか、呂欣娛（2011）は、認知考古学が先史時代の宗教の研究を促進できると信じ、紅山文化の玉製品や、土偶、祭壇などを扱って解釈した。また、馬東東・裴樹文（2017）は、旧石器時代考古学における認知考古学的分析の方法と理論を回顧して、認知考古学が古人

---

\* 1986年、中国の現代美術史学者である鄧福星は「芸術の起源と人類の起源は同時に起こる」という大胆な仮説を提示し、中国美術界だけでなく考古学界にも強い影響を与え、その結果、1999年に考古学者・安志敏は、裴文中の『旧石器時代之芸術』を再出版にあたり石器を美術品として認めた（裴文中（安志敏編）1999）。また、楊鴻（1997）は『美術考古半世紀』の中で石器を中国最初の芸術品と見なしている。

類学の研究に多くの情報を提供することができるとし、考古学者がより厳密または多様な方法で研究する必要があると考えている。

### 第3項 まとめ

上記のほかにも認知考古学を標榜する研究はあるが、概ね次のような流れということができよう。1996年に認知考古学は紹介されたが、中国国内での研究としては2000年代になってから始まり、その後も散見される。しかし、認知考古学に関する研究は、中国国内においてまだまだ少なく、その質も玉石混淆の感がある。また、中国学術文献オンラインサービス CNKI で検索しても、「認知考古学」をキーワードとするものはごく僅かしか存在しない\*。

旧石器時代の研究ないし新石器時代の研究に適用されることが多く、特に旧石器時代の石器と、新石器時代の墓や宗教などに対象が集中していることがうかがえる。しかしながら、本来は人間行動のあらゆる部分に認知が関係すると考えられるため、認知考古学の対象範囲はあらゆる遺跡や遺物に及ぶはずである。したがって、対象には大きな偏りがある、ということができよう。

また、研究内容については、陳淳ら(2002)の旧石器の研究のように認知科学や脳神経科学などに近く、欧米における信頼できる水準の論文を参照したものがあ一方で、古代人の心性や宗教のような側面について認知考古学を標榜しつつ安易に扱ったものも見られ、全体としてはいまだ認知考古学が未定着であり十分に理解されるに至っていないことを示すと考えてよかろう。

認知考古学に限らず、中国考古学ではそうした外国の考古学に由来する理論が導入されるとき、その理論の背景となる成立に至るコンテキストなどの詳細な情報を含む、徹底的かつ建設的な紹介がなされない場合があるようである。したがって、なぜそのような理論や考え方が生まれたのかという事情や背景までは、読者である考古学者には深く考えられないことが多いといえよう。そのため、不適切な適用や説得力に乏しい結論などが生じていることも考えられる。

認知考古学は発展性のある分野だと考えられるが、現在のところ、まだまだ多くの研究者

---

\* キーワードに「認知考古学」が含まれるものは僅か6件に過ぎず、「認識考古学」は0件である(2020年10月26日検索)。



の注目を集めることができていないようである。

## 第5節 パブリック考古学

中国におけるパブリック考古学（public archaeology）は、欧米とは異なる形で展開している。パブリック考古学は、ここでもやはり 1990 年代に中国に一応導入されたが、あまり広まらなかった。その代わりに、“中国考古学独自のパブリック考古学”と呼べる動きが 2000 年代初期頃より開始されて現在に至る。

本節では中国のパブリック考古学について、現状と課題をはじめ、実践例などについて記述するとともに、中国考古学における今後のパブリック考古学のあり方に関する筆者の見解を述べたい。

### 第1項 中国のパブリック考古学

中国考古学におけるパブリック考古学の歩みを考えるとき、まず想起されるのは、早くも 1950 年に行われた蘇秉琦（1950）の「中国考古学は国民と向き合うべきだ」という提唱である。これはもちろんパブリック考古学とはいえない。この提言の背景には、恐らくその前年、1949 年の中華人民共和国の成立があると思われ、「新中国」の誕生という大転換の中、国民一体を目指した提言の一つであった可能性は高い。このように考えれば、蘇秉琦の提言には政治的背景・政治的意図があったことが考えられ、欧米のパブリック考古学とはその背景も思想も意味内容も異なっていると思われる。

前述のとおり、欧米由来のパブリック考古学が中国に入ってきたのは 1990 年代になってからである。持ち込まれた「public archaeology」という新しい言葉は、「公衆考古学」あるいは「公共考古学」と訳された（楊帆 2018b）。パブリック考古学は、中国ではアメリカからの「舶来品」と見なされている（姚偉均・張国超 2011）。初期において、本来の定義や理論についてはあまり紹介されず、深く理解もされなかった代わりに、事実上、中国独自のパブリック考古学ともいえるものが誕生し、現在に至るまで継続している。その特徴の 1 つは、基本的に研究者が市民に「教える」というスタイルをとるところにあると考えるが、これは、国民に対して考古学を説明し考古学的教育を与えることを通して、国民を文化遺産の管理と保護に参加させるという目的があったとみられる（高蒙河・鄭好 2013）。また中国で

は、とくにパブリック考古学的活動を行ってきた、と考える中国人考古学者は多く\*、中国のパブリック考古学は長期にわたって自身の道を歩んできたと思われている（高蒙河・鄭好 2013）。それは、パブリック考古学（公共考古学）の活動が、21世紀に入ってから中国では無障害といえるほど迅速に盛んになり、中国の考古学者に容易に受け入れられた原因の1つと考えられる。また、中国のパブリック考古学は、高速経済発展を背景とした、国家経済建設と考古学的発掘との矛盾や、考古学に関する国民の誤解などを解決する手段となったことは否定できない。

なお、中国語で「パブリック考古学」に当たる「公衆考古学」は一般の国民（＝考古学者ではない人々）に向けたもの、もう一つの訳語である「公共考古学」は政府が関与しているもの、というニュアンスの違いがあるが、「公衆考古学」の方が多く使用されているようである。以下では、広い視点で中国のパブリック考古学を見ていく上で、また筆者の問題意識から、あえてそれらの訳語は使用せず、仮に「中国パブリック考古学」と表記して論じることとする。

## 第2項 現状と問題点

「中国パブリック考古学」は、考古学の調査研究や華々しい発見などがある学界全体の中においては、事実上は日陰の存在といえる。とはいえ、遺跡の公開や博物館等での諸活動、マスコミやインターネット等を通じた理解の促進、考古学ないしは文化遺産に関する国民との対話など様々な取り組みがなされており、最近、北京大学に専門のセンターとして公衆考古芸術センターができるなど僅かに活気づいており、期待されている。

しかし、中国ではもともと考古学者と国民の間に大きな隔りがある。国民は考古学者が何をしているのか、考古学者の具体的な仕事について明確には知らず、また積極的に知ろうとしてこなかった。国民の考古学者のイメージは、他人の墓を掘る変な人たち、あるいは骨董品を専門的に扱う人、骨董品を鑑定する人などという、真偽入り混じったイメージが大多数を占めるのである。考古学者の仕事を知らないのは国民だけでなく、他分野の研究者も概

---

\* 日本でも、1950年代に研究者（岡山大学の近藤義郎）、学生、教師、地元住民が一体となって調査や学習活動などを行った岡山県月の輪古墳の調査が知られており、その後の行政が行ってきた発掘調査の現地説明会なども含めて、パブリック考古学は日本で古くからなされてきたという言説がしばしば聞かれることと類似しているかもしれない。

ね同様である。中国パブリック考古学は全体としてみると盛んになってきたが、そのような状況でも、多くの考古学者はパブリック考古学的活動にあまり参加したくないと考えていたり、あまり関心を向けたりしないのが実態のようである。その理由として、国民に説明することよりも、「研究第一」、「時間がない」という話も耳にする。これらは、できない理由を並べているだけのように思えるが、欧米やそれを中心に世界で展開しているパブリック考古学との本質的な考えの差があることが指摘できる。なお、中国での基本は上から下に「教える」というスタイルであり、その点も異質といえる。

国民はしばしば考古学に対する正しい認識を持っていない。その結果、考古学者が伝えたい研究内容に国民は関心がなく、逆に国民が知りたいことに考古学者が納得できる答えを与えられないことがよくある。このように、考古学者と国民の間には悪循環が存在するといえる。それでも中国パブリック考古学は曲がりなりにも行われており、かつてと比較すると相対的にはかなり盛んになってきているように見える。

以下でいくつかの事例を紹介しながら、その状況を見ていくことにしたい。

### 第3項 事例

#### 1 曹操高陵の例

曹操高陵の例を挙げる。2008年、盗掘者から「魏武王常所用慰項石」という文字が刻まれた石枕が押収された。盗掘者は石枕を河南省安陽市にある西高穴村の大墓から盗んだことを認め、河南省文化考古研究所はこの墓（西高穴2号墓）の緊急発掘を行った。2009年12月、国家文物局は考古学者や歴史学者、人類学者などを集めて発掘結果を検証した結果、この墓は曹操の高陵と認定され、国民に公表されるに至った。このニュースが発表されると、曹操高陵はすぐに全国で注目された。そして、他分野の研究者から国民までを巻き込み、この墓は本当に曹操の墓か？という「曹操墓の真偽」をめぐる激しい議論が繰り広げられることとなった（楊国平 2011）。

「曹操高陵」の発見は、中国国民が考古学に関心を持ち、議論に参加する契機となったといえる。それまでは、国民は考古学者からただ情報を一方的に受け取るだけであり、考古学者との相互交流は基本的になかったといえる（高蒙河 2014）。しかし、この「曹操墓の真偽」の話題により、国民は初めてインターネットなどを通じて考古学の検討に自ら参加し、考古学者に対して疑問を提示したり、あるいは反論をしたりというように、自らの考えを主張す

るようになったのである。これは、日本で 1972 年に発見された極彩色の壁画古墳である高松塚古墳をめぐる多くの報道がなされ、日本で国民的なブームとなったのと共通するところがあると思われる。

中国で国民の関心を惹きつけたことや、国民が様々な意見を言い合うようになったこと自体はよいことといえるが、メディアによって情報が錯綜したり、偽りの情報が広まったりしたことで、国民を巻き込んだ議論が白熱して展開したという側面もある。議論は、証拠不足や曹操墓と認定するのはまだ早いのではないか？ということや、曹操墓とする根拠の認定は誤りではないか？といったことが争点となったが、「考古学者たちは曹操墓で子どもの骨が発見され、それは幼少時の曹操の骨であると発表した」というフェイクニュースがインターネット新聞で公表されたり、別途報道されたりしたため、これらは考古学の信頼性に大きなダメージを与えた。この当時、考古学者はメディアに対して特に注意を払っておらず、そうしたことへの対策について考えていなかったため、これが仇となって信頼を失うことにつながった。これは現代社会における考古学とマスメディア間の問題ともいうことができ、考古学と報道については欧米のパブリック考古学でも真剣に議論される項目の一つである。

## 2 海昏侯墓

上のような曹操墓をめぐる一件を通じて、メディアを通じた国民への正しい考古学的知識の配布・紹介方法は、中国パブリック考古学にとって新しい課題となった。2015 年、「南昌海昏侯墓」は「曹操墓」に続き、再び国民の注目を集めた。一時期前漢の帝位についた海昏侯劉賀の墓とされ数々の重要な発見がなされたが、多数の報道と発掘の生放送は国民の関心を大きく引き出した。最も人気があったのは、発掘と同時に出土品の展示を行うことであった。発掘調査が完了してから数年後に、出土した遺物が博物館でようやく展示されることは中国考古学の慣行であり、重大な発見の場合であればなおさらである。遺物が出土してすぐに展示されることは全国的にみて稀なことであった。

2015 年 11 月 17 日から、1 万点の出土遺物から展示条件をクリアできる 110 点余りが選ばれ、その貴重な遺物が毀損しないことが確保された上で、江西博物館で 1 ヶ月間の展示が行われた（中国新聞網 2015）。国民は、テレビやインターネットで海昏侯墓のニュースを知ると、博物館へ展示を見に行くようになったのである。以前は、発掘成果が長期間非公開であることが一般的であったが、最近ではこのように国民へタイムリーにフィードバック

される機会が増えてきている。

最近では、発掘調査に GIS や hypobaric oxygen chamber（高圧酸素状態を保ち出土した遺物を保存する機器）などを使用することが珍しくない。国民はテレビ中継を通じて、考古学者の詳細な説明を聞きながら、科学技術を使用する発掘現場を見るようになると、考古学者は農民のようにスコップを使って土中の宝を掘る人に過ぎないといった認識は改まり、文化財保護の意識も普及した。

その際、海昏侯墓の発掘に携わる考古学者は、ニュースリリースの配信の基準を厳密にチェックし、考古学的発見と発掘調査の成果を段階的に公開し、非専門家でも理解できる言葉で国民にフィードバックした。

海昏侯墓の場合、国民との交流については、考古学者が主導し、中国パブリック考古学の実践として良い成果を得たといえる。しかし、国民が考古学と交流するようになって、考古資料に対する依然とした「宝物意識」を完全に変えることはできていない。その証拠として、墓から出土した貴重な竹簡・木簡<sup>\*</sup>や絹などよりも、「馬蹄金」という黄金製品のほうが、はるかに人気がある。付泉（2017）は、インターネットの「百度検索エンジン」で海昏侯に関わる各キーワードの検索回数を統計学的に調べた。すると、2016年10月17日午前8時までに、海昏侯についての検索回数は400万回を超え、その中で、「海昏侯墓馬蹄金」は190万回、「最初の火鍋」は101万回、「漢廢帝劉賀」は28万回、「孔子漆屏風」はわずか3890回であった（付泉2017）。これにより、国民は黄金と食への関心度が高いことが分かった。この発見がもたらした数々の学術的問題への関心というより、いわば世俗的な関心が高いといえることができるであろうが、そのような傾向は多かれ少なかれ多くの国や地方であると思われ、中国に限らず広く共通する課題といえよう。

### 3 発掘現場の見学

2007年、国家文物局（2009）は「条件を満たす発掘現場は一般市民に公開し見学できる」と発表した。これは現地説明会が以前から定着している日本の考古学者であれば驚くであろう。その後、市民が発掘現場を見学しながら考古学者の説明を聞き遺物を見るという、日本でいう遺跡の現地説明会のような形式の活動が、各地の考古研究所で行われるようになった。

---

\* 発見された多数の竹簡・木簡には「詩経」や「礼記」などの散逸儒教経典が含まれているなど、学術的に極めて重要とみられる発見についても報道されている。

ただし、発掘現場を開放することについての法的整備は不十分であり、事故が起こった場合の対処や責任の所在、損害賠償などの問題が挙げられている。これに対して、2016年に故宮博物院は、「明代御窑磁器」の展示で初めてVR技術を活用し、直接発掘現場へ行くことができない観覧者でも博物館の中で景德鎮の発掘現場を疑似体験できるようになった(李洁 2016)。

#### 4 考古学的教育

北京大学公衆考古芸術センターで年に1度、高校生向けのサマーキャンプを実施している。参加者は1週間、北京大学文博学院で考古学の講義を受けたり、研究者の説明を聞きながら博物館や発掘現場を見学したり発掘体験をすることができる(北京大学考古文博学院 2017)。また、上海復旦大学では、考古学以外の学科の学部生や大学院生に向けて中国におけるパブリック考古学の授業を開講し、各校区ではオンラインで講義を行い、受講者は常に500人を超えている(賈博宇・楊秀侃・郭雲菁 2010)。

#### 5 その他

自身の研究内容や論文などをブログや「微博」(SNS)を通じてユーザーに紹介している考古学者もいる。このほか、考古学者や学生、考古学的知識を持つ者や、考古学関連機関が、WeChatと呼ばれるSNSでアカウントを作成し、情報を掲載するとともに、一般の人ともやり取りをする例がある。

また、テレビ番組の「探索・発見」、「考古進行時」など高品質なドキュメンタリー番組が制作されるようになり、それらは人気があり、なかでも「我在故宮修文物」や「国宝档案」は若者にも評判が良い。

#### 第4項 まとめ

以上のように、中国パブリック考古学はそれなりに展開し進行しつつあり、一部には進歩的な取り組みも見られる。また、中国では国民の生活水準の向上もあり、考古学に関心を寄せる余裕が出てきたのは確かであろう。国民の考古学への理解度や考古学への参加という点については進みつつあると考えられるが、しかし依然不十分であり課題が多いといえよう。考古学への理解や考古学的知識の一層の普及には、中国パブリック考古学の実質的な歩

みといえるこの十数年に続き、さらなる取り組みが必要となろう。

しかし、様々な課題を考慮する必要がある。以下のように、疑問点を含めて課題は多岐にわたると思われる。

知識の普及はパブリック考古学における一段階に過ぎないであろう。知識を普及させ理解を進めるとしても、大発見や「宝物」に依存せず、ごくありふれた遺跡・遺物についての関心や理解をいかに引き出し定着させていけばよいであろうか。すなわち、今の価値観での顕著な発見だけでなく、多数の普通の遺跡や遺物から情報を引き出すことの大切さは遺跡の保護とも関わる重要なところだと思われるが、どのようにすればよいであろうか。このように、「いかにして」持続的に展開するかを考えるべきであろう。

その際、欧米のパブリック考古学の理論や事例を参考にしながら、中国パブリック考古学の発展を探索するのが有効な方法ではあろう。しかし、技術面の取捨選択による導入は比較的容易にできるとしても、中国の国家や国民にとっての誇りの源泉ともいえる偉大な過去の認識を進行させ続けることには全く問題はないであろうか。それは遺跡や遺物の取捨選択をこれまで以上に促進することはないであろうか。それ以外にも考慮すべきことは多く、少なくとも考古学者には、関連する様々な事柄の当事者として自覚しておくことが必要かもしれない。

欧米のパブリック考古学は、既に多くの書籍や論文が出されており、国際学会などでもかなりの発表数が見られるようになって久しい。そして、その範囲は単に一般市民の「教育」や遺跡の保護・活用だけではなく、また、考古学者と住民との関係だけでもない。先住民との関係にも及んでおり、その権利、アイデンティティの構築、考古学的調査研究や保護活動における彼らの参画などの諸問題に及んでいる。北米やオーストラリアなど、あるいは最近では日本でも見られる「再埋葬問題」など非常に微妙な問題を含んでいると思われる。中国の考古学者はどのような立場をとればよいのであろうか。

また、現代的な欧米流のパブリック考古学の展開のあり方やそこに活かされているものには、考古学と現代社会との関係、政治との関係、考古学者の営みなどを正面から捉えるものであり、ポストプロセス考古学の思想潮流やポストモダンの思想を経た考古学者の自省なども大きく働いていると思われる。そうした経験との縁の薄さは、「中国パブリック考古学」と呼ぶべき独特さを持ち合わせている。

【付記】 近年では中国パブリック考古学に関して国家的に力を入れるようになってきて



いる (e.g. 杭侃 2016)。直近では、2019 年開催の「世界考古論壇・上海」においてパブリック考古学のキーノート・レクチャーが行われた。欧米を主とする外国人考古学者を招聘してのこのようなイベントの蓄積の影響には注目しておく必要がある。

## 第2章 中国考古学と型式学

考古学における調査研究の方法や解釈の傾向には、社会的・歴史的な背景などによって、国や地域ごとにしばしば違いが存在する (e.g. Trigger 1989)。日本考古学がそうであるように、中国考古学にも独特な面が見られるというのは多くの研究者が認めるところであろう。中国と日本は距離的に近いにもかかわらず、両者の考古学的研究や活動の営みについては異質なところも多く、研究の基礎といえるような具体的な方法論とその考え方にも少なからず相違が見られる。中でも、土器の編年研究については、特に違いが顕著であるといえよう。

前章までは、中国考古学の特質の把握に役立てるため、外国考古学との関係やその適用のされ方などをトピックごとに述べた。本章ではさらにその特質に迫るために、前章では扱わなかった、中国考古学における型式学に関する事柄を論じる。

型式学は、19世紀のヨーロッパの考古学に由来するが、隣の日本考古学では型式学は考古学の「研究法」と深く関わるものとして、考古学者の精神的にも実践としても非常に重視されているといえる。また、中国考古学の初期においては欧米だけでなく日本からの影響も受けているため、本章では日本考古学との関係も考慮しながら型式学について検討していく。

周知のように、日本考古学の特徴の一つとして挙げられるのは、長年にわたる精力的な取り組みによって非常に詳細な編年、特に土器編年がなされていることである。本章前半の第1節では、型式学をめぐって学史的に日本考古学と比較することによって、中国考古学における土器の編年研究の特徴や問題点を把握する。そして後半の第2節では、中国考古学の特性を理解するための一助とすることと中国考古学における方法論的な進展にも寄与することを兼ねて、日本考古学に定着し特殊に発展してきた型式学的研究法の観点——日本に定着している型式学的研究法の手続きを強く意識した編年的検討——を、あえて中国東北部の新石器時代の土器に適用・実践することを試みる。それは、比較する場合、異なる対象で実践された例を比較するよりも、中国ですでに編年がなされている対象に日本的な方法を適用するのが最もわかりやすいと考えるからでもある。

## 第1節 研究史と問題点

### 第1項 初期の中国考古学

まず、中国考古学ないしその方法論の特徴について検討することにした。中国では、20世紀初め頃から欧米人や一部日本人という外国人研究者による調査研究が行われた。その段階を経て間もなく中国人研究者による主体的な調査研究が行われるようになったが、そうした流れは、後述(本章第2節)する中国遼東地域でも同様といえる。遼東半島では1960年代に新石器時代の考古学的文化の序列の基本ができた(中国社会科学院考古研究所ほか2009)。それ以後、中国人考古学者によって考古学的文化や「文化類型」の細分などがなされてきた。その重要な要素である土器やその編年について、どのような視点や扱いがなされてきたかは筆者も多少検討したことがあるが(楊帆2013, 2018b)、ここでは型式学的研究法の観点を中心に中国考古学をより詳細に検討する。

中国では古器物への関心が高く、宋代・清代に盛んであった金石学や、清朝末期の甲骨学が自らの伝統的な研究の流れとして存在し、それらは特に清朝で発展した(西嶋1976; 飯島2003)。しかし、それは文字やその記載内容に関する研究が主体であり、様々な物質文化自体から過去を復元したり遺跡を発掘調査したりする考古学の体系が自ら生み出されることはなかった。19世紀末からの欧米・日本人による中央アジア等への探検の段階を経て、外国人による本格的調査の実施は20世紀に入り中華民国が成立してからであった。J. G. Andersson、鳥居龍蔵、濱田耕作などの欧米・日本人研究者による欧米流ないし西洋近代科学的な考古学の実施と調査の刺激を受け、中国の歴史は中国人自身が調査研究すべき、との認識が生まれた(飯島2003: 13)。アメリカ留学をした李齊らによって1920年代から開始された中国人独自の調査によって、中国は20世紀前半のアジアにおいて、日本に次いで自国民による組織的な考古学的調査が行われた極めて稀な国となったが、当初は西洋流の考古学という共通した方法が用いられたことは特筆できる。

中国では1930年までに“型式学”が紹介されたが、実際にそれを実践的に使用したのは、やはりアメリカで考古学と人類学を学んだ梁思永による研究においてである。1930年、彼は“型式学”的に西陰村遺跡出土土器の分類を行ったが、記号で器形の特徴を総括することが“型式学”の強い実用性を体現するとし(梁思永1959)、彼は中国での“型式学”の基礎

を作ったといえる。しかし、そこで用いられた“型”と“式”には時間的変化の関係がなく、その分類の結果は年代的な序列とはいえないなどの問題がある。これは西洋流の型式学あるいは考古学の方法の導入期の状況ではあるが、必ずしも十分に咀嚼されたものではなかった可能性がある。

日本人と欧米人による「型式学」に関する著作もこの時期に中国で紹介された。Monteliusの著作を翻訳し、『考古学研究法』として日本に紹介したのは濱田耕作である（モンテリウス（濱田訳）1932）。また、濱田の代表的著作の1つとして知られる『通論考古学』（濱田1922）は、1931年に『考古学通論』（濱田（兪劍華訳）1931）として中国語に翻訳されている。この中には、「型式学の祖」とも称されるO. Montelius（1903）「Die Methode」の方法の要点も収められており、それが中国で紹介されたことになる。それに引き続き「Die Methode」自体が、1935～1937年に相次いで、『考古学研究法』（孟徳魯斯（鄭師許・胡肇椿訳）1935a-e, 1936）と、『先史考古学方法論』（蒙徳留斯（滕固訳）1937）という2種類の翻訳書として刊行された。なお、この「Die Methode」は1928年から中国の大学でテキストとして用いられ始めたといわれる（陳洪波2011）。また、C. L. Woolley（1930）『Digging up the Past』が1935年に『考古発掘方法論』（呉理（胡肇椿訳）1935）として出版されている。

これらの翻訳書は全て、西洋流の方法論に関するものである。ここで、イギリスでエジプト考古学者のF. Petrieに師事し、日本に型式学的研究法をはじめ西洋流の考えを積極的に紹介した京都帝国大学の濱田耕作の著作が翻訳されていることは興味深い。型式学を含む考古学研究法に関するMonteliusの考えや著作は、前述のように濱田によって日本で紹介されたが（モンテリウス（濱田訳）1932）、ほどなく中国でも紹介されたことになる。Montelius（1903）は、①同種の遺物群を型式に分類したのち、②各型式が徐々に変化するように配列し、③生物学に由来する「痕跡器官」の概念を用いるなどして型式の時間的序列を推定したうえで、④層位的に検証する、という手順を明瞭に述べており、仮説検証の手続きを非常に明確に意識したものといえる。これは、型式学的研究法の「古典」と言えるものであり、現在でも世界的に知られている。

大局的にみて、初期の中国考古学は、型式学や層位学という点においても西洋流の考古学と大きくかけ離れたものではなかったと、ひとまずはいえよう。ただしその後、日本と比べて型式学は必ずしも十分に発達してこなかったと思われ、考古学導入以前の伝統的な金石学の伝統なども多少なりとも現在の中国考古学に影響していると思われることなど、差異

がある（後述）。

## 第2項 型式学に関する中国考古学の状況

では、その後の展開はどうであろうか。まずは日本の状況を簡単に述べる。日本における西洋流の考古学の最初の導入は、1877（明治10）年の E. S. Morse による大森貝塚の発掘からとされるが、1910年代から20年代には再び濱田に代表される西洋流の新しい考古学の方法論が本格的に導入され、大正期の実証主義的な風潮の中、型式学や層位学に立脚した科学的な調査研究が急速に定着・浸透していった（勅使河原1988）。1920年代後半から30年代には、それが山内清男や森本六爾といった新しい世代の考古学者によって精力的に展開された。

山内は、層位学的に精度のよい証拠を得ることを念頭に調査を実施し、関東地方の縄文土器型式を7段階に分けることに成功しており、現在までほぼ変更の余地のない編年を作り上げた（山内1928）。山内は縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器をさらに6型式に細分することにも成功しており、器形や文様、特に文様帯の非常に細かな変化を層位的に捉えている（山内1930）。さらに、1937年には、北海道から九州に至る縄文土器の全国編年網を完成させるに至っている（山内1937）。ほぼ同時期に弥生土器研究においても、関東から九州に至る編年網を完成させるに至った（森本・小林編1938）。このように、現在にも通用する縄文時代や弥生時代の土器編年や時期区分の基礎が、集中的に形成されていったのがこの時期である。

一方、中国では1920年代前後の世界的に分類・編年が盛んであった頃に、前述のような西洋流の考古学の方法に直接・間接に触れる機会があり、考古資料を分類しようとする動きが多少ながらあったことは注目できる。しかし、中国では日本に比べれば分類・編年の実践は活発ではなく、また自国民による独自の考古学研究の開始期と重なったためか、分類・編年や考古学の方法に関する理解については、残念ながら不徹底なものであった。

1940年代、李済や蘇秉琦は、型式学における研究の方法を自分なりに作り上げた。しかし、李済が大陸を離れて台湾に移ってからは、中国（大陸）の研究者は李済の若い頃の研究成果を放置したまま顧みることはなかった。「新中国」としての中華人民共和国が成立した1949年以後、考古学は盛んになったが、中国（大陸）考古学での型式学に関係する研究において李済の方法はほとんど顧みられず、蘇秉琦の方法を継承・発展させる方向で進行した。

蘇秉琦は、形態と製作方法により、器物を「類（型）」、「小類（亜型）」、「組（式）」に分けている（蘇秉琦 1984a；陳星燦 1997）。これは、大きな分類単位である「類（型）」に包括される「小類（亜型）」、さらにそれに包括される小さな分類単位である「組（式）」というシステムであり、それを踏まえて、共伴する器物によって墓群全体の年代区分が行われている。現在の中国考古学の方法は、これを基礎としている。

西洋や日本からの影響があつたにもかかわらず、中国考古学において型式学的研究がさほど発達せず個性の強いものになってしまったことは、自国民の民族意識と関係して早期に自国民だけで調査研究を行うようになったことや、日中戦争などのため外国からの影響が早く途絶してしまつたことが理由として挙げられよう。また、戦後、特に 1949 年以降は、マルクス主義的發展段階論に立脚した既存の發展史観に、考古学的解釈を当てはめようとする研究が長く続いたことも（小澤ほか 1999）、考古学の個性を強化する一因となつたかもしれない。

こうした学史的またはイデオロギー的脈絡については、現在の中国で型式学の代表的研究と見なされる蘇秉琦（1941（1984b 所収））の「瓦鬲的研究」（後述）に対しても、後に北大考古專業資産階級學術批判小組（1958）が『考古』誌上でその研究法を「ブルジョワの學術思想」として強く批判した。このような型式学に対する批判はソ連考古学の影響といえるが、当時のマルクス主義と毛沢東思想を遵守する当時の社会環境において、器物の形態変化によって年代の序列を求める研究法は「唯心論」であり、主観的な仮説で危険な研究法であるとする旨の批判である。型式学に親しんだ他国の考古学者には偏見とも映るであろうが、こうした経緯は文化大革命を経た今日にもなお、影響を与えているように思われる。現在までに型式学的研究法の原理とその実際的な応用について研究した例は極めて少なく、ほとんど顧慮されてこなかったといふことができる。型式学的研究を、欧米以上に重視するようになった日本とは著しい対局をなすように見える。

また実践面において、中国考古学では「型」・「式」を分ける基準が曖昧である。分類基準となるのはまず器形であるが、器形全体に注目することもあれば、口縁部のみに注目されたり、底部のみに注目されたりすることもよくある。何を分類基準にするかという理由が明らかでなく、主観的な基準の選択と分類がなされることがしばしばである。分類は型式学の研究において肝心な一歩であるため、できるだけ多角度から検討し、その中から分類において意味のあるものを探し出すべきであり、初めから 1 つの属性に絞り込むことは危険性が高い、というのが一般的な考えであろう。また、型式学的な変化を研究するとき、1 つの属性

だけでなく、その他の属性についても配慮し、属性間の関係を検討すべきであるという主張も当然あり得るが、その点の配慮もなされないことが非常に多い。

土器の器種の命名に関して、李済（1990）は次のような3つの方法を提示している：①古い字形と実物の形を比較してそれらの「名実関係」（対応関係）を決めること、②銅器の名称から土器の名称を推定すること、③これら2つの方法が使えないときには一般的な名称を使うこと。これに従って命名された土器の器種名が伝統的に継承されてきた。また、中国の考古学者は分類にあたって異なる器物を同じ名称で呼んだり、同様の器物を異なる名称で呼んだりすることが多く、特に土器についてはそうである。現在に至るまで、中国考古学における型式学の実践・応用の際には、しばしば蘇秉琦（1941（1984b 所収））の「瓦鬲的研究」が参照され、上記の李済の考えと相俟って、青銅器と対比して類似した土器の器種に「鬲」「罍」「鬻」「盃」「鼎」「罐」のような青銅器と同様の器種名が使用されることにつながっている。青銅器の古来の名称を重視する姿勢は、金石学の長い伝統にも大きく関係していると思われ、おそらく考古学者のエスニック・アイデンティティと深く関わる歴史的コンテクストが大きく影響していることがうかがえる。また、そうした名称を使用することで満足し、器種というカテゴリーを科学的に探索するための分析を阻害している可能性も考えられる。

一方、日本では弥生土器の煮沸形態・貯蔵形態・供献形態の3種が認識されてきたように、器種の形態と機能の関係に早くから関心が持たれてきた（森本 1934；小林 1935）。これは前述のように、日本における型式学的研究や編年網の確立の時期にあたる。中国考古学では、伝統的で「権威ある」器種名をつけることで満足するためか、機能や用途の客観的追求は現在も盛んではない。このように、中国考古学は型式学や考古学の方法でも独特な傾向をもっていることは確かといえる。

中国の調査報告書では、客観的視点から事実関係を詳細に記したり、多数を網羅的に掲載したりする努力がなされることは少なく、編者の目にとまった典型的な器物が選択的に抽出され編者の分類に従って掲載・公表されることが一般的である。また、日本や韓国のように遺跡ごとに報告書として一書を成すことは、実際の調査に比べて極めて少なく、記述も簡潔にすぎる傾向が強い。実測図も細部を表現しないなど詳細さを欠き、信頼性も高いとはいえない。したがって、日本や韓国の詳細な型式学的検討を志向する研究者には、検討が容易ではないことになる。以上は、求められる情報の質や量に日本や韓国とは異なる点があることを如実に示していると思われる。型式学を重視する立場からは、型式学が軽視されている

と映るであろう。

型式学に対する中国考古学の姿勢の特徴として、筆者は以下のようにまとめることができる。と考える。

- 1) 土器の場合、個体の全体的な器形・胎土・色調などを大まかに把握する傾向が強く、文様の細部や器形の細部などにはさほど注目されない。
- 2) 型式学的な変化を追うという視点があまりとられず、日本考古学の視点とは対照的である。
- 3) 型式学的な仮説を立てた後に層位学的に検証するという仮説検証の過程、つまり型式学的研究法が明示的に意識されていない。
- 4) 対象は経験的に類型に分類されるだけであるため、分類に研究者の主観が入る余地が大きい。

中国では、年代を知ることは重視されてはいるが、分類自体が目的化され、分類を通じて何を解明しようとするのか明らかでないことも多い。日本では、既述のように 1930 年代に土器の編年研究が盛んに行われたが、編年をはじめ個別的な研究や形態に関する研究が考古学の目的であるような傾向を批判して、赤木清（1937）は考古学本来の目的である歴史研究、すなわち経済的な社会構成の究明をすべきと主張した。これは、土器編年の確立を急務とする山内のほか甲野勇や八幡一郎との間で「ひだびと論争」という学史的論争となった（甲野 1937；赤木 1937）。日本では、世界的に見て極めて詳細な全国編年網ができるに至っているが、早い頃からこうした議論もありつつ推進されてきたことは注目しておくべきであろう。

なお、一般的に伝統的な型式学では器物の形態や文様などを観察し、分類を行ってきたが、このような方法は有効で重要な効果を発揮するのも確かであろう。ただし、このような鑑識眼的手法は有効ではあるが、分類の過程や判断基準を明示することには困難も多い。その解決法の一つとして、次節で述べるように、属性分析や多変量解析などの計量的方法は型式学的研究法の一環としても矛盾なく扱えると思われるため、拒否反応を示すことなく、採用を検討すべきであろう（横山 1985：67-73）。

### 第 3 項 日本考古学における型式学的研究法の展開

横山浩一（1985：44）は、概説として著名な「型式論」の中で、型式学を「考古資料の分



類学」と位置付けた。遺跡出土の資料を混沌の中から脱出させる第一歩が分類であり、分類には情報の圧縮などの重要な役割があることを説き、しかし分類が適切に行われなければならないことも同時に述べている。そのうえで横山は、Montelius を発展的に踏襲した正統派的立場に立脚しながら、明確に分類学と位置付け直すとともに、属性分析や多変量解析などの分析法についても触れている（横山 1985）。

横山は、Montelius の「古典的型式学の原理」を概説する。要約すると、①型式分類し、それを時間的に少しずつ変化するという仮定のもとに整序するが、一連の型式組列（セリエーション）は、それだけでは両端に位置付けられるもののうち、どちら側から開始されるのかを特定できない。②しかし、単純→複雑などの「進化的セリエーション」によって変化の方向を特定するのは困難であり、そこで Montelius は、本来の機能を失った後も痕跡的に残っている「痕跡器官」の概念を援用する（本来把手であったものが、ほんの手がかり程度の付加物になったり、意味のある図像からしだいに意味のない文様へと変化したりするという例を挙げている）。こうして型式の一連の変化の方向性を特定する。③しかし、そのままでは机上で作られた作業仮説にすぎず、層位学的方法によって検証されなければならない。つまり、型式学的推定で古いと判断したものが下から、新しいと判断したものが上から出土すれば検証されたことになり、複数系列の一括遺物の共存関係でも検証可能である（横山 1985）。

このような手続きは、日本考古学に基本的に定着しており、そのため各時代にわたる有効な編年につながっているが、それを強く意識しつつ分析過程を明示したのものとして特に目立つのが、属性分析的手法で土器を分類する研究である（高橋 1981；田中 1982；田中・松永 1984；溝口 1987；中園 1988, 1991, 2004；ほか）。これは、「大量の資料を精細にしかも計画的に検討する」ものであり、「物の持っている性質（属性）を個々の単位に分解して資料操作を行う手法」である（横山 1985：67）。ブラックボックス化しやすい分類・編年の手順を、より明示的にする意味でも重要な方法といえよう。したがって、以上のような型式学的研究法と属性分析の方法を、中国の対象に適用してみることも重要であろう。

なお、中国考古学では 1980 年代頃から数量的分析手法によって漢墓や、人骨の分析、あるいは磁器の胎土分析に適用した研究が出るようになってきた。しかし、土器編年に多変量解析を用いた例は非常に限られ（余静 2011；韓康信・鄭曉瑛 1992；陳鉄梅ほか 1997；陳鉄梅 1985；ほか）、それらは前述のような型式学的理解に基づくというより、分類を目的として計測データに機械的に使用したものという印象を受ける。ここでも、型式学についての

理解あるいは重視の程度に差がうかがえる。

日本において計量的手法、特に多変量解析を用いたものは1970年頃から徐々に増えてきている。特に関係する学会として日本情報考古学会があり、1990年代から活動している。石器や土器はもちろん、青銅器、人骨、古墳の墳丘や石室に至るまで様々な分析が行われるようになってきたが、全体の研究の数に比べれば適用数としては必ずしも多いとはいえない。そのうち、土器の型式分類や編年などに適用した例は限られているが、中園聡によるものなどは型式学的研究法や属性分析を意識しており、実際に論文中で属性分析と多変量解析を併用したものが多 (e.g. 中園 1991, 2004 ; ほか)。

なお、ここで挙げた属性分析の多くは、型式学的研究法の手順に則り、非計測的属性を手作業で分類・分析したものである。これにより分析過程の明示に役立つが、さらに計測的属性を用いた多変量解析を適用することで以前の分類の正しさを評価したり、問題点に気付いたり、新たな発見をすることなどが期待される。また、属性分析で非計測的属性を扱う場合、本来連続的な変異をしばしば直感的・恣意的に区分して扱わざるを得ない。そうした影響を減じるのは計測的な変量を用いた分析であり、可能であれば多変量解析も用いるべきであろう。

## 第2節 型式学的研究法の検討—新石器時代中期土器での実践を通じて—

前節で述べたように中国考古学の研究法は独特の個性をもつ。それに対して、日本に定着している型式学的研究法の手続きを強く意識した編年的検討を適用・実践しようとするのが以下である。

### 第1項 はじめに

これまで適用されることがないレベルで属性分析と多変量解析を、中国新石器時代の土器に適用してみることにする。すなわち、属性変異を抽出して、型式学的仮説に基づいて整理し、各属性間の相関を検討したうえで、型式分類を行った後に器種間の共伴関係から様式に分け、最終的に層位学的検証を行うという、型式学的研究法に準じた流れをとることになる。さらに、形態の計測値に基づいた多変量解析も実施する。

### 第2項 資料と方法

中国新石器時代の土器への適用を実践する。すなわち、日本考古学界に定着している型式学的研究法の手続きを強く意識しつつ、属性分析と多変量解析（主成分分析）も適用する。そのために、層位関係が把握されているまたは遺構の検出状況が良好で、ある程度の数の土器資料を確保できる遺跡を選択する。前述のように、それに適う報告書が出版された遺跡は限られるが、それらの条件を概ね備えた中国東北部の新石器時代遺跡、白音長汗遺跡を扱う。この遺跡は内モンゴル林西県に所在し（図1）、1988年から1991年にかけて内蒙古文物研究所による3回の発掘で7264.3m<sup>2</sup>が調査された（内蒙古自治区文物考古研究所2004）。この遺跡から出土した土器等の特徴は、興隆窪遺跡とほぼ一致しているが無視できない違いがあり、「興隆窪文化白音長汗類型」と名付けられている（郭治中ほか1991）。

報告書では、本遺跡を「一期」から「五期」に分けているが、このうち「五期」は青銅器時代であり他の時期とはかけ離れている。「一期」から「四期」までが新石器時代であり、方形の竪穴住居跡を主体とする集落が形成されている。本遺跡では2つの環濠が隣接して発見されており、住居跡の大半は環濠内に営まれている。つまり、新石器時代の環濠集落と

いえるが、環濠の外にも一部に竪穴住居が見られるほか、石棺墓からなる墓地も検出されている。

なお、新石器時代の4つの時期のうち遺跡の主体は「二期」であり、土器は古い「二期甲類」と、新しい「二期乙類」に分けられている。ここでは、この「二期」を主な対象として分析を行うが、型式学的に連続性がある可能性があるため、「三期」のものも含めて検討することにする。

検討の対象とする主な器種は「筒形罐」と呼ばれるものである。煮炊き用と考えられ、深い筒形を呈する平底を器形上の特徴とする。これは中国東北部の新石器時代土器の特徴であり、日本では深鉢に該当する普遍的な器種といえよう。筒形罐は、通常の円筒形に近いもの（ここでは「筒形罐 A」と呼ぶ）のほか、胴の張った筒形罐（筒形ではないためそう呼ぶには躊躇するが報告書中で使用されている名称であり、便宜的に「筒形罐 B」と呼ぶ）がある。また、「盆」・「碗」・「盤」などと多様な器種名で呼ばれている小型の鉢形土器があるが、型式学的に異なる器種であるという保証はないため、ここでは一括して「鉢」と呼ぶことにする。

なお、後半では全形がわかる筒形罐 A の計測値に主成分分析（PCA）を適用し、さらなる検証と情報を得ることにする。

### 第3項 型式分類と分析

以下では、まず、メインとなる筒形罐 A から検討を施し、その後、その他の種類について検討を行う。

#### 1 筒形罐 A の型式学的検討

##### 口縁部形態

筒形罐 A の口縁部断面形態を次の11種類に分類した（図2）。

- 1類：外面に低く小さいコの字状の張り出しをもつもの。口縁部上面は内傾する
- 2類：1類よりやや大きな張り出しをもつもの。口縁部上面は内傾する
- 3類：2類と同程度の張り出しだが、上下にやや長く拡張し、口縁部上面が丸みをもつもの
- 4類：外面の張り出しが大きく拡張するもの。口縁部上面が丸みをもつ

5類：外面の張り出しの程度がやや弱い、上下にやや長く、口縁部上面は丸みをもつもの

6類：口唇部が尖り気味でやや外反するもの

7類：口縁部がやや外反するもの

8類：口縁部に張り出しや外反がないもの

9類：2類や3類に似る比較的小さな拡張部をもち、拡張部外面が内傾するもの

10類：9類よりやや大きな張り出しをもつもの

11類：10類に似るが張り出しが大きなもの

以上を型式学的に配列すると、完全に1系列とするのは困難と思われる。図示したように、1～8類を1系列とし、9～11類をもう一系列とすれば、9～11類は3～4類付近と類似性があり、2類から分岐したと考えておくのがよいと判断した。そこで、以下のように示すことができる（「 $\Leftrightarrow$ 」は一方向に限定できないことを示す）。

$3 \Leftrightarrow 4 \Leftrightarrow 5 \Leftrightarrow 6 \Leftrightarrow 7 \Leftrightarrow 8$

$1 \Leftrightarrow 2 \Leftrightarrow$

$9 \Leftrightarrow 10 \Leftrightarrow 11$

ところが、これらより明らかに古いと見られる「一期」の土器は、口縁部外面に小さな張り出しをもつか、張り出しがなく口縁部上面が平坦である。こうした特徴から、「一期」の土器は1類に近い可能性がある。また、これらより明らかに後出する土器の口縁部は、8類に近い。以上から、1類が最も古く、8類が最も新しいと推定できる。

すると、変化の方向の推定を一方向に限定でき、次のように示すことができる（「 $\rightarrow$ 」は一方向に限定できることを示す）。

$3 \rightarrow 4 \rightarrow 5 \rightarrow 6 \rightarrow 7 \rightarrow 8$

$1 \rightarrow 2 \rightarrow$

$9 \rightarrow 10 \rightarrow 11$

### 器形

器形は、全形を扱い、型式学的に比較検討して5種類に分類した（図3）。

I 類：全体が細身で、直線的に伸び筒状を呈するもの

II 類：I 類に似るが、上部がやや開き気味のもの

III 類：II 類に似るが、さらに上部が開いたもの

IV 類：上部が大きく開くもの

V 類：IV 類に似るが丸みを帯びるもの

以上を型式学的に配列すると、以下のようになる。

I ⇔ II ⇔ III ⇔ IV ⇔ V

これらに先行する「一期」のものが細身で筒形を呈し、より新しいものが丸みをもって開くことがわかっているため、それらとの型式学的比較から、次のように変化の方向を限定することができよう。

I → II → III → IV → V

### 胴部文様

胴部文様は、胴部外面に施された文様を扱う。文様帯が上下に 2 つあるいは 3 つに分かれている場合は下の文様帯を扱う（図 4）。

A 類：沈線による斜格子文。横方向に廻り、上下数段に施される。同様の長さの斜線文も本類に含める

B 類：単線あるいは複線による短い「×」あるいは「人」字状の文様で、横方向に廻り、上下多段に施される

C 類：横方向に廻る之字文。上下多段に施される

D 類：縦方向の之字文

E 類：短沈線または刺突文を一括する。おおむね横方向に廻り、上下多段に施される

これらのうち、A 類～D 類までは一列に配列してさほど無理がないと考えられる。基本的に横方向に廻らせ多段に施すものがほとんどであることを考えれば、縦方向に施される D 類は型式学的に配列したとき最端に置くのが、ひとまず適切と考えられる。また、D 類に技法的に最も類似するのが C 類であることも、A～D 類を一列に配列できることを支持すると思われる。一方、E 類は、直接この中に組み込むことは困難であるが、短沈線や刺突文か

らなることを考慮すれば、最も近いのはB類と考えられる。

そこで、次のように型式学的仮説として配列できる。

A⇔B⇔C⇔D

E

なお、明らかに後出する土器に見られる文様が縦方向の之字文であることから、次のように古い順に変化の方向を限定して考えることができる。

A→B→C→D

E

#### 突帯部文様

胴部に突帯があるものが多いが、ないものも見られる。突帯があるものでは突帯上に文様が施されるが、沈線を主体とする多様な文様が見られる。突帯の細かな形状は図から判読しにくく、また文様を細かく判別することも困難であるため、ここでは大まかに分けることにする。

a類：突帯はないが胴部の上半と下半の文様帯の間が沈線文による帯で画されるもの。上

下の文様帯の重なり部分が帯状に見られるものや文様帯の区別がないものを含む

b類：文様が施された蒲鉾状の突帯をもつもの

さらに、文様には変異があるが次の3つに大まかに細分する。

b1類：短沈線からなる幾何学文を主体とし、横方向の波長が比較的短いもの

b2類：長い沈線からなる幾何学文を主体とし、横方向の波長が比較的長いもの

b3類：長い沈線からなる緩やかな波状文で、横方向の波長が比較的長いもの。沈線

の下地には文様は施されない

c類：突帯がなく、胴部上半と下半の文様帯の2段構成であり、両者が交わることなく

明瞭に画されるもの

d類：突帯がなく、胴部には1種類の文様帯しかないもの

なお、b類は、突帯の幅や高さなどでもさらに細分できる可能性があるが、実測図からそれを判断することは危険であるため断念する。

以上を型式学的に配列すると、a類のうち上下の文様帯の重なり部分が画されることにより、そこに新たな文様帯が出現して、b1類の出現につながったと考えることもできる。また、c類は、b類の突帯により明瞭に文様帯が区別されていた名残をとどめた結果、突帯が無くても文様帯が画されていると考えることもできる。しかし、積極的に変化の方向を限定することは難しいため、ここでは次のように2方向の変化を想定しておく。

$$a \leftrightarrow b1 \leftrightarrow b2 \leftrightarrow b3 \leftrightarrow c \leftrightarrow d$$

### 属性間の相関

報告書に掲載された土器の実測図のうち分析可能と判断できた112個体について、属性変異を抽出し、それに基づいて属性間の相関を確認する。口縁部形態と他の属性との関係を見る(図5)。

すると、古いと想定された変異どうし、新しいと想定された変異どうしが同一個体内で共存していることがわかる。つまり、図示した3つのマトリクスではいずれも、1系列に配列できた変異では、おおむね左上から右下へ対角線上に分布が見られ、想定した変化の方向に矛盾がない。このことから、時間的変化を表している可能性が濃厚であると考えられる。もちろん、型式学的研究法においては、その証明は層位学的検証を経てなされるものであり、ここでもそうすることになる(後述)。

なお、口縁部9~11類は、3・4類にはほぼ並行すると推定したものであったが、3つのマトリクスとも両者は類似した所に分布しているのがわかる。したがって、事前の推定を支持する結果が得られたことになる。

そこで、最も分かりやすく型式学的に整序しやすい口縁部を指標として、型式を分類する。口縁部1類と2類は類似した組み合わせをもつが、2類のほうがより新しい変異とも組み合わせる例があるため、区分しておく。口縁部1類をもつものを筒形罐Aの「1型式」、2類をもつものを「2型式」、3・4・9~11類をもつものを「3型式」、5類をもつものを「4型式」、6~8類をもつものを「5型式」とする。

これらは、型式学的に古い順に以下の変化が推定できる。

1型式 → 2型式 → 3型式 → 4型式 → 5型式



## 2 筒形罐 B の型式学的検討

次に、筒形罐 B について検討する。ただし、これは資料数が少ないこともあり、多数の属性を抽出して検討することは困難である。そこで、限られた属性ではあるが、器形と胴部文様を抽出し検討する。

### 器形

筒形罐 B の全体の器形をもとに、次の 2 種類に分ける (図 6)。

I 類：胴部中位が張り出すもの

II 類：胴部上位が張り出し重心が高いもの

一応、下記の 2 方向の変化が考えられるが、型式学的に変化の方向を特定することは困難である。

I ⇔ II

### 胴部文様

筒形罐 B の胴部文様については、基本的に筒形罐 A と共通しているとみなせるため、ここで使用した胴部文様の変異をそのまま援用する。

### 属性間の相関

筒形罐 B で分析に使用できるのは 13 個体である。それらの属性変異を確認し属性間の相関を確認する (図 7)。

すると、器形 I 類と II 類は、異なる胴部文様と組み合わせられていることがわかる。器形 I 類は胴部文様 A・B 類と、器形 II 類は胴部文様 B・C 類と組み合わせられており、特に胴部文様 C と多く組み合わせられている。筒形罐 A の場合でも、胴部文様 B 類が少なく C 類が多かったが、それと共通した胴部文様の出現傾向が看取される。なお、胴部文様 D・E 類をもつものは、ここでは確認されなかった。

既述のように胴部文様は、型式学的に A → B → C の順に変化したと推定されるため、器形も I → II と変化した可能性が考えられる。そこで、器形 I 類をもつものを筒形罐 B の「1 型

式」、器形Ⅱ類をもつものを「2型式」とする。筒形罐Aに比べて根拠は弱いですが、次のように古い順に変化した可能性が考えられよう。

1型式→2型式

### 3 鉢の型式学的検討

次に、鉢について検討する。鉢は、既に述べたように報告書中で様々な器種名で呼ばれており、変異がかなり大きい。同時期の変異だけでなく、同一器種の時間的な変異が含まれる可能性も考えられるため、「鉢」として一括して検討する必要がある。ただし、資料数が少ないうえ、単純な器形で、文様もバリエーションがあるため、型式学的に詳細な検討をするために十分な属性を抽出することは困難である。そこで、鉢の全体の器形をもとに、次の4つの類型に分類することにする（図8）。

I類：平たく、胴部の立ち上がりが直線的なもの

II類：I類よりやや高く、胴部がやや直線的で開き気味に伸びるもの

III類：胴部が丸みをもって立ち上がるもの

IV類：胴部が丸みをもって立ち上がり、相対的に底部が小さいもの。底部がやや高台状になるものも含む

これらが一連の時間的変化とすれば、型式学的に次のように変化したと考えるのが妥当であろう。ただし、変化の方向の特定については困難である。

I ⇔ II ⇔ III ⇔ IV

属性として抽出できたのは器形のみであり、他の変異の抽出が困難であったため、属性間の相関については検討ができない。そこで、これらの各類をそれぞれ、仮に「型式」と考えることにし、I類を鉢「1型式」、II類を「2型式」、III類を「3型式」、IV類を「4型式」としておく。

変化の方向については、1型式⇔2型式⇔3型式⇔4型式となり、一方向に限定するのは難しい。ただし、仮に筒形罐Aで想定した型式変化を参照すれば、胴部形態の類似性から1型式→2型式→3型式→4型式と胴部が丸くなる方向へ変化した可能性が考えられるため、一応そのように考えておくことにする。もちろん、この変化の方向が正しいかどうかは層位

学的検証によらなければならない。

#### 第4項 層位学的検証

##### 1 共伴関係

以上の検討に使用した資料は、いずれも竪穴住居跡を中心とする遺構出土のものである。したがって、異なる器種間での型式の共伴関係を確認することが可能であると期待できる。そこで、以上で分類した3器種の各型式の共伴状況を確認する。時間軸は、表の上が古く、下が新しい。

出土した型式を遺構ごとにチェックして集計し、表にまとめた(表1)。その結果、筒形罐Aの各型式が、想定された変化の順に、多少重なりあいながら遷移しており、それに筒形罐Bと鉢の各型式が対応しているように見える。このことを、一括資料による共伴関係に基づき型式の時間的変化の想定を検証するという型式学的研究法の考え方に照らせば、先の型式変化の推定の正しさが検証されたことになる。

そこで、異なる器種間での型式の組み合わせから、編年として役立つように段階設定を行う。この方法は、弥生土器で行われたことがある様式の抽出方法を参考にした(溝口1987; 中園1988, 2004)。

表中の横線で示したように、現状では概ね6つの単位に区切って認識することができよう。その最初のグループは、筒形罐Aの1型式で構成されるものであるが、筒形罐Bの1型式と共伴している。表のように筒形罐Bの1型式は他のグループとは共伴していないことから、例は少ないが両者の1型式どうしの組み合わせは意味あるものと考えられる。また、それらと鉢の共伴が見られないことも注意される。

2番目のグループは、筒形罐Aの2型式が出現するグループである。2型式が単独で出土した遺構はないが、型式学的に2型式の前・後とみられる1・3型式との共伴があることに加え、1番目のグループは1型式のみ、次の3番目のグループは3型式のみ出土していることから、両者の間に位置付けてよい。他の器種との共伴は確認されなかったが、1番目のグループでも鉢の共伴例がないことや、次の3番目のグループで、鉢で一応最も古いと考えた鉢1型式が共伴していることを考慮すると、鉢はまだ出現していない可能性も考えられる。

3番目のグループは、筒形罐Aの3型式からなるグループで、筒形罐Bの2型式との共

伴や、鉢 1・2 型式と組み合わせるグループである。3 つの器種が確実に揃っている段階といえる。

4 番目のグループは、筒形罐 A の 3 型式からなり筒形罐 B の 2 型式との共伴があるグループである点は、3 番目のグループと同じである。しかし、鉢 1・2 型式との共伴が見られず、鉢 3 型式と組み合わせるところが本グループを特徴づける。

5 番目のグループは 1 例しかないが、筒形罐 A の 4 型式がある。直前の型式とみられる筒形罐 A の 3 型式との共伴が見られ、4 番目のグループと同じく鉢の 3 型式と組み合わせられている。例数が少ないため可能性の域を出ないが、次の 6 番目のグループでは筒形罐 B が消滅していると思われることから、本グループで筒形罐 B の出土がないことは意味があるかもしれない。

6 番目のグループは、筒形罐 A の 5 型式からなるグループで、筒形罐 B は存在せず、鉢の 4 型式との共伴が見られるなど他の型式と明瞭に画される。

## 2 様式と編年

上記では、型式学的手順に従って検討を行い、土器の各段階を抽出することができた。ここでは、それらを編年的に位置づける。

上記で設けた 6 つのグループの様相から、次のように認識できよう。

- 1 番目のグループ…………… I 様式
- 2 番目のグループ…………… II 様式
- 3 番目・4 番目のグループ…………… III 様式
  - (3 番目のグループ…………… III 様式古相)
  - (4 番目のグループ…………… III 様式新相)
- 5 番目のグループ…………… IV 様式
- 6 番目のグループ…………… V 様式

以上のうち 3 番目と 4 番目のグループは、普遍的に存在する筒形罐 A の型式では区別できなかつたが、他の器種に変化があることから、古相・新相に区分することができる。

これらの様式は、これらより明らかに古い土器、つまり本遺跡で出土している無文傾向が著しい「一期」では、筒形罐が円筒形を呈し、その他の小型器種などが見られないことなど

から、I 様式の様相は「一期」に近いと判断できる。また、V 様式の文様や器形は、より新しい時期の土器群との共通性が見られる。以上の検討より、編年図を作成した（図 9）。なお、本論と、報告書での時期区分との対応を見ると、I 様式が「二期甲類」にあたり、II 様式～IV 様式が「二期乙類」にあたる。つまりここでは、報告書中で最も多く「二期乙類」と一括されていたものを大幅に細分することに成功したことになる。V 様式は「三期甲類」にあたる。

これらの年代に関しては、報告書中では「二期甲類」が興隆窪文化中期の前半であり、「二期乙類」が興隆窪文化晩期とされている。また、「三期」が趙宝溝文化中期とされている。これに従えば、「二期甲類」と「二期乙類」の間には多少のヒアタスがあることになる。また、「二期乙類」がIV 様式まで、「三期」がV 様式であり、両者の様式的差異は比較的明確でヒアタスが大きいことを踏まえれば、趙宝溝文化早期が本遺跡で欠落することは理解できなくはない。しかし、報告書に従えばそこで設定された各時期の間がいずれも空いていることになる。その場合、本遺跡の集落は断絶を繰り返していることになるが、以上の分析では型式学的には連続していると解釈すべきところが多くある。この点については、次項で遺構分布についての検討を経て、再論する。

なお、報告書で「二期乙類」とされたものは、本論のII 様式からIV 様式の3つの様式に該当し、III 様式の古相と新相を含めて「二期乙類」を4つの様式・段階に細分したことになる。なお、これらの実年代については、放射性炭素年代測定が2点の試料で実施されているが、III 様式新相にあたる AF13 竪穴住居跡と AF25 竪穴住居跡の床面出土木炭の測定値が、それぞれ  $6590 \pm 85$  BP と  $7040 \pm 100$  BP（ただし測定法等の詳細不明）とされている（内蒙古自治区文物考古研究所 2004 : 501）。残念ながら他の様式に属する試料は測定されておらず、炭素年代を外的基準として検証に役立てることは困難である。

### 3 検証としての遺構の分布

本遺跡では2つの環濠（A 区、B 区）が並んでおり、それぞれの環濠内に竪穴住居跡を主体とする遺構がある（一部は環濠の外にもある）。また、環濠外には石棺墓から構成される墓地も検出されている。ここで、様式の時間的変化に関する確認として出土遺構の分布を見ておきたい。この作業は上述の結論に対する検証であるとともに、本遺跡の変遷をうかがうのにも役立つと考えられる。

本遺跡は、遺構が平面的に検出されているだけであり、包含層としての層位的上下関係も

見られない。遺構の切り合いがほとんどないのも本遺跡の特徴であり、しかも切り合い関係のある遺構では出土資料が提示されていないなどの問題がある。したがって、切り合い関係に頼ることも難しい。そこで、次善の策としてこのようなときに有効なのが、遺構の空間的な位置関係に時期的変遷が確認されるかという検討である。そこで、ある方向に向かって順に遷移していくなど、何らかの意味ある空間的な変遷があるかどうかを検討する。

ここで分析した結果に基づき、遺構配置図に土器様式ごとに分けて色分けして示した(図10)。なお、報告書に掲載された遺構配置図と本文中に示された遺構等の方位が僅かにずれているなど若干の問題もあるが、ここでの分析には特に影響はない。

結果は以下とおりである。

I様式(赤)は、B区の環濠の南東側で環濠より外側に住居跡・墓が分布していることがわかる。環濠がまだ成立していなかったものと考えられる。

II様式(ピンク)は、B区の環濠の内側に見られるとともに、環濠外のI様式の遺構の傍にも見られる。いずれもB区の東南側であり、I様式の遺構の近くに分布することが注意される。I様式との時間的な近さが示唆される。

III様式古相(橙)は、B区環濠内とA区環濠内の両方に見られる。I・II様式と異なり、環濠外には一切分布が見られない。B区環濠においては、次のIII様式新相のものより多いことが注意される。

III様式新相(黄)も、B区環濠内とA区環濠内の両方に見られる点は、III様式古相と同様である。興味深いことに、これらのIII様式の古相と中相の遺構(竪穴住居跡)は、相互に切り合いをもたないばかりか、並んで配置されているところが見られる。したがって、古相と新相の間の時間的な連続性は特に高いと考えられる。しかし前述のように、III様式古相ではA・B両区に同数あったものが、新相ではB区環濠内は1軒のみになっており、主体がA区環濠内に移っていることが注目される。

IV様式(緑)は、確認できたのは1軒の竪穴住居跡のみであったが、A区環濠内であった。

V様式(青)は、A区側のみに見られ、A区環濠の内外に分布することがわかった。この時期の竪穴住居跡のうち最も北に位置するAF79は、A区の環濠の一部が重なっていることから、環濠の一部が埋まりかけていた可能性がある。このことから、環濠の中にきちんとおさまったIII・IV様式より新しいと判断される。また、III・IV様式の竪穴住居跡とほとんど重なってはいないことから、III・IV様式の遺構の場所が完全にわからなくなる以前に、V

様式が営まれたことになる。なお、環濠の一部が埋まりかけた可能性や、他の時期の住居跡を避けるように分布すること、堅穴住居の方位がそれまでと異なることなどを総合的に考えて、この段階に限ってはIV様式までとは若干時間差がある可能性も考えられる。

Ⅲ様式古相と新相の間も、主体がB区環濠からA区環濠へと移っており、時間的变化と捉えることができよう。このことも含め、各様式全体を通して、遺跡の南西側から北東側へ時間とともに分布が変遷していることが確認できたことになる。これは本論の編年を支持するものである。

比較のために、報告書の時期区分である「二期甲類」、「二期乙類」、「三期」の3時期を図化した(図11)。本論で細分した図10では環濠の形成以前から以後までの集落の変遷が段階的にかがえたのに対して、この図では「二期乙類」がA・B両区の環濠内全体に広がっており、それに基づくと本集落の理解やこの時期の社会のあり方などの考古学的解釈にも影響すると思われる。したがって、本論のように時期の細分をすることで、高解像度で集落の形成や変遷を考えるのに役立つことが改めて認識される。また、型式学的手順に従った編年が重要であることは、このことから明らかといえよう。

## 第5項 多変量解析の適用

上記の分析は、土器の非計測的属性によるものであった。その有効性は遺構分布の変遷から支持されるが、対象の土器が単純な器形であることもあり、胴部形態など属性変異を細かく抽出できないことなどの制約があった。そこで、計測的属性による分析を行うことで、さらなる検証と新たな情報を得たい。そのため、各部位を計測し、主成分分析(PCA)を適用する。

計測にあたっては、完形もしくは全形がわかる資料である必要があるため、分析に堪える筒形罐Aを扱う。分析にあたり、形態変化に関わる可能性が考えられる5つの計測部位を設定した(図12)。このうちE胴部径は、器高の1/2の高さでの胴部の直径である。これらの計測部位以外にも、厚さなど計測可能な部位もあるが、実測・図化の時点での誤差が大きい恐れがあり、割愛した。なお、同報告書には計測値も示されているが(内蒙古自治区文物考古研究所2004)、正確にはどこを測ったか不明であり、ここでの検討に不足する計測部位もあるため、同報告書の実測図を計測した。

5つの計測項目すべてが揃い、下記の条件に適合するのは38個体である。筒形罐Aの5

つの型式のうち、5 型式は形態が明らかに異なっており、計測項目 D も存在しないことから、対象から除外した。また、2 型式は本来個体数が少なく、計測項目が揃う個体がなかったため扱えなかった。3 型式は 1 つの型式ではあるが、他器種との共伴関係から、前述のとおり「Ⅲ様式古相」と「Ⅲ様式新相」にまたがる。そのため、本当に 1 つの型式と見なせるかを検討するために、共伴関係を基準にあらかじめ区分して分析した。すなわち、筒形罐 A の 3 型式を、「Ⅲ様式古相」に共伴する「3 型式（古）」と「3 型式（新）」に区分する。もし、それらが同一型式ならば、主成分分析でも同様の挙動をとり区別できないはずである。結局、分析にあたり以下で 1~4 群とする各群の内訳は、1 群：1 型式、2 群：3 型式（古）、3 群：3 型式（新）、4 群：4 型式という対応になる。

SAS (JMP) を用いて、相関行列から出発する主成分分析を行った。その結果、第 1 主成分の寄与率は約 76% で顕著に大きく、第 2 主成分は約 12%、第 3 主成分は約 6% であり、ここまでの累積寄与率は 93.6% に達する (表 2)。負荷量行列 (表 3) では、第 1 主成分は 0.8~0.9 程度の大きな正の値であり「サイズ・ファクター」と解釈されるのに対して、第 2 主成分からは「シェイプ・ファクター」とみなせる。土器などの計測値に基づく主成分分析で編年的検討をする際にサイズ・ファクターは意味がないことが多く (中園 2004)、この場合も同様と考えられるため、第 2・3 主成分を検討する。

第 2 主成分では、器高が最小の負の値、逆に口縁部の幅が最大の正の値である。それは、器高と口縁部の幅の関係に意味があることを示す。すなわち、長い器形で口縁部の幅が小さいものと、短い器形で口縁部の幅が大きいものが両極にくることを示している。第 3 主成分では、口縁部の幅と胴部径の間で正負が逆で絶対値が大きい。すなわち、口縁部の幅が小さく胴部径が太いものと、口縁部の幅が大きく胴部径が細いものが両極にくることを示している。

第 2 主成分を X 軸、第 3 主成分を Y 軸にとる 2 次元散布図に、個体の主成分スコアをプロットした (図 13)。群 (型式) ごとに、左から右にかけて布置されていることがわかる。すなわち、左に古いもの、右に新しいものが分布しており、第 2 主成分に時間的変化がよく表れている。第 3 主成分は新しくなるほどスコアが小さく、ばらつき (形態的変異) も小さくなる可能性はあるが不明瞭であり、第 2 主成分が主として時間的変化を示すといえる。4 群に所属するものは 2 個しかないが、やや右に偏っている。以上の結果から、基本的に想定した型式変化に矛盾がないといえよう。また、様式として古 (2 群)・新 (3 群) に便宜的に分けて分析した 3 型式は、属性分析では型式を細分できなかったが、多少の重なりはある



が布置が異なっており重心が明らかにずれることは注目できる。したがって、計測的変異としては 2 つに分けて認識することができる。つまり、属性分析の時点では抽出できなかった変異があったことになる。

なお、第 2 主成分で 1 群と 2 群の間にギャップが大きく不連続であるのは、両者の間にくる 2 型式が扱えなかったためであろう。以上より、1 群→2 群→3 群→4 群の変遷は時間的変化と解釈でき、属性分析結果と矛盾しないことがわかった。



図1 遺跡の所在地

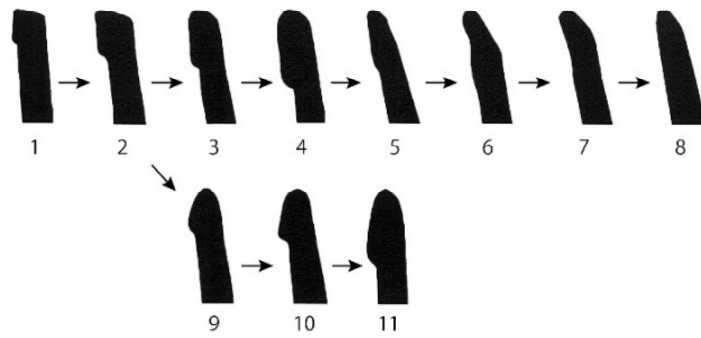


図2 筒形罐 A の口縁部形態

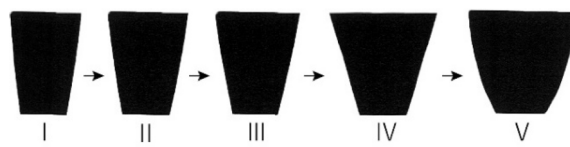


図3 筒形罐 A の器形

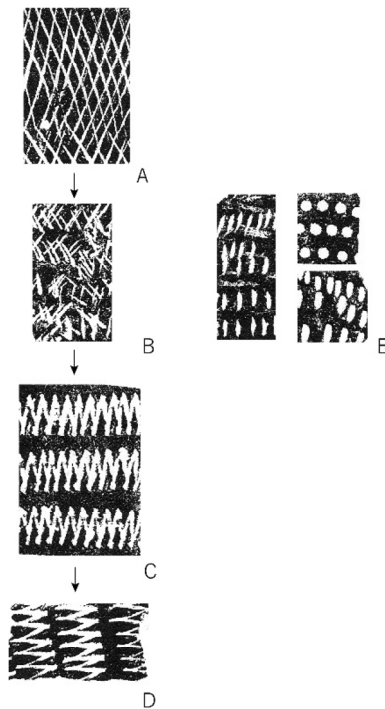


図4 筒形罐 A の胴部文様

(各文様は内蒙古自治区文物考古研究所 2004 掲載の拓本より抽出して使用)

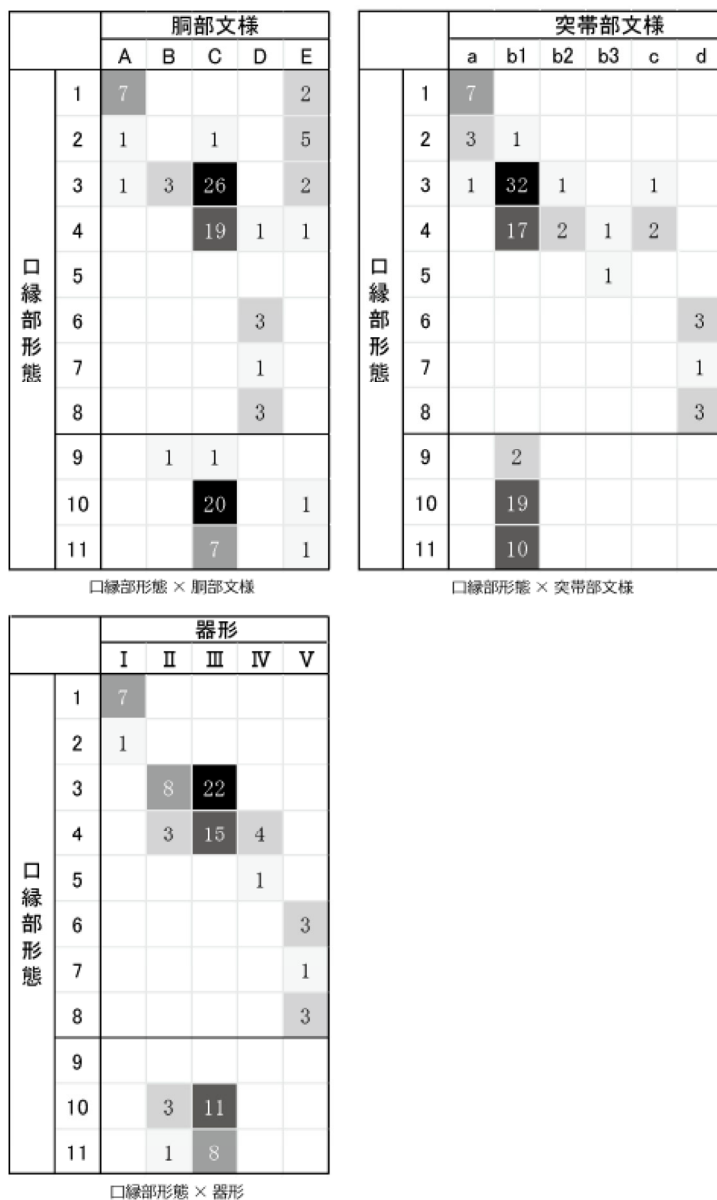


図5 筒形罐 A における口縁部形態と各属性の相関

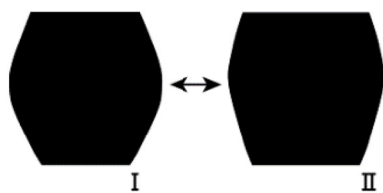


図6 筒形罐Bの器形

		胴部文様				
		A	B	C	D	E
器形	I	2	1			
	II		1	9		

図7 筒形罐Bにおける口縁部形態と各属性の相関

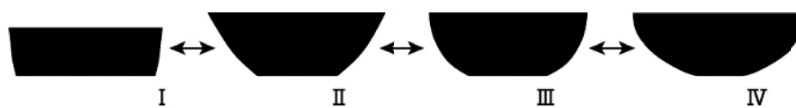


図8 鉢の器形

表1 遺構ごとの各型式の共伴状況（数値は個数）

遺構	筒形罐A					筒形罐B		鉢			
	1	2	3	4	5	1	2	1	2	3	4
BF63 (AF81)	6 1					2					
BH76	1	1									
BF55		2	4								
BF74		1	2								
BF62			3								
BF28			2					1			
BF68			1								
BF61			6								
BF4			2					1			
BF72			1								
BF6			4								
BF69			3				1		1		
AF36			6								
AF52			1				1				
AF15			2								
AF10			3								
AF35			1								
AF32			5				1				
AF12			3								
AF50			1								
AF17			5				1			2	
AF37			5				1				
AF78			3								
AF25			5				1				
AF16			4								
AF31			5				2				
AF39			4								
AF13			2				2			1	
AF24			3								
BF73			2								
AF40			2								
AF43			1	1						1	
AF27					3						3
AF79					1						
AF83					1						
AF66					1						
AF82					1						

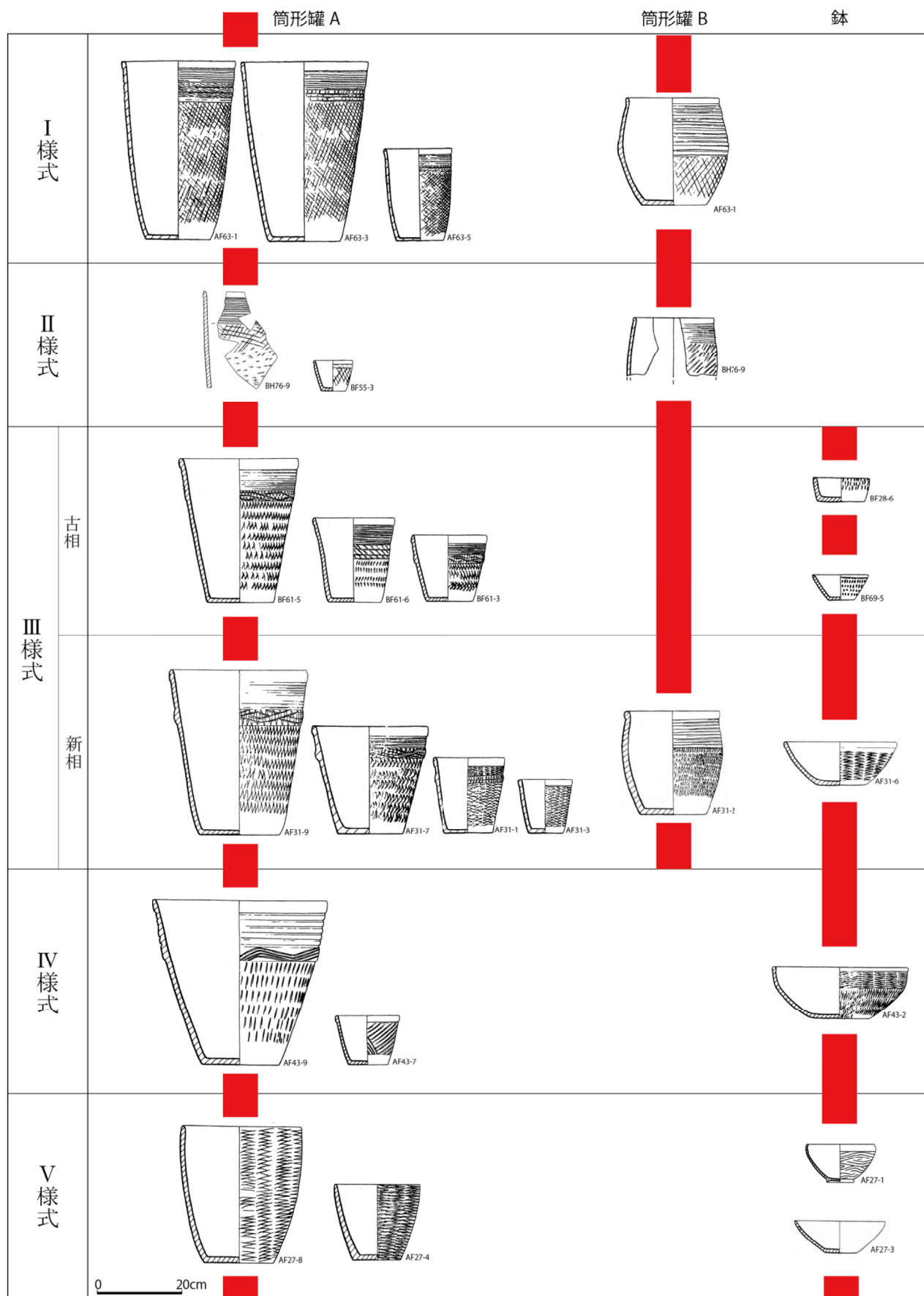


図9 白音長汗遺跡出土土器編年図

古いI様式から新しいV様式の方へ変化する。(各個体の図は内蒙古自治区文物考古研究所2004より抽出して使用)

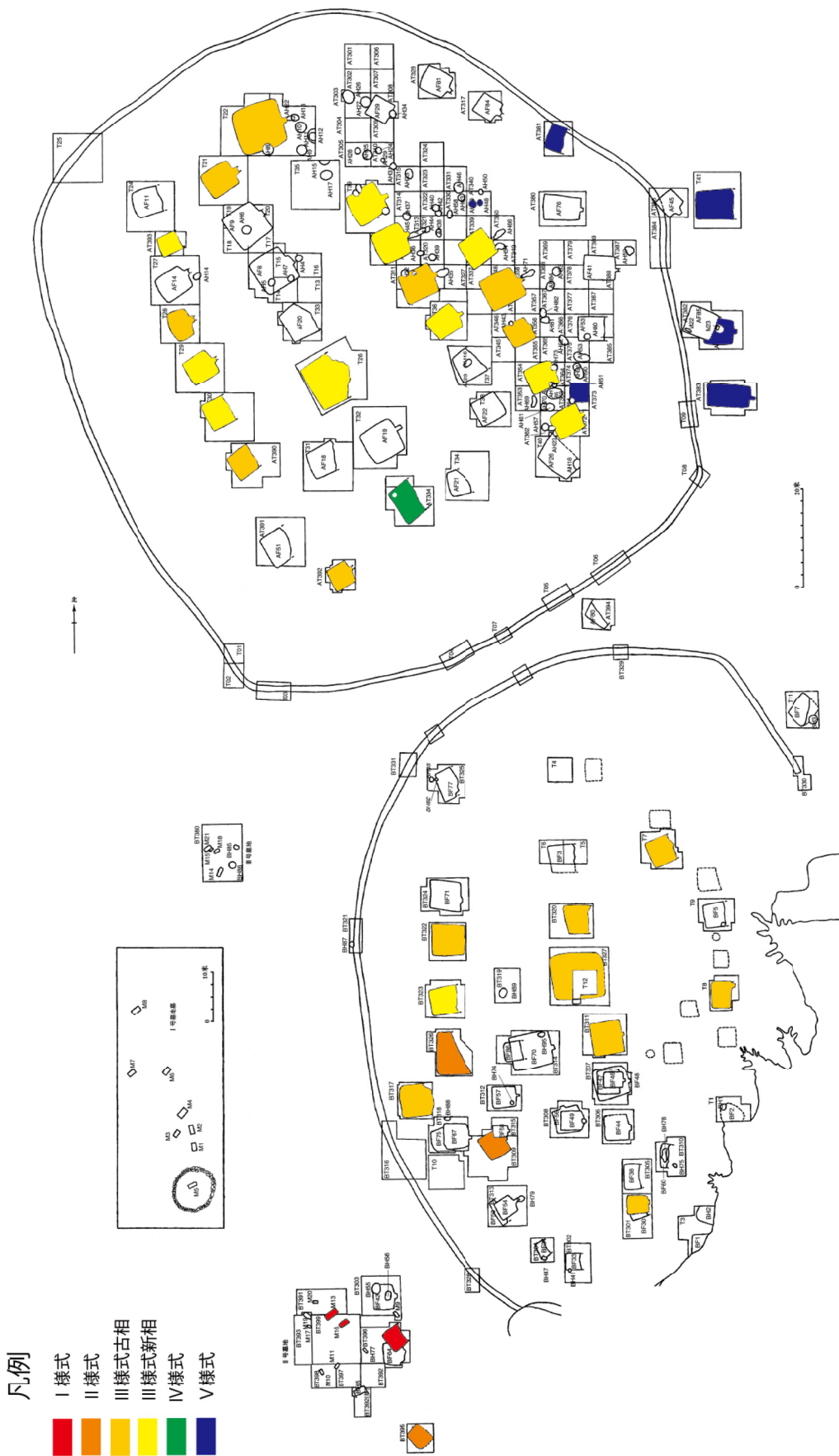


图 10 样式ごとの遺構分布 (内蒙古自治区文物考古研究所 2004 の遺構配置図に加筆)



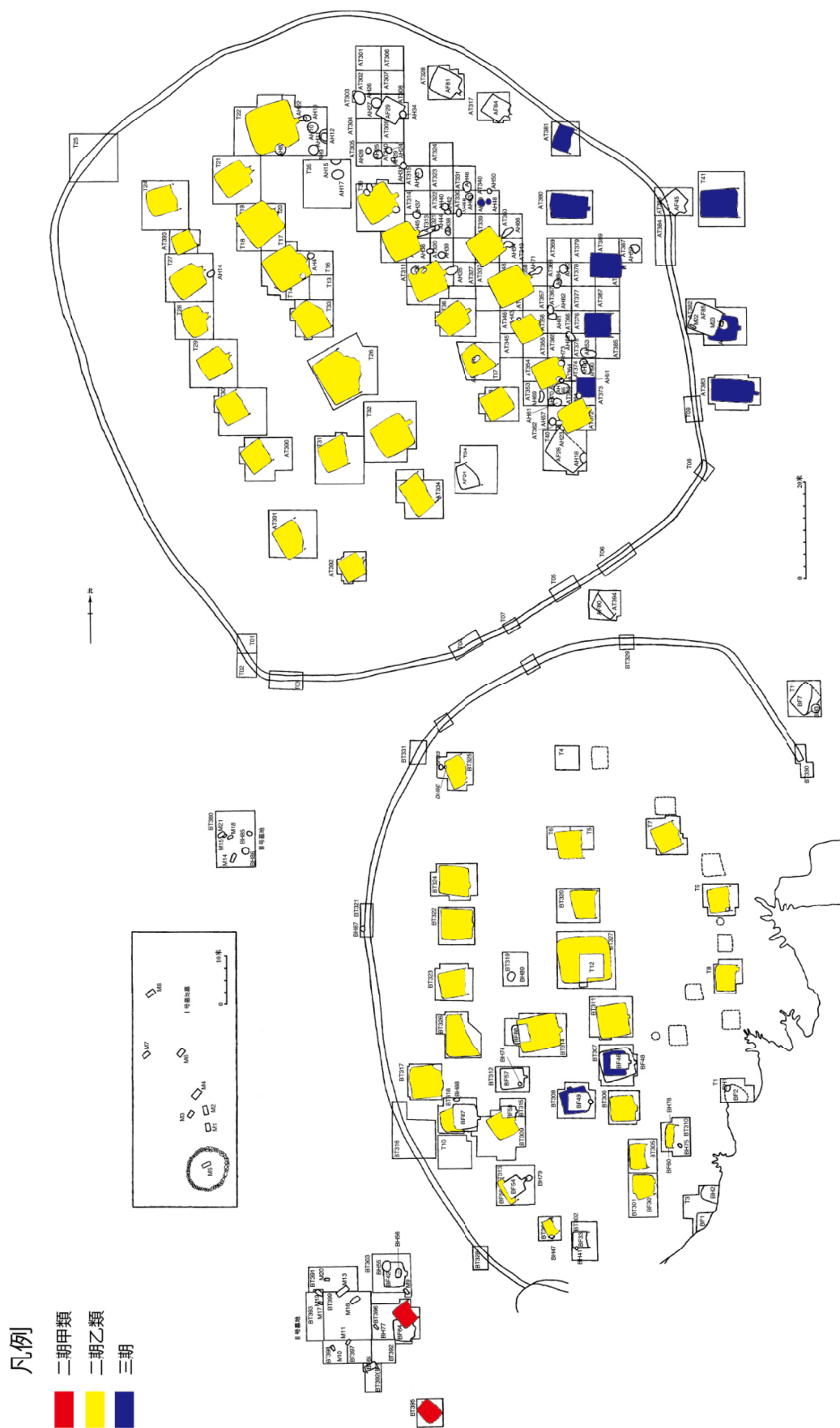


图 11 報告書の時期区分に基づく遺構分布 (内蒙古自治区文物考古研究所 2004 の遺構配置図に加筆)

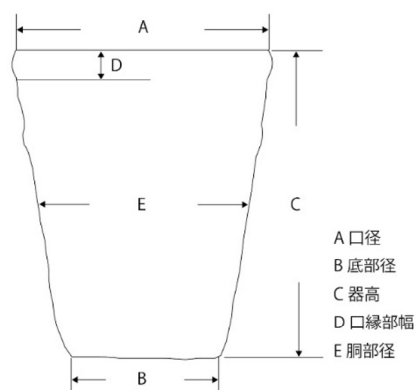


図 12 計測項目

表 2 固有値と寄与率

番号	固有値	寄与率	累積寄与率
1	3.8085	76.170	76.170
2	0.5794	11.588	87.759
3	0.2942	5.888	93.642
4	0.2234	4.468	98.110
5	0.0945	1.890	100.000

表 3 負荷量行列

	主成分				
	1	2	3	4	5
A: 口径	0.90782	0.04632	-0.18917	0.36227	-0.08177
B: 底部径	0.93359	-0.17198	0.09447	-0.20702	-0.21691
C: 器高	0.82356	-0.51908	0.15861	0.05102	0.15666
D: 口縁部の幅	0.79908	0.50185	0.32534	0.01811	0.05865
E: 胴部径	0.89219	0.16250	-0.34417	-0.21531	0.11304

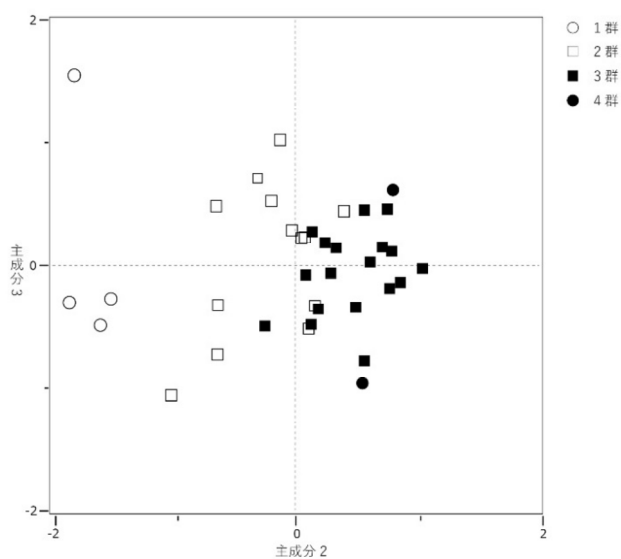


図 13 第 2 主成分と第 3 主成分のスコアプロット

### 第3節 考察

#### 第1項 白音長汗遺跡の検討から

日本で発達してきた型式学的研究法を白音長汗遺跡の土器に適用し、前節のような成果が得られた。既存の時期区分よりも詳細な型式分類と編年を提示することができ、集落の時間的な変遷過程が追えるようになったことは成果といえよう。ここでの新たな編年によって、報告書のような時間的連続性に乏しい静的な時期区分とは異なり、集落の連続的な時間的な変化を読み取ることができるダイナミックな変化が見えてきた。言い換えれば、従来よりも「高解像度」で遺跡を検討することが可能になったといえよう。このことは自ずと、集落が断続的であったか、それとも継続的に営まれたかという重要な解釈・評価にも関わってくる。

図 11 では、並んだ 2 つの環濠内に、住居跡が同時期にほぼ同数存在したように見えていたが、ここでの分析からは（図 10）、環濠間で時期的に主体が置き換わっていくと解釈できることを示している。このように分析の解像度が異なれば、遺跡の理解や当時の社会の理解にも大きな差が出かねない。中国考古学で社会を復元する際、あるいはイメージする際に、その基盤となる部分に大きな差が出るというのは重大な問題であると考えられる。

ここでは、属性変異間の変化の方向を型式学的に推定したうえで相関の確認を繰り返すという属性分析に基づく方法を取り、変化の方向に対する蓋然性を高めたうえで、共伴関係によって確認する手順をとった。したがって、形態や文様などの 1 属性に着目する伝統的方法よりも、型式や様式をいくつ認めるかという点で任意性が抑えられており（もちろん資料数などの関係で完全とはいえないが）、比較的安定した単位を設定できたのではないかとと思われる。属性分析を型式学的手法とは異なる方法とみる向きもあるであろうが、明らかに型式学的研究法の考えに適う方法といえよう。先述のように、中国にも多変量解析など分析的手法を用いた分類も多少行われたことがあるが、必ずしも有効な結果とはなっていない。手法の共通性ではなく、全体の証明過程を貫く考えとしての型式学の理解や重視の程度に違いがあるというのが、差異の大きな要因であろう。

このように、編年において型式学的研究法は確かに有効であるといえよう。

## 第2項 中国考古学と型式学的研究法

白音長汗遺跡の報告内容は中国において特殊な例ではなく、代表的な資料の掲載と簡潔な記述にとどまり、型式学に基づく詳細な観察・検討を経るよりも、あらかじめ層位による前後関係が重視されることなどは全体的な特徴といえる。そのため、口縁部形態や器形が下層から上層のように変わるといような、層位を優先した論述はあるが、型式組列による仮説検証とは言い難いことがしばしばである。中国と日本の間での型式学的研究法の受容と態度の違いはここにも表れている。

日本考古学は世界的に見ても文化史的考古学が根強いが、中国考古学はマルクス主義的理論・イデオロギーに立脚しながらも、やはり文化史的と見なされる考古学が展開されてきた (Trigger 1989)。文化史的考古学という共通性があるが、両者の型式学への理解や態度の違いは、ある意味で両極端ともいえる興味深い状況となっている。このように、中国と日本でそれぞれ独自の道を進むのは、既に述べた考古学の受容と初期の展開のしかた、中国の国民が主体的に考古学の調査研究を行うようになってからの日中戦争や国共内戦などによる影響、マルクス主義的イデオロギーの強い影響\*などがあると思われる。さらに、中国考古学において型式学や物質文化の分類を「ブルジョワ思想」と見なしたソ連考古学の影響も大きな影を落としている可能性が考えられる (e.g. Trigger 1989 ; 前述した北大考古専門資産階級学術批判小組 1958 も参照)。すなわち、両国のたどった社会的・歴史的コンテクストの違いが大きく表れていると考えられる。

こうした独自の状況は両国の間だけでなく、世界各地で多かれ少なかれ見られると思われる。しかしながら、中国で土器を青銅器や現代の器物に当てはめて多様な器種名が使われることは、編年にあたって障害になっている恐れがあり、土器の真の用途の解明にも問題が生じる可能性が高いと考える。また、日本では1930年代頃から編年とともに文様のつけ方に関する研究が今日に至るまで盛んであり、技法が細かく分類されるなど、土器の細かな技法・技術面の解明は日本が圧倒的に進んでいる。以上はいずれも、型式学的研究法を前提と

---

\* ただし、周知のように日本の戦後考古学は、質や程度の差はあるが少なくとも1970年代まではマルクス主義の影響があった。とすれば、戦前から今日に至るまでの間に、マルクス主義の影響下にあった時期とそうでない時期があることになるが、型式学的編年重視、伝播論・文化史に暗黙の裡にも支配されているという状況は一貫していることになる。単にマルクス主義的であるかどうかというより、型式学を嫌うソ連考古学からの影響の有無を含む別の事情を考慮しなければならないのではなからうか。

したときのように、土器自体の形態や文様などの変異のみを頼りに詳細に整序する必要に迫られたときに自ずと注意が向くものであろう。その点でも、型式学を再度理解すべく検討してみることも有益かもしれない。

### 第3項 おわりに

本章では、特に型式学的研究方法に関する検討を通して、中国考古学の方法論・研究方法についての理解を進める一助とすることと、中国考古学の方法論的な進展への寄与も兼ねて、学史的検討をし、型式学的研究方法の観点を中国の土器に適用した。その結果、既存のものよりかなり細分した編年が可能であり、また集落の変遷が理解できるなど効果的であることが判明した。型式学的手順に従った考え方・方法の有効性が示されたといえよう。

筆者は、中国考古学にここで示したような型式学的手順に転換せよと主張するのではない。このような検討を通じて、**B. Trigger (1989)** など多くの考古学者が説くように、考古学研究にはそれを取り巻くイデオロギーや歴史的経緯を含むコンテキストなど様々な事情が反映していることを痛感するところであり、それぞれのコンテキストに依存する多様な考古学のあり方を否定はできないからである。このような考えは、**World Archaeological Congress** (世界考古学会議) が多様な考古学のあり方を尊重し、考古学 **archaeology** を複数形で表現した『**Archaeologies**』を刊行していることに象徴されるように、現代的なあり方といえる。

ただし、考古学者各人が自らの考古学の実践に無批判であるべきではなく、他の考古学との比較において自省であるべきこともまた現代の考古学者として大事なことであろう。現代の中国考古学では、伝統的な面も残しつつ、自然科学的研究や三次元計測等のデジタル技術の活用がなされるなど、しだいに状況が変わりつつあることから、そのような自省の一環として、方法の選択肢を増やすことや、考え方・視点に多様性をもって検討してみるとは有益であろう。

## 第3章 中国考古学における3D技術の適用

中国においても、考古学の調査研究や普及活動にあたって、三次元計測など多様な3D技術が導入され、活用が見られるようになっている。考古学へのデジタル技術の応用が進みつつあり、様々な事例が蓄積されつつあるのが現状といえよう。本章では、第1節で中国考古学をめぐる三次元計測について概観しつつ検討し、さらに文献等ではうかがいにくい情報として、筆者の中国での三次元計測の実践や資料調査の例を紹介し、中国考古学の実態を知る手がかりとしたい。

### 第1節 中国考古学における三次元計測

#### 第1項 はじめに

考古学における三次元計測は、世界的に急速に普及しつつあり、すでに日本考古学と同様、中国考古学にとっても縁遠い技術とはいえなくなっている。中国考古学の特質について理解を深めたいと考えている筆者にとって、研究史や方法論に関する比較なども重要であるが（楊帆 2020a）、三次元計測の実施・利用状況も今日の中国考古学を理解するうえで興味深い焦点となる。

日本を見ると、考古学界で三次元計測への関心が深まるにつれて様々な実践が行われ、記録以外にも展示等への応用などが行われつつあり、シンポジウムや講習会も開かれている。また考古資料の三次元計測に関する概説書も見られる（e.g. 金田ほか 2010; 中園編 2017）。そのような中で、海外の動向などが紹介されることはあるが（e.g. 西藤 2017; 野口 2017; 平川 2017）、中国考古学については三次元計測の進展や現状などがまとめて紹介されたことは管見ではないようであり、残念ながら日本の考古学者にはほとんど知られていないのが現状といえよう（楊帆 2017b）。そこで、ここでは中国考古学をめぐる三次元計測の使用・利用について、筆者の視点から現状を整理し紹介するとともに、課題なども明らかにしたい。中国考古学における三次元計測の特性や今後の発展の方向などについても考察する。

なお、筆者は 2014 年から中国東北地方で新石器時代の土器を対象とした調査研究を行うなど、現地で三次元計測を実施してきた（楊帆・太郎良 2015）。さらに、同地方をはじめ中国各地の博物館や遺跡などを訪れるなどして、中国考古学における三次元計測の実態について、中国パブリック考古学との関係なども含めて実状を把握するよう努めてきた（楊帆・太郎良 2016；楊帆 2017a, b）。その研究を始めた時点では、日本の考古学関連分野ではすでに三次元計測が話題になりつつあったが、中国でも論文や報告書などでそれに関する内容が散見されるようになっていた。それから現在に至る間にも、急速に三次元計測の実例が増えてきたことを実感している。しかし一方で、例えば中国考古学で重要な位置を占めるいくつかの関連機関では、三次元計測はあまり知られておらず無関心ともいえる状況であり、なぜ三次元計測をするのか理解できないといった素朴な疑問の声をかけられることも少なくなく、それも実態の一部であると思われる（後述）。したがって、三次元計測の実施・活用についての高度な取り組みだけでなく、実務の状況や考古学教育など、なるべく様々な状況や背景を考慮することにしたい。

## 第 2 項 現状

三次元計測について、中国では「三維建模」、「三維重建」、「三維数字化」などの言葉で呼ばれる。「数字化」とはデジタル化の意味であるが、まず広く考古学に関するデジタル化について見ると、1970 年代半ば、童恩正ら（1975）が大量に破片状態で出土した甲骨を接合するという困難な問題を解決するためにコンピュータを使った研究が、中国における考古資料のデジタル化の初期のものといえる。その後、欧米考古学におけるコンピュータを考古学に使用する研究が中国に紹介され、1980 年代末になり敦煌研究院が「数字敦煌（デジタル敦煌）」という企画を立て、すぐに故宮博物院も「数字故宮（デジタル故宮）」という考えを打ち出すなどした。しかし 1990 年代までのデジタル化は、デジタルカメラなどで壁画や書画などを撮影し二次元データとして保存したり展示したりすることがほとんどであった。一方、三次元計測の動きは、2000 年からの故宮博物院と日本の凸版印刷による「故宮プロジェクト」の開始や、2005 年からは洛陽龍門石窟研究所による三次元データベースの構築などがあり、その後増えてきた（楊帆 2017b）。

ここでは中国学術文献オンラインサービス CNKI（China National Knowledge Infrastructure）のデータベースを利用して、2000 年から 2019 年までの 20 年間に学術定

期刊行物で発表された考古学における三次元計測に関する論文を検索し集計する。ただし、この学術定期刊行物には、考古学の専門誌（「考古学類」とする）に限らず、測量、地理学、コンピュータ工学をはじめとする他分野のものも含めており、それらの専門誌（「非考古学類」とする）に掲載された考古学や文物関係の論文（遺跡を三次元計測したものなど）もカウントした。

その結果、発表件数の合計については、初期には極めて少数に限られていたものが、右肩上がりに増加してきたことが明瞭にわかる（図 1）。同図で「考古学類」と「非考古学類」の関係に注目すると、両者とも右肩上がりであり、いずれも 2010 年からの伸びが顕著といえる。また、そのころを境として「考古学類」のほうが「非考古学類」を凌駕し、2015 年以降では「非考古学類」がやや落ち着いて、「考古学類」のほうが大きく伸びたことがわかる。このことは、考古学分野で三次元計測が注目されるようになっただけでなく、中国の考古学者にある程度受け入れられるようになってきたことを示していると思われる。なお、ここでは便宜上 5 年間ごとに集計しており、2000 年も含めているが、初期のころのデータは 2001 年に「考古学類」が 1 件、「非考古学類」が 2 件発表されたのに始まり、2000 年は両者ともに 0 件であった。したがって、21 世紀初頭から論文が見られるようになり、2010 年を境に大きく増加し、現在は考古学の専門誌での発表が多くなっている、とまとめることができよう。

「考古学類」の中でも、論文は『文物保護与考古科学』、『敦煌研究』、『文物鑑定与鑑賞』、『中国文化遺産』など、文化財の保護や利用などに関する定期刊行物で多く発表されたことがわかった。ただし、『考古』や『文物』のような伝統的で権威ある定期刊行物でも、遺跡・遺物の三次元記録を行う研究は見られる。なお、三次元計測を主な手段としているわけではないが、GIS、GPS、RS（リモートセンシング）と組み合わせて広域でのセトルメント・パターンを調査する研究なども掲載されている（賈笑冰 2017）。

以上のように見てくると、「考古学類」での論文数はかなりの数になるが、あくまで考古学の専門誌に載った論文という意味であり、そのまま考古学者による論文とみなせるわけではないことに注意が必要である。内容を確認すると、その実態は保存科学や考古科学その他を専門とする隣接分野の研究者によるものがほとんどを占めており、考古学者が単独で行ったとみられるものはほぼ無いといってよい。しかし、少なくとも考古学者がそれらの研究をしばしば目にするようになってきたことは確かであり、「分業」に基づく考古学者との協業も進みつつあるといえる。したがって、①中国の考古学界全体としては三次元計測の利



用が進んできている、しかし、②「分業」が主であり考古学者自身の実施や研究は稀であると理解してよからう。

このように、「分業」という中国考古学の特徴的な側面が反映していることが理解できるが、日本考古学と比較しようとするれば、日本もまた特有の状況があるため直接の比較には難しいところがある。日本では、日本情報考古学会で 1990 年代から工学・情報系の研究者による遺跡・遺物への適用例がありその後も続いていたが、2005 年から考古学者による適用例が徐々に増え、2010 年以降はそれが大きく増加し、内容も考古学的応用研究が多くなっている（平川 2017）。三次元計測の考古学への適用自体は、日本のほうが中国より先行したといえる。

しかし、この状況は日本情報考古学会をはじめ日本文化財科学会など特定の学会での学会発表のレベルである。注意すべき点として、『日本考古学』、『考古学研究』、『考古学雑誌』など分野を限らない「主要誌」では、三次元計測を中心に据える論文や、その成果を主に適用して問題解決に当たるなどした論文はほぼ無いといえる。筆者の体感としては、日本の考古学界では 2015 年頃を境として急速に三次元計測が普及したとみられるが、発掘現場の実務や学会発表、デジタルや考古科学関係の専門学会、または公私の研究会・研修会などで状況を呈しつつも、「主要誌」の状況を見れば中国の考古学界と同様またはそれより極端であり、実際には複雑な状況であることが理解できよう。

なお、若手の状況について、CNKI のデータベースには修士（碩士）論文と博士論文のデータも収録されており、同様の年代幅でそれぞれ検索した。ただし、修士論文については全てが収録されているわけではなく、「中国優秀碩士学位論文」として限定されたデータであること、前述の定期刊行物と同様にデータは遺跡・遺物など考古学に関して三次元計測が扱われたものであり、「非考古学類」に該当するような様々な分野も含まれることに留意されたい。その結果、修士論文は 2002 年に 2 件、博士論文は 2003 年に 1 件出現し、その後三次元計測に関する論文数は右肩上がり、類似した状況がうかがえる（図 2）。ここでも、考古学を専門とする論文ではなく、ほとんどが隣接分野の大学院生による論文であることが注目される。

以上から、論文という形での生産面に注目した場合、中国の考古学界においては全体として「分業」が多く、技術的なことは専門家に任せることが多いという特徴がうかがえるようである。

### 第3項 三次元計測の実例について

三次元計測によって、地形や遺跡・遺物というあらゆる実在を記録できる。不動産文化財、特に遺跡のフィールドワークと発掘の作業において、三次元記録のデータベースを構築したり、遺跡・遺物の保護と管理のための情報を確保したりするうえでも有用であり、考古学研究にも役立つと期待される。

冒頭で述べたように、あまり知られてこなかった中国での三次元計測の実態を紹介することと、論文の生産数だけでなく内容を確認することを兼ねて、やや冗長ではあるが事例を紹介していきたい。なお、説明の便宜上、記録対象が可搬的かどうかにより「不動産文化財」と「動産文化財」に分け、不動産文化財は規模によって、「遺跡群」（一定範囲に分布する複数の遺跡）、「遺跡」（1つの遺跡）、「調査区・遺構」（1つのトレンチやグリッド、1つの墓や建築物などの遺構）に区分して、三次元計測に関する主な実例を挙げる。ただし、この区分はごく便宜的なものであることを了解されたい。

#### 遺跡群

遺跡群については、広範囲に分布・展開する遺跡群を扱うため、固定翼機による空撮を行うことが一般的である。ソフトウェアで写真を処理し、取得された遺跡群の平面写真を分析することで、地上調査で発見が困難な遺跡が多数発見されるなどしている（e.g. 武松ほか 2018）。

近年は GIS、GPS、RS（リモートセンシング）によって、地理的環境における遺跡群の空間分析（spatial analysis）を行い、三次元モデルを通して複雑かつ通時的に変化する環境への適応を考察・復原する動きが見られる。さらに、気候変動による集落分布の変化や、人間活動が景観に与える影響を分析する動きもある。その具体例を列挙すると、冀東地域（内モンゴル高原、東北平原、華北平原）の新石器時代から青銅器時代の居住域の分布と環境変化との関係、吉林省鎮賚県における新石器時代から青銅器時代の遺跡の共時的分布と通時的変化、遼東半島における新石器時代から青銅器時代までの人間と地域の間関係、遼寧省における遼代・金代の古城の分布と環境との関係、浙江省良渚遺跡の古代都市における居住地の空間形態に関する研究などがある（王春玥ほか 2017；李鵬輝ほか 2018；李静 2017；丁紹通・韓賓娜 2018；金鑫 2018）。

そのほか、遺跡の探査には数値標高モデル（DEM）が重要な情報を与えるが、良渚古城

周辺の測定範囲を拡大し数値標高モデルを検討することで、宮殿区域、内城、囲壁の三重構造を構成していることが分かるなどの成果も上がっている（劉斌・王寧遠 2016）。

## 遺跡

遺跡については、ドローン（マルチコプター）を使用して低高度から多数の写真を撮ることが一般的である（劉建国 2015a）。それを使用せずデジタルカメラを長いポールに付けて撮影することもある。現在、標準的には、ドローンは空中写真撮影のルートプランニング、飛行、撮影などの自動化も進んでおり、複数のデジタル画像から三次元モデルを得る SfM（SfM-MVS：Structure from Motion, Multi-View Stereo）による写真計測が行われている。遺跡ではトータルステーションや、RTK 測定装置などを利用した三次元データ取得も行われており、三次元モデル、オルソフォトマップ、数値標高モデル（DEM）、等高線などが作成される（何凱 2017）。

2013 年、吉林省文物考古研究所と吉林大学边疆考古センターの共同研究で、ドローンによる低高度航空写真技術を導入し発掘現場の全域が撮影されたが、これは中国において先進的であったといえる。そして、この方式は吉林省全体の発掘調査に広げられることになった。すなわち、2015 年までに吉林省文物考古研究所が主催する各発掘調査は、ドローン空撮で記録されることになったのである。そして 2017 年には、吉林省文化財考古学研究所が「吉林省重要遺址航拍影像及数字化三維数据采集項目」を定め、省内の考古学者に対して、全省の重要文化財で空撮写真から三次元モデルまでのデータを取得すべき、という作業方針が示された（国家文物局 2018）。

2000 年代に西安兵馬俑博物館は、三次元スキャナで得た点群とデジタル写真から取得した 2 号坑のテクスチャにより、その精確な 3D モデルを構築した（趙昆・馬生濤 2007；宋徳聞・胡広洋 2006）。また、広東省文物考古研究所は、レーザースキャナで台山新村の砂丘遺跡の三次元モデルを作成し、CAD で遺跡の任意部分の平面図と断面図を描いた（曹勇 2011）。四川大学は、トータルステーションによるマッピングデータから層と遺物の三次元モデルを構築した（陳瑄・李玉牛 2012）。洛陽城定鼎門遺跡における隋唐時代の道路を保護するために、路面にある馬車車輪の痕跡などの情報をレーザースキャナで計測してデータベースが構築された（楊蔚青ほか 2012）。さらに、安徽省文物考古研究所は、ドローン空撮によって明朝中都午門の三次元モデルを作成した（王志ほか 2017）。

徐州獅子山楚王陵では岩を掘削した羨道壁の痕跡が明瞭であり、正確でリアルな三次元

モデルを作成するために壁面のテクスチャ情報を反映させようとした。これは江蘇師範大学が実施し、楚王陵の三次元モデルが作成された（陸益紅ほか 2013）。また、中国には多数の洞窟寺院があるが、規模が大きく形態も様々であるため、伝統的な実測図では研究のニーズを満たせない。そこで、2003年に雲岡石窟研究院は、雲岡石窟の三次元デジタルアーカイブを構築するために、三次元スキャナで各石窟とその外部形態がわかる石窟群の全体像を取得するとともに、その三次元モデルを断面の分析や劣化状況の記録、バーチャル展示などに応用している（李春梅・裴学勝 2005）。その三次元モデルはシステム内で閲覧、測定、セクショニングなどを実行することができ、修理前後の画像の比較もできるようになっている（何勇 2016）。

敦煌石窟では規模の大きな取り組みがあるが、三次元計測の対象には洞窟内の仏像や壁画が含まれる。多数の彫像が狭い仏龕に集中しているため、彫像間の影が密集し隙間がほとんどなく、正確な色彩の再現などでも困難な問題を抱えるが、デジタル写真測量、光のパターンセットの投影による三次元スキャン、レーザーによるスキャニングなどを駆使して計測を実施している（劉剛ほか 2005）。彩色塑像や多数の石窟で三次元モデルの取得や高精度のデジタル画像処理が行われ、莫高窟や榆林窟などでは全体の三次元モデルが得られているが、「数字敦煌（デジタル敦煌）」などの大型プロジェクトはそれらに基づき実施されたほか、曲面がある仏龕や大型壁画の実測図を正確かつ効率的に作成するのにも利用されたという（樊錦詩 2009；趙蓉 2016）。劣化分析、修復シミュレーションなどにもやはり応用されている（以上、柯長青ほか 2006；華忠ほか 2002；魯東明ほか 2002；潘雲鶴・魯東明 2003；曹源 2017；付心儀ほか 2019）。

2006年、四川省の文化財保護者は、HDS（High Definition Survey）技術を用いて樂山大仏の三次元モデルを取得した（李海剛 2007）。また、杭州武山広場にある石仏群では、高精度と低精度の三次元スキャンの2種類から三次元データを取得し、三次元モデルと断面図を作成している（楊秋和ほか 2009）。さらに、浙江大学は2015年に、杭州飛來峰の多数の仏像を写真計測（SfM）でデータ化した。その際、この方法の精度を認めつつも、この方法の原理と関わる単色で滑らかな表面や、明るすぎる・暗すぎるものを対象とする際の問題などが指摘されている（刁常宇・李志榮 2018）。

## 調査区・遺構

調査区・遺構については、2000年代には、しばしば三次元スキャナで点群を取得した後、

三次元モデルにテクスチャを貼る方法が使用されており、構成された三次元モデルからソフトウェアで断面図などの情報が取得されている（楊林ほか 2004）。その後、デジタル写真画像をもとにした SfM の手法が普及し、高精度でテクスチャ付きの三次元モデルを一度に得ることが多くなってきた。

調査区・遺構における適用例は多数あるため、ごく代表的な例を述べたい。同済大学地理と情報学院による新石器時代龍山文化の山西省陶寺遺跡 1・2・3 号坑の三次元計測では、発掘現場の状況が段階ごとにスキャナで取得され、発掘終了後もリアルにバーチャルな現場環境を再現できることが目指された（程小龍ほか 2015）。発掘調査では調査の進行によって層や段階ごとに形状が変わるため、それごとに三次元記録をすることが理想である。また、発掘後に調査状況をよりリアルな形でたどることができるなど、三次元記録の特長を大きく活かした調査といえよう。

同様な例として、遼寧省建昌県にある戦国～秦漢時代の墓地である東大杖子遺跡では、M40 墓の発掘の次の 3 つの段階ごとに三次元計測が行われてきた：①表土を除去して槨外の遺物まで、②槨外の遺物取り上げ後、③槨の底部の板と槨の中の土を取り除いた後の三次元モデルの 3 段階である。さらに、三次元モデルから各段階のオルソ画像、デジタル標高モデル、等高線なども生成できる（劉建国 2015b；図 3）。

前述のように、点群モデルの表面に撮影によるテクスチャをマッピングする方法が多くとられてきたが、作業量やコストの面から発掘の各段階で三次元記録を行うことには困難がある。そのため、中国国家地理測繪情報局により、レーザースキャナを使用して点群と直接的にテクスチャ付きのモデルを生成する方法が提案されるなどしている（南竣祥ほか 2017）。

中国では古建築の研究や修復・保存が重要な課題の一つであり、そのための手段としても三次元計測が有用である（黄慧敏ほか 2012）。しかし、実測図の作成は手間暇がかかる割に情報のロスが多く、実測者による差異もあるなどの根本的な問題がある。故宮も重要な建築物であるが、故宮博物院は 2000 年から、日本の凸版印刷と共同で「故宮文化資産デジタル化応用研究」、略称「故宮プロジェクト」を進めた。2004 年 5 月以来、故宮博物院の「古建築デジタル化測量技術研究項目組」は、故宮プロジェクトに基づいて太和殿、太和門、神武門、慈寧宮、および寿康宮などの重要建築物をスキャンしており、生成された三次元モデルは修復のための根拠や、建築物の変形の観測などに応用されている（王莫 2011；黄慧敏ほか 2012）。

敦煌莫高窟の中で最も高い石窟であり、著名な第 96 窟「九層楼」は、50 年ごとに修理作業があるが、レーザースキャナで九層楼をスキャンすることで修復の根拠として役立てている（袁国平 2018）。洛陽安国寺大雄殿などの古建築の修理にも、同様の方法が用いられている（周立ほか 2011）。

これらのほか、地震で被害を受けた遺跡の修復に関する実践もみられる。2008 年の四川大地震によって安岳石窟の経目塔と茗山寺石窟から落下した部位をスキャンし、修復に役立てられた例がある（張榮ほか 2010）。また、陝西省三原県城隍廟の 2 つの鉄旗竿のうち 1 つが地震で倒壊したが、破損した鉄旗竿を修復して保護するために、三次元点群による鉄旗竿の三次元モデルや DEM などを用いて、損傷してない鉄旗竿と損傷した鉄旗竿を比較して修復した例がある（侯妙楽ほか 2009）。河北省邯鄲市峰峰鉞区にある南響堂石窟は、響堂山石窟群の一部を構成するが、19 世紀末～20 世紀初頭に深刻な被害を受けた第 2 洞窟について、散逸した仏像を含むバーチャル復元に取り組まれた（唐仲明 2018）。

## 動産文化財

現在の中国では、多くの博物館でバーチャル博物館やバーチャル展示が盛行している。また、脆弱な対象を非接触で計測するためにレーザースキャナや SfM を使用する研究や、データベース構築とアーカイブ化に関する研究など、博物館資料のデジタル化に関する研究をはじめとして、以下のような様々な研究が行われるようになっている。

まず、いくつかの試みがなされている兵馬俑をとりあげる。2010 年以前の取り組みとして、360°パノラマ写真技術を兵馬俑のデジタル記録と展示に適用したり、彩絵跪射俑、將軍俑、秦始皇帝陵七号水禽坑出土青銅鶴を十数枚の写真から VR 化ソフトで作成した仮想現実による展示を行った（霍笑遊ほか 2009）。王婷は 2008 年に彩絵兵馬俑のスキャンを試み、高解像度の三次元モデルを作成し、データ上での修復実験を実施したうえで、三次元モデルを展示に応用した。それを踏まえて 2009 年から、兵馬俑 1 号坑の 100 点を対象に三次元モデルが作成された（王婷 2012）。2011 年には兵馬俑 1 号坑の銅馬車の三次元計測を完了している。

修復については、その他にも兵馬俑でいくつかの研究がある。コンピュータ上で兵馬俑の破片の接合シミュレーションや、三次元モデルから実測図を描くなどの考古学的作業などが行われた（周蓬勃ほか 2014）。破片接合には、手のジェスチャーでコンピュータ操作をする Leap Motion を使用して、三次元モデルの接合を半自動的に行うことを目指した研究も

ある。三次元モデルをジェスチャーでコントロールし、接合をシミュレートするものがそれである（盧浩然ほか 2015）。ほかにも、破片の三次元モデルからプリントした複数のレプリカを接合する実験を経て、接合順を確定した後に実物の兵馬俑を復元するという手順に役立てられた。さらに、完全修復のため、復元した兵馬俑の欠損部分をスキャンし、反転プリントしたピースを接合することも行われた（舒敏 2017）。以上のように、兵馬俑では復元方法に関する事例が豊富である。

内蒙古博物院は「館蔵珍貴文物調査及数字庫管理系統」プロジェクトを実施し、600 点以上の文化財をスキャンして三次元モデルを生成するとともに、中国文化財に関する法律と作業経験に従って三次元データ収集と作業の規準が策定された（塔拉ほか 2012）。また、北京の首都博物館では新館の設置にあたり、バーチャル展示のために館内にある 40 点余りの文化財が三次元モデル化された（杜侃 2011）。洛陽博物館では館内の石辟邪などの文化財をスキャンし、デジタルアーカイブを構築した（孫虎成 2012）。陝西省歴史博物館は、白磁の欠損部分の修復に三次元出力を利用した試みを行っている（李文怡ほか 2012）。さらに、山西省文物考古研究所は、絳県横水西周墓地出土の青銅器を例として、出土青銅器の保存に関して三次元データを採取する過程やデータ管理の方法などを探った（程虎偉ほか 2013）。また、河南省博物館は前漢代の彩絵雲紋繭形壺をスキャンし、特に彩絵の剥落の保護に関する計画を立てた（馬艷 2014）。

以上のように保護・保存・修復・復元に関する事例が多いが、それは大型の「動産」文化財にも当てはまる。三次元スキャナで泉州出土の宋代の木造船をスキャンし三次元モデル化した後、浙江大学で独自に開発された高精度テクスチャ自動マッピングソフトによってマッピングし、木造船を復元した（曾福泉 2017；図 4）。

北京建築大学などの建築遺産のデジタル化を専門とする研究者らは、三次元記録により遺物の劣化を検出する研究において、精度と効率を考えた技術面での検討も行っている。三次元スキャン後にテクスチャマッピングする方法と SfM の精度や効率などの長所・短所を克服するため、高精度関節アームレーザーで取得した高精度の幾何学モデルと、高解像度の三次元テクスチャモデルを高精度で合成・再構築する方法が提示されている（夏国芳ほか 2018a；図 5）。この方法を彩絵仏像などの劣化検出に応用し、テクスチャ付き三次元モデルをインタラクティブに操作して表面劣化を定量的に検出する方法も開発している（夏国芳ほか 2018b）。

動産文化財の特徴の一つとしては、CT の使用も挙げられる。例えば、新石器時代の著名

な田螺山遺跡で出土した植物遺体の三次元モデルを CT で作成したのがあり、劣化・分解されやすく外観的特徴からは種類を特定することが難しい植物遺体について、中国科学院大学人文学院の研究者らは、特徴的な内部構造を持つ植物や菌類の三次元モデルからそれを特定することを可能にした（訾威ほか 2019）。

吉林大学文物保護実験室は三次元計測について様々な試みを行っており、仏像の三次元モデルのデータベースとデジタルアーカイブが構築されている。一方、SfM による石器の三次元計測について体系的な実務的方法も検討されている。通常、石器の大きさや石材によって撮影時のカメラの設定や撮影枚数が異なり、写真をソフト上で処理するにも異なる条件がある。同実験室では、5cm 以下の石器を撮影する際、細部を表現するためにマクロレンズの使用を規準としており、照明の工夫や画像処理によって石英や黒曜石などの光の透過率が高い石器でも適切にモデル化できるようになった。さらに、考古学的研究への応用も検討されており、得られた三次元モデルから製作痕跡の統計分析を行っていることは重要である。ここで注目できるのは、デジタル考古学の研究分野を広げるとともに、「中国考古学と深く組み合わせる」という目標を掲げていることである（戦世佳ほか 2017；周振宇・閔瑩 2017）。

このように三次元計測が考古学研究に結びついた例としては、中国社会科学院による青銅鼎の例が挙げられる。三次元モデルで青銅鼎の等高線図を作成したところ、鑄造時に青銅鼎の底が完全に対称にはなっていないことが判明し、そこから製造技法研究に役立てられることになった（姚姪・宋国定 2017；図 6）。これは、通常の図面等では把握が困難であったと思われ、三次元計測を応用した考古学研究の成功例といえよう。ただし、考古学研究に応用した例はいまだ多いとはいえない。

こうした様々な実践の一方で、河北師範大学の修士課程の学生により行われた、発掘現場で石器の三次元モデルの生成にスマートフォンを活用した例がある（胡子堯・周冰 2016）。これは出土した石器をスマートフォンで撮影し、SfM (Agisoft Photoscan (現 Metashape)) で三次元モデルを生成した簡便なものであり、さらに三次元モデルから得られたオルソ画像で実測図を描くものである。

#### 第 4 項 三次元計測に関する傾向と問題

三次元計測に関して中国考古学関連の実例を上で見えてきたが、いくつかの傾向が導き出



せよう。

2000年代に入ってから様々な実践が行われており、遺跡群から遺物まで様々な三次元データが取得されてきた。使用されている方法や機材も、他の先進国と比べてもほとんど遜色がなく、実施規模も大きなものがある。また、調査の進展過程を三次元記録に残すなど、欧米の考古学者による先進的な取り組み（e.g. Forte *et al.* 2012 ; 2015）に類似したものもあった。このように見てくると、中国の考古学関連分野では、三次元計測が非常に盛んに行われているように見える。

しかし、冒頭でふれたように、中国全土の発掘現場や展示収蔵施設などで普遍的に行われているとは言いがたい。実際には考古学関係者の三次元計測への理解は低調な場合も多く、一様ではない。また、上では著名遺跡など文化財として重要なもの、重点的に保護されるべきものを中心とした顕著な事例が際立つが、そうした目立つ例のみに注目しては見えてこないところもあろう。中国の多くの考古学者にとって、三次元計測に触れたり見聞きたりする機会は以前より増えたとしても、計測や活用への関与の程度には疎密があり、現状では全体としては十分に普及・浸透するには至っていない。

加えて、前述のように三次元計測は「分業」として実施される傾向が強く、考古学者自身が実施することが稀であるのも大きな特徴といえる。ここでとりあげた諸事例は、そのほとんどが考古学者というより三次元計測や関連技術に長けた専門家によって成功しているものであることに注意が必要である。世界的にも高水準に達しているとみられることは、ある意味で当然ともいえよう。おそらくそれとも関係すると思われるが、三次元計測の目的が保護・保存・修復・復元のようなキーワードで示されることが多いことも注意点といえよう。また、データベース、デジタルアーカイブも重視されているようであり、それらに取り組まれてきたことは注目できる。

それに対し、考古学研究自体への本格的な適用については、「中国考古学と深く組み合わせる」目標を掲げた取り組みなどを紹介したが、まだ一部にとどまっており、考古学者がデータを十分に活用しきれているとは言いがたい面がある。今後発展させるべきところであろう。貴重なものにとどまらず遺跡から出土する、多様で普遍的な遺物の網羅的な三次元計測への動きも芳しくないようである。研究への高度な適用や「ありふれた」遺物への網羅的計測に関して、日本でもそれを訴える声も聞かれ（e.g. 太郎良 2017）、いくらかの実例もあるが、現状の日本考古学も全体としては、本格的となるにはほど遠い感がある。

ちなみに、中世日本の博多と中国寧波の間で南宋様式の軒平瓦に同範のものがあること

が発見されたが、その際に威力を発揮したのが三次元モデルどうしの比較・マッチングであり、この種の瓦の評価と日宋貿易の研究に寄与するものである（中園 2017）。このように考古学・歴史学の問題解明へのさらなる活用が期待されよう。

記録の面では、中国の考古学者は、もともと日本のように実測図に執念を燃やさないため、三次元計測に移行しやすいという面があると思われる。ただし、報告に実測図を付けることにはこだわる傾向があり、中には実測図作成のために三次元計測を用いる向きも見られた。

なお、学生による SfM を利用した試みについても触れたが、スマートフォンなど簡便な道具でも一定程度の品質が期待でき、目的によっては十分活用できる。このような例があることは次世代を考えるうえで重要であると思われ、記憶しておきたい。

### 三次元計測の利用の背景

これまでの検討から、関連分野を含む中国考古学界全体の傾向としては、三次元計測は伸びをみせており、新たな潮流として位置づけられるとあってよい。ただし、3D 技術の専門家との「分業」が多いことは、指摘してきたとおりである。以下では狭義の考古学だけでなく関連する諸分野も含めて、現在のような状況に至った要因や、今後の課題などについて考察する。筆者はより相対的な視野から中国考古学の特性の把握につとめ、理解を深めたいと考えている。

中国考古学では、編年や文化の区分・同定を基盤とした文化史的考古学の範疇に入る研究が以前から盛んであるとともに、マルクス主義理論を背景にした「古代社会」の発展に関する研究などが行われてきた（e.g. Trigger 1989；小澤ほか 1999）。これは、中国考古学の特徴を現出させている大きな背景であることは間違いないであろう。

さらに、現在の中国考古学の動向としては、「古代社会」をあらゆる方面から探索し社会発展の動因についての研究を行う、という新たな段階を迎えているようである。これにより、セトルメント・パターン、景観考古学、農業の起源、国家の起源といった新しい視点での研究を行うために、考古学者はフィールド、特に発掘調査において観察、収集、記録する情報量を従来よりも大幅に増加する必要があるが出てきている。これらのテーマは、欧米考古学、特に北米のプロセス考古学のそれとも通じるところがある。このことは中国考古学の変化ではあるが、上述した中国考古学の特徴を現出させている背景と矛盾しない形で行われているようである。北米や西ヨーロッパ留学から帰国して諸外国の事情に通じた考古学者が増加したこともこうした要因の一つとなっているであろう。このような学界の変化とともに、

様々な自然科学的手法が発掘現場でとられるようになり、採取される自然遺物のサンプルも多様になっている。三次元計測の採用は、このような自然科学的手法の増加とも関係していると思われる。

一方、中国の経済発展と科学技術の進展は著しく、国内の大学や研究機関などに様々な技術者や科学者がおり、使用機材や技術等も含めて上記のような変化に応えることが可能になっていることも、三次元計測の実施とその活用を可能にしている大きな条件の一つと考える。

国家戦略としての「一带一路」のもと、中国人考古学者の国際活動が推進されており、国外での活躍なども増えている。2013年からは中国社会科学院と上海市人民政府による大掛かりな Shanghai Archaeology Forum（「世界考古論壇・上海」）が開催されており、世界の著名考古学者が多数招待されるなどしている。このような国家的な強い後押しが考古学での三次元計測やデジタル技術の応用に間接的にも影響しているであろう。

近年、中国では「パブリック考古学」（前述した「中国パブリック考古学」）が盛んになっている。以上挙げた諸事例には VR など博物館展示などへの応用が含まれていたが、博物館活動を含む中国パブリック考古学にも三次元計測の成果や CG が多用されるなどしている。それが盛行する要因には、愛国心教育の一環という側面があるなど、パブリック考古学の出所としての欧米とは異なる背景がありそうである。そのため中国的なパブリック考古学として展開しているといえる（楊帆 2018a）。学者が市民に「教える」スタイルが基本であり、国民に対する考古学的説明や考古学的教育を通して、国民を文化遺産の管理と保護に参加させるという目的もある模様である（高蒙河 2013）。このように欧米との根本的な違いはあるが、ともあれパブリック考古学のもつ形式的な諸側面のうちの少なくとも一部に該当する活動が見られ、しかも盛んであるのは確かである。国民と考古学をつなぐ重要な橋渡しとしての博物館は、考古学を通じた歴史教育や愛国心教育などの最前線なのである。その重要な資源である館収蔵の貴重な文化財は、保存・管理・研究を兼ねつつ、いかにして国民に提示するのが重要な課題である、という事情も三次元計測を後押ししていると考えられるのである。

そのほかにも、国外の学界の動向や、国際競争力への志向など、様々なものが三次元計測を促進する要因として考えることが可能である。これらの諸点については稿を改めて別論する必要があるが、学史、国家戦略などを含む以上のような複合的要因があることは確かであろう。

### 三次元計測の必要性

中国の考古学の実践において、三次元計測の導入により密接に関係する条件や動機として、以下が挙げられよう。それぞれ解説するとともに論評を交える。ただし、これらは上で見たような考古資料の三次元計測に関わる考古学以外の専門家の意見や、筆者の実際の見聞をもとにしており、考古学者の多数意見ではないことに留意していただきたい。

1. すでに見たように、手作業の実測では実測者による変異が大きく、主観の影響があるため、三次元計測で改善されるという指摘がある。納得できる意見である。ただし、特定のプロジェクトや課題に取り組んでいない一般の考古学者にとっては、三次元計測自体への理解が浅い場合があり、深刻ではない場合も多いとみられる。また、これは中国固有の問題ではなく、実測と三次元計測の本質に関わる普遍的な問題でもある。実測図へのこだわりがより強い日本はなおさらであろう。
2. 正確で精密な実測図を描くには相当な時間を要する割に、実測図から得られる有効な情報は非常に限られるという指摘もあった。現在の中国では日本と同様、緊急発掘件数が学術発掘件数より圧倒的に多く、時間をかけて実測図を描くのには困難がある。なお、近年『考古』などの主要誌での発掘報告は、遺物の実測図ではなく写真を載せることが多くなった。実測図も、遺跡の隆起や段差、遺物の輪郭、人工による穴など明らかな特徴だけを描くよう単純化する傾向がある（劉緒 2017）。これまで、遺構も伝統的に単純化・省略された表現が多く、レベルが記されないことも多い（図 7-1）。墓の場合、副葬品は出土位置を示す程度のことも多い（図 7-2~4）。三次元計測が多用されれば、この改善に役立つと期待される。
3. 発掘現場の公開が進められているとはいえ、外部者に対して閉鎖的であることも多く、考古学者しかいない現場ではリアルタイムの記録が不足しがちであるという意見がある。発掘の進展は不可逆的であり元に戻すことができないため、三次元計測に期待がかけられる。スピードや精確性とも関わる問題であり、三次元計測を「内部」でいかに普段容易に実施できるようにするかという課題があろう。
4. 発掘完了後に、回収された遺物のほとんどが倉庫に保管され、代表的なごく一部が抽出されて実測図や写真として定期刊行物か報告書で報告されるのが普通である。報告書の場合、出版は様々な理由で数十年かかることも多いため、資料が扱えずに困ったことのある研究者は多いであろう。三次元計測で直接改善されるかは疑問もあり、質の良いア

ーカイクの公開なども前提となろうが、三次元データがある程度の遺跡で公開されるようになれば利用要求を間接的に促し、資料公開のスピードや不平等の改善につながるかもしれない。

5. 早期の劣化や棄損の恐れがある遺物などは、手作業による実測・写真やレプリカだけでは、活用しながら長期保存するには限界があるという意見はもっともである。そのような資料は、三次元データによって格段に多様な利用機会が生まれるであろう。
6. 展示される遺物はごく一部である。中国には 767,000 点の不動産文化財、1 億 8,000 万点の動産文化財、そして数多くの民間コレクションがあるとされる。全国で 5,000 ヶ所以上の博物館が設置されているが、展示率は 2.8%に過ぎない（張暁明 2019）。文化遺産が豊富で収蔵遺物も膨大である故宮博物館も、展示率は同様のようである。三次元データ化されそれが活用されることで改善が期待され、外部に知られていなかった資料に新たな評価が生まれることも十分考えられよう。
7. 遺跡などの不動産文化財が膨大である。交通が不便で辺鄙な地域にある遺跡も非常に多く、敦煌などの例を除き、それらが人目に触れることはほとんどない。仮に遺跡の一部を切り取って都市に移設するとしても、多くの労力や経費がかかるうえ、遺跡を棄損することになる。このような大規模で動かせない資料の公開・活用に有効性があることは疑いない。

以上を意識すると、中国考古学では三次元計測がさらに広く行われる必要があると思われる。もちろん、これらの事情には必ずしも中国考古学に固有でないところも多く、日本や世界と共通するとみられる課題も多い。

### 萌芽的動向

これまで見てきたような状況には、変化の兆しもうかがえる。

ここでは「分業」と表現したが、専門家に委ねる傾向が強いのは中国の特徴といえる。しかし、前述した、スマートフォンで撮影した石器の画像から SfM で三次元モデルを生成するという学生による事例が示すように、専用機器や高度な技術を使わなくても概ね良好な成果が得られるようになりつつあり、その気になれば、考古学者自身が三次元計測に容易に取り組める環境になってきたことを示しており、注視すべきである。「分業」は良い方向に働けば威力を発揮するため筆者はそれを否定するものではないが、「分業」をするにしても

三次元計測の専門家と考古学者の間で、さらに深い理解と意思の疎通を含む真の「協業」が進めば、考古学研究上の問題解決に寄与する研究も多く生まれるであろう。

実際に、考古学を専攻する学生のほうが、地方の考古学の調査機関よりも SfM に関心をもっているかもしれない。筆者の SfM での記録作業に同行し、その作業を見た現地の大学院生たちは非常に興味をもち、大学に戻ってさっそく土器や土器片で試していた（楊帆 2017b）。このように、中国におけるデジタル・ネイティブ世代といえる若い世代は心理的抵抗も少なく、関心をもつようである。

そして、三次元技術について、考古学を学ぶ学生に対する本格的な教育も開始されたようである。2018 年、西北大学は VR 技術による没入型デジタル環境のための考古学バーチャル実験室を中国で始めて設置した。これは考古学を専門とする学生に対して発掘現場の諸作業を訓練できる施設である。発掘現場で収集したデータを素材としたソフトウェアが開発されており、様々なフィールドの環境で、各種の調査と発掘記録をシミュレーションでき、調査前に基礎的なスキルを習得することが期待される。また、教育する側も時間や空間に制限されることなく、仮想空間で考古学教育を実践することができるという（張佳 2018）。同様の取り組みをする先行例として、アメリカの Duke 大学が先端的システムを使用して同様の考古学教育を行っていることが想起されるが（Forte *et al.* 2012）、こうしたことはヨーロッパ、オーストラリアなどでも実施されている。

こうした取り組みを含めて、考古学における三次元計測とその応用については、欧米以外では中国のほうが日本より組織的かつ先行しているとみられ、今後の展開が注目される。

## 第 5 項 おわりに

以上、中国考古学における三次元計測をめぐる状況とその特徴を中心に論じてきたが、さらに筆者の所見なども記しておきたい。

見てきたように、中国では三次元計測とその応用に関して、欧米考古学の先進性に比肩できる部分が見られ、大規模なプロジェクトや一定の先進性のある取り組みなど、非常に華々しく、注目に値するものが多く実施されている。ある意味で極めて勢いがあるといえよう。そこには中国の国家戦略の影響も表れているはずである。

華々しい「モデル」は多いが、それで覆い尽くされているわけではなく、中国全土で展開している現実の考古学的調査や普及・公開の全体から見れば、まだ取り残されている部分も

あるのが実際である（第 2 節）。しかし、モバイル決済はもとより社会的な様々なサービスを含む日常生活でのデジタル技術の普及・定着には相当なものがあり、学術誌の電子データを学生が利用しようとする際にもすでに非常に容易になっていることなどを見ても、考古学へのデジタル技術の浸透が今後促進されることはあっても、退歩することはないのではないかと思える。

なお、日本では、日本情報考古学会の例を挙げたように、以前からデジタル化・三次元化についての先進的な取り組みがあり、2010 年代からは考古学者自身による急速な普及がなされている。研究面への応用も多少とも出てきており敬服に値するが、一方、行政・博物館・大学などの研究機関のいずれもが中国ほどのスピード感がなく、規模も慎ましく、研究者・職員の興味・良心・苦勞に依存する部分が大きいように筆者には映る。しかし、真の定着という意味ではどちらがいいのかは不明である。中国では保存や普及だけでなく、考古学研究の面で三次元計測を前提とした従来にない優れた研究が展開するかどうかは、「分業」を含む中国考古学が本来持っている特性とも関わっており、容易に予測しにくい。そのような意味で、考古学の中にいかに定着していくかが今後の課題であろう。

中国考古学における 3D 考古学

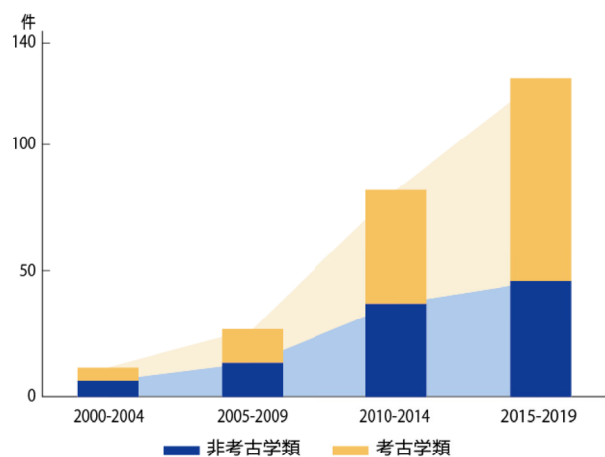


図 1 中国の考古学関係定期行物における三次元計測に関する論文数の推移

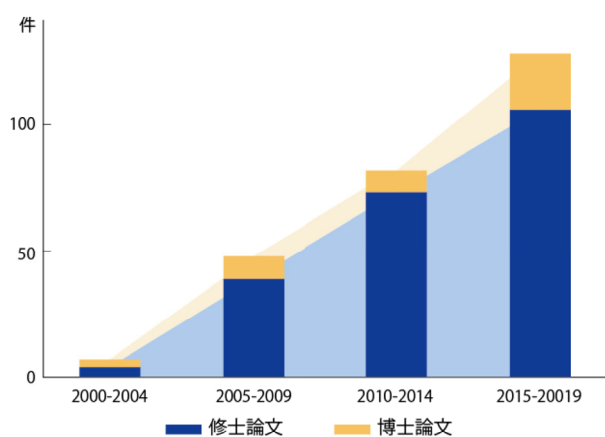


図 2 中国の考古学における三次元計測に関する学位論文数の推移



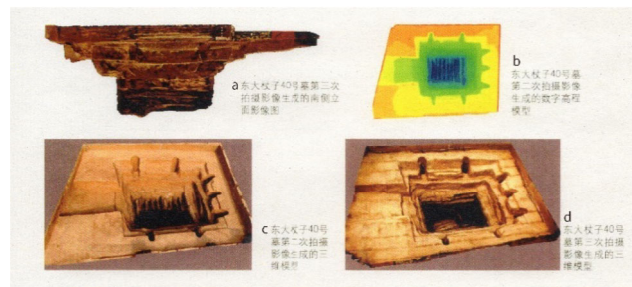


図 3 発掘段階ごとの三次元計測 (劉建国 2015b)

(a. 墓の三次元モデル、b. 第 2 段階の DEM、c. 第 2 段階のモデル、d. 第 3 段階のモデル)

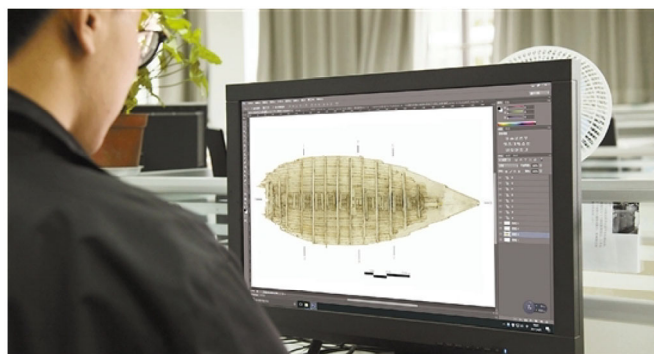


図 4 宋船の三次元モデル (曾福泉 2017)

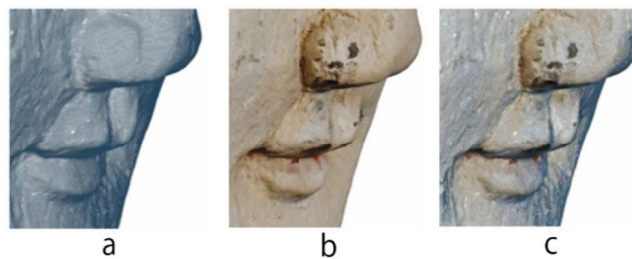


図 5 仏像表面の各種表現 (夏国芳ほか 2018a)

(a. 三角メッシュモデル、b. 三次元テクスチャ、c. ジオメトリ+テクスチャ)

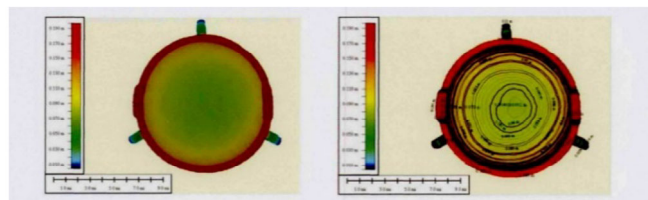
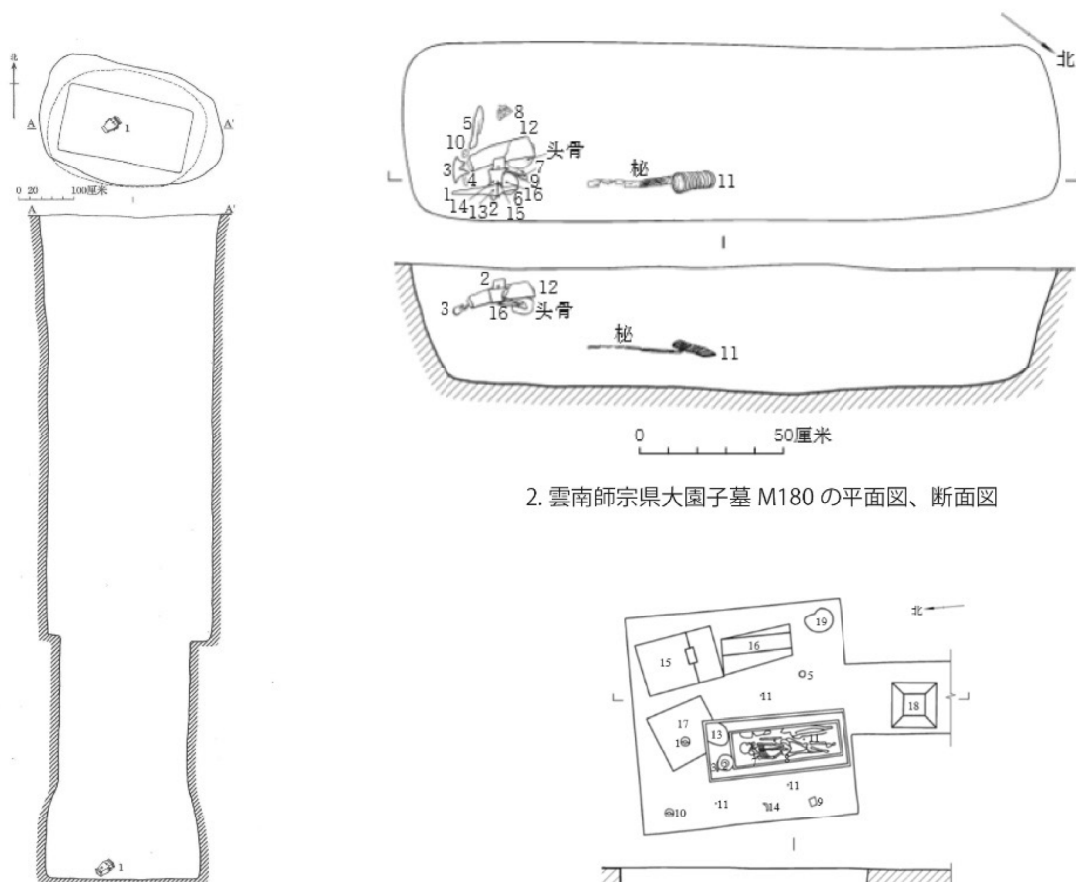
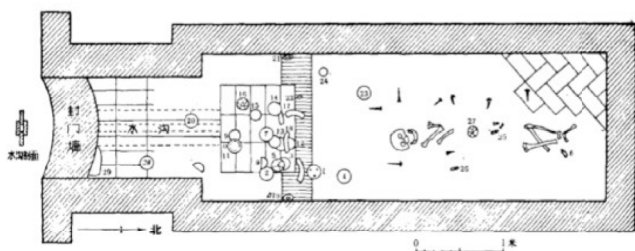


図 6 三次元モデルによる青銅鼎の検討 (姚姪・宋国定 2017)

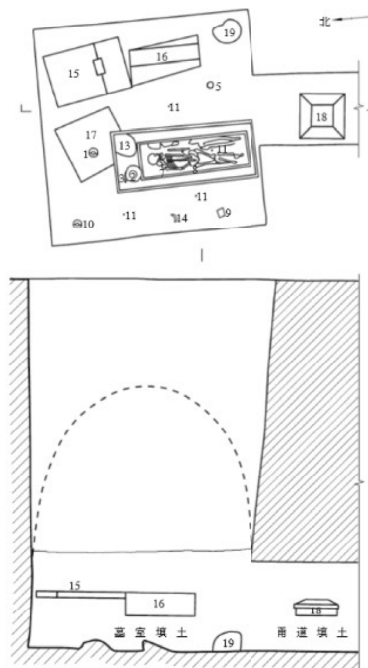


2. 雲南師宗県大園子墓 M180 の平面図、断面図

1. 天馬一曲村遺跡 J7H23 の平面図、断面図



3. 江蘇江寧東善橋南朝墓平面図



4. 河北元氏県南白楼墓地 M3 の平面図、断面図

図 7 中国の実測図の例（遺構）

(1 北京大学考古系商周組・陝西省考古研究所 2000、2 中国社会科学院考古研究所ほか 2019、3 呉学文 1978、4 武漢大学考古学与博物館学系ほか 2018)

## 第 2 節 中国での三次元計測の実践から

本節では、筆者の中国での調査の経験などを述べることで、三次元計測をめぐる事情や関連する事柄について実際の状況の一端をうかがう手がかりとすることにしたい。

### 第 1 項 はじめに

筆者は中国東北地方を中心に、中国の現地で遺跡や遺物を実見し、三次元計測なども多少試みてきた（楊帆・太郎良 2015, 2016；楊帆 2017a, b）。その際、三次元計測や中国パブリック考古学の実態についても実状の把握に努めてきた（楊帆 2017a, b, 2018a；楊帆・太郎良 2015；2016）。それらを通じて、文献等で知ることが難しい生の声を含む実状などを述べる。

### 第 2 項 調査

ここでは、2016 年に中国の東北地区での調査と見聞の例を述べる。訪問先は、以下である（図 1）。中国遼寧省の牛河梁工作隊、内モンゴルの敖漢史前文化博物館（図 2）、赤峰博物館（図 3）、紅山文化研究院をはじめ、その周辺地域を含めていくつか機関を訪れた（詳細は伏せる）。これらは、いずれも筆者が興味をもつ新石器時代の土器が収蔵されており、中期から晩期に該当する筒形罐（図 4・5）やそのほか様々な資料を収蔵している。現地では、観察・メモ写真と、一部は写真測量（フォトグラメトリー）の一種であり、撮影位置の異なる多数のデジタル写真を解析して三次元モデルを得る SfM-MVS（Structure from Motion, Multi-View Stereo）を使用した。解析には Agisoft 社の Photoscan（現 Metashape）を使用した。

これ以前の調査でも、ある博物館で新石器時代の土器の三次元化を実施したことがあるが、その際は、資料の写真撮影は博物館側の撮影担当者に限ることが条件とされるなど様々な制約があり、筆者の希望を担当者に伝えて撮ってもらわざるを得なかった。結局、希望した時期とは異なる資料 1 個のみの撮影しか許可されず、撮影したい角度や方向の写真も満足に得ることはできなかった。中国の考古学者とその学生が同行した今回は、自ら対象の撮

影を行うことができたが成果の公表には制約があり、自らの資料とするにとどめざるを得なかった。

報告書や実測図で得られる情報には限界がある。また、中国で刊行される報告書を見れば、特に実測図においては日本のものと比べて単調で規格性に欠けることが多く、表現される情報も少ない。目的とする実物の筒形罐からは、図で分かりにくかった口縁部形態の細部や、図に示されていなかった突帯と胴部施文の切り合い関係や施文方法をはじめ、様々な情報が得られた。また、沈線のうち図では省略されたものが1本あることもわかった。詳細な観察ができた稀な機会であったが、やはり実物と報告書の図面との差異は明らかであり、三次元記録の必要性を強く感じた。土器表面の細かな凹凸をはじめ、施文の具体的な方法などは、二次元の図面や拓本などからは決して容易に読み取れない情報であり、土器表面の色の分布や煤の付着の状況などの具体的な情報なども同様である。土器の観察や、作成した3Dモデルを通して、土器には多様で豊富な情報が多く備わっているにもかかわらず、これらの情報は報告書や実測図ではほとんど表現されてこなかった、あるいは、されていなかったことが痛感される。

三次元記録を行うことで、これらの情報を一つのデータとして濃縮することができ、それによって様々な情報をいつでも検討することが可能となった。筒形罐の場合、これまでは報告書掲載の拓本では詳細な施文方法や方向は理解できなかったが、三次元化を実施したことにより、かなり詳しく把握できるようになった。より詳細にこの3Dモデルを検討することで、筒形罐の製作技法への言及、さらには製作者の動作に関する情報も引き出すことができると考えている。以上から、三次元記録の実施は、考古資料の記録の面でも、研究の面でも、非常に有効であるといえる。

三次元記録の利点の一つとして、一度データを取得すれば、現物の代わりとしていつでも資料の具体的な検討ができることが挙げられる。なぜなら、中国で実際の考古資料を観察するには経済的にも、時間的にも困難が伴う。これに加えて、中国で調査するには多少なりとも制限がかかる。今回の調査は厳格な撮影許可を得る必要があったが、発表許可についてはさらにハードルがある。筆者は土器を指定して観察・撮影するつもりであったが、指定した土器の収蔵先が各地に分散しており困難であった。撮影した土器の中には未発表のものが多く、それに加えて、現在の中国考古学界では、協力研究、特に国際間の協力研究は促進されつつあるが、ある運用面では手続きが厳しくなっている側面もある。そのため、撮影した写真も3Dデータの取り扱いについても、様々な配慮をしなければならない。

一方、博物館展示を一般の人が撮影するのは以前よりもかなり緩和されており、自由に撮影できたり以前は入館料を徴収していた博物館が無料になるなど変化があるが、逆に研究目的の場合には制約が大きく、以前からの慣習によるところもある。

### 第3項 まとめ

以上は筆者のささやかな事例ではあるが、地方の状況についていくつかの気づきを得られた。三次元計測は中国考古学においても注目され、既に顕著な、優れた取り組みも見られるようになってきている。しかし、全面的に行われているというわけではなく先進的組織が中心なのではないかと思われる。別の機会、別の地域も含めて、筆者が接触したことのある考古学者や調査機関、博物館などでは、三次元計測をほとんど知らない、あるいは興味がない、知ってはいても無関心という場合も多かった。そして、前節でも触れたが、なぜ三次元計測をするのか理解できない、といった素朴な疑問の声をかけられることも少なくなかった。そこには、三次元計測という方法自体に対する理解だけでなく、貴重品ではなく土器ましてや土器片になぜ適用する必要があるのか、またなぜ詳細な部分が必要なのか理解に苦しむというニュアンスもうかがえた。

中国では3Dをめぐる大規模で華々しい成果や取り組みがあり、総体としてはそれが進行している一方で、このように取り残された状況も看取でき、それはごく一般的な状況や考古学者の実態の一端を表しているのかもしれない。特に、地方ではそのような面が強い可能性があると思われる。なお、前節でも紹介したが、筆者の作業に同行し、SfMの作業を見た現地の大学院生たちは非常に興味をもち、大学に戻ってさっそく土器や土器片で試した。世代交代の進行とともに状況が変化していく可能性は十分に考えられよう。

実測図の正確さやそこに盛り込まれる情報の粗密も、そして実測図の研究における位置づけも、世界的にはその国ないし地域の考古学・考古学者の問題意識や態度に依存するであろう。中国考古学と、実測図に正確さと規格化された表現による情報を盛り込もうとする日本や韓国の考古学とを比較すれば、その違いは明らかである。対象へのアプローチのしかたに違いがあることが改めて痛感される。

中国での資料調査が必ずしも容易ではないことは、国外の考古学者に知られていることのようにある。ただし、筆者自身、スムーズに調査する幸運に恵まれたこともあるため、全てというわけではなからう。また、比較的資料調査がしやすい日本でも機関によっては対応

の違いも見られ、特に博物館においては資料調査に料金を課すところや、既に公表済みの資料であっても公開に許諾を求めるところもある。多かれ少なかれ他の国でも類似したことがあるかもしれない。中国でも日本でも、研究における資料の公平な利用や、それを通じて新たな知見が資料自体にフィードバックされ資料の価値をさらに高めることよりも、資料の利用を制限したり管理したりすることに意識が向いていることもあるように思われる。もし、そうした意識があるとなれば、改善の課題は多いと思われる。

現在、中国考古学は新技術に関する事柄だけでなく、中国パブリック考古学や国際的な共同研究など様々な方面において日進月歩であり、遺跡調査の一般への公開も許可されるなど制度面や実際の対応の面が改善されつつあるため、制度面を含めて今後変化していく可能性はあると思われる。



図 1 調査地



図 2 博物館の展示（敖漢史前文化博物館）



図 3 赤峰博物館



図4 筒形罐



図5 筒形罐の破片（口縁部）



## 第4章 中国考古学の研究動向分析

中国考古学の特質を捉えるうえで、以上のような検討だけでなく論文等の分析が必要となる。特に、論文等をできるだけ多く網羅的にとりあげ、その諸属性からできるだけ数量的に把握し、研究動向などを読み取っていく作業も重要であると考え。そこで、本章ではそのような観点から分析を行うものである。

### 第1節 研究動向分析にあたって

#### 第1項 はじめに

中国考古学の特質を把握するために、前章まではこれまでほとんど検討されていなかったテーマを含む諸トピックを挙げて論じてきた。しかしながら、トピックごとの検討であるため、中国考古学の全体像を捉えるという意味からも、より総合的な分析が必要であり、またそうすることで意義ある成果が得られると考える。

これまで、中国考古学の「発展」状況や現状などに関して、中国人考古学者以外にも日本人考古学者などによる論述がいくつかあるほか、欧米人考古学者によるものがある。しかし、それらの多くは、単純に中国考古学を1つのものとして扱ったり、限られた特定の時代やある学術的テーマの研究動向を紹介したりするものが多く、執筆者の関心や問題意識などによって偏りがあると考えられる。そこで筆者は、中国における考古学の主要誌に掲載された論文や記事は膨大ではあるが、それらを可能な限り網羅的に収集してデータベース化し、分析することができれば、中国考古学の変化の状況やその要因をはじめ、これまでに気付かれなかったことについてもより適切に抽出できる可能性があると考え。

そのような大掛かりな試みはこれまで行われてこなかったが、研究動向の分析として参考になるいくつかの文献がある。いずれも本論が目指すような網羅的な分析ではないが、意図や方法で参考になるものとして、都出比呂志（1986）が日本考古学の主要誌の掲載論文をカテゴリー分けしたものがあり、分析的に傾向を出したものとして注目される。また、中

国考古学に関するものとしても、宮本一夫（1999）は、欧米と日本における中国考古学の研究動向を述べた論文で、アメリカを中心とした欧米での中国考古学関係の論文数をグラフとして可視化している。さらに、K. Victor と M. C. Beaudry（1992）は、ジェンダー考古学的立場から論文における女性研究者の貢献度を数値化し（E-Score）、その時系列的変遷をグラフ化して評価したが、松本直子ら（1999）は、それを参考に日本の主要誌に適用して同様に可視化するとともに、Victor と Beaudry が作成した欧米のグラフと対比して日本の状況を論じている。以上のように時系列的変化をグラフで示すことにより、変動を視覚的に端的に把握しやすくなることは疑いない。

なお、川宿田好見（2009）は、弥生土器研究の動向分析をするにあたって、非計測的（質的）属性を扱う多変量解析の一種である数量化Ⅲ類を用いて文献の諸属性（年代を含む）とその著者である研究者について解析している。そこでは二次元グラフ上の布置からカテゴリー化して把握が行われている。時系列グラフだけでなく、このようにデータの解析法ないし表示法についても一工夫することによって、データの持つ意味が読み取りやすくなることがわかる。

筆者は、これらの先行研究より網羅的かつ詳細な項目を多数とりあげたい。こうして多くの情報を抽出することで、中国考古学の特質にいつそう迫ることができると思う。

## 第2項 対象と方法

近代的な方法による中国考古学は1920年代に始まったが、日中戦争あるいは国共内戦などに伴う社会環境の激動の期間を経て、中国の考古学研究は1949年の「新中国」、中華人民共和国の成立以後に安定してきた。全国的に考古学研究が展開されるとともに、中国で「考古三大刊」といわれる『考古』、『文物』、『考古学報』が定期的に刊行されていく。これらの刊行物は資料紹介と学術的論文の双方に重点を置き、多くの発掘調査報告と、研究論文をはじめとする様々な記事が掲載され発表された。したがって、これら3誌をすべて扱って分析するのが理想であるが、『考古』だけでも約1万件の記事にのぼるため、本論では中でも中国考古学を総合的に扱い、最も権威があるとされる『考古』のみを分析対象とすることにした。

『考古』は1955年に創刊されたが、創刊時には隔月刊であり『考古通訊』という誌名であった。中国各地の発掘調査報告や考古学に関する知識を広める記事などが主な内容であ

る。その後、中国国内の発掘調査件数も大きく増加し、ほとんどの発掘調査報告が掲載される『考古通説』は、1958年に『考古』と改名し月刊に変更された。この時期の中国では、様々な政治学習やイデオロギー変換運動などが活発であり、そうした各種の運動は社会の各分野に深い影響を与えたが、考古学も例外ではなかった。この時期に中国で発行された新聞や定期刊行物は、常に編集部を名義とするか、または著者が明記されない形で綱領的、政治的な社説を掲載する特徴があり、『考古』もそうであった。また、当時の『考古』には、例えば「決心作左派、力争紅与專」（郑振铎ほか 1958）\*のような記事を考古学者が書いたり、新華社（1958）による周恩来の台湾海峡情勢に対する声明「周総理關於台湾海峡地区局勢的声明」が掲載されたりもしている。また、「アメリカの侵略者の軍事的脅威と戦争の挑発を粉碎しよう」と呼びかける「粉碎美国侵略者的軍事威脅和戦争挑畔」（元 1958）といった記事などもある。こうした記事のほか、研究論文には『毛沢東語録』からの引用などもよく行われている。考古学者の書いた政治的内容を含む記事が掲載されるなど、この時期には政治的な記事、考古学者の政治的な発言が堂々となされているのが特徴といえる。

注意すべき点は、『考古』は1966年の文化大革命の開始後すぐに、1967年から5年間にわたり休刊されたことである。その後、1972年に周恩来の指示により、「極左」すなわち国家主義的管理下で隔月刊行物として再発行され、1983年に本来の月刊へと回復した。このころより、改革開放、経済発展の影響を受け、各省や市の考古研究所や博物館が独自の専門出版物を発行するようになったため、全国のほとんどの発掘報告が『考古』に掲載されるという状況はある程度はなくなったが、重大な発見や重要な発掘、権威的研究結果は、変わらず『考古』に掲載された。

本論では、1955年から2019年までの65年（ただし、そのうち1967年から1971年までの5年間は休刊）という長期にわたる『考古』の様々な記事を収集する。

CNKI（China National Knowledge Infrastructure：中国学術文献オンラインサービス）の統計によると、2019年12月までで合計9,911件のコンテンツが『考古』に掲載されたことが分かっている†。ただし、その中にはたんなる索引など分析に適さないものも含まれているため、それらを除いて最終的に9,545件が対象となった。

\* 意識すれば、左派であることを決心して、政治上では忠誠心、専門領域では筋金入りの腕前を鍛えるよう努力しよう、というものであり、15名の考古学者の連名で書かれている。その中には日本でも著名な中国人考古学者が多く含まれている。

† 2020年3月12日確認時点の件数である。

調査方法は、CNKIを利用して閲覧し、あらかじめ設定したチェック項目にチェックしていくこととした。チェック項目の設定には、必要と思われる項目のほか文献で多用された用語やキーワードを参考にしている。入力作業を進めていく途中で新たに気付いた項目も多いため、既に入力済みの記事も再チェックすることとなった。

そのようにして設けたチェック項目は500を超えたが、部分的に統合圧縮を加えた結果、490項目に及んだ。データベースの項目としては、「No. (ID)」、「号数」、「発行年」、「タイトル」を入力したのち、「地域」、「研究基金」、「時代」、「記事の種類」、「研究対象」、「研究方法」、「研究内容」の7つに大別した上位カテゴリー内の各項目490項目について該当するものに1、該当しないものに0を入力していった。なお、このデータベース作成に使用したソフトはMicrosoft Excelである。

分析は、それらの項目のうちいくつかをまとめた各カテゴリーごとに、入力データを読み取っていくとともに、年代別の集計による変遷グラフや一部はヒートマップを作成するなどして読み取りに役立てることを主とする。

### 第3項 項目の設定

上記のようにして設定した490項目は、大きく次のような上位カテゴリーに包括される。「地域」、「時代」、「文献の種類」、「研究対象」、「研究方法」、「研究目的」、「研究基金」がそれである。これらのカテゴリーや項目の中には分析上あまり関係しないと思われるがあえて含めたものもあり、さらなる追加分析など将来的に役立てられる可能性を考慮したものである。

以下、それらの上位カテゴリーごとに、それに含まれる項目の要点や留意点について述べる。

#### 地域

調査研究対象の場所など、記事の対象がどこであるかについて扱うものである。総数74項目が「地域」という上位カテゴリーに属する。

中国国内が当然多くあるが、基本的に行政区の省（・自治区）単位で分類し\*、直轄市の

---

\* 例えば、敦煌は甘肅省、青海省、および新疆ウイグル自治区の間にあるが、甘肅省酒泉市であるため、行政区分に基づき甘肅省となる。

「北京」、「天津」、「上海」、「重慶」、特別行政区の「香港」、「マカオ」は、それぞれ単独とした。なお、国外の場合は基本的に国単位で分けた。ただし、複数にまたがる「東南アジア」、「東アジア」がある。

ただし、中国国内で発表時より後に区域が変更された場合は、現在の行政区に分類した\*。国外では、ソ連崩壊により「ソ連」は「ロシア」に替わるが、この場合のみ便宜的に項目を分けた。なお、旧ソ連の構成国で独立後に対象とされた場合は、独立後の国名で扱う（「ウズベキスタン」）。独立以前のソ連時代にのみ扱われた例が見られた「ウクライナ」は、「ソ連」に分類した。分離以前の「チェコスロバキア」はそのままの名称とした。

## 研究基金

論文等の記事には、各種の研究基金に基づいて実施されたことが明記されたものがある。「夏商周年表プロジェクト」、「中華文明探源プロジェクト」、「国内基金」、「外国基金」の総数4項目をとりあげる。

まず、国家プロジェクトとしての大型プロジェクトを設定した。すなわち、1996年に開始された「夏商周年表プロジェクト」（以下、「年表プロジェクト」）は、中国考古学にとって、国家の「第9次5か年計画」の初の「重点科技攻関項目」になり、国内外で広範な議論を引き起こすプロジェクトであった。名称のとおり、中国史書にある夏王朝、商王朝、西周王朝の正確で詳細な年代を解明するために実施されたものである。引き続き2004年から開始された「中華文明探源プロジェクト」は、夏王朝以前の文明の源を探るプロジェクトである。

「国内基金」は、中国国内の各種の資金が含まれている。

「外国基金」は、外国からの資金である。

## 時代

対象となった時代を扱うものである。総数50項目がこれに属する。

基本的には中国の時代区分に基づいており、「旧石器」、「中石器」、「新石器」、「二里头」、「殷西周」、「青銅器時代」、「春秋戦国」、「鉄器時代」、「秦」、「漢」……のように項目を設置した。隋と唐は、「隋唐」とされることが多く、便宜上それを用いる。「三国・両晋」は、魏・

---

\* 例えば、「熱河省」は1914年に中華民国政府により設立され、1955年に中華人民共和国により河北省、遼寧省、内モンゴル自治区に分けられた。

呉・蜀の三国と西晋、東晋である。秦王朝以前を指す「先秦時代」という区分もよく使われているが、そのような表現がとられる場合に使用する。その他、伝統的な手工業の調査研究は「現代」とした。

中原から離れた国家である「西夏」、「遼金」、また中原王朝以外で存続期間が限られる国家は、「高句麗」や「吐蕃」のようにした。中国北部の遊牧騎馬民族「鮮卑」も設定した。その他、「匈奴」、「契丹」、「ローマ」、「ササン朝」、「南詔」、「高昌」、「渤海」、「精絶<sup>\*</sup>」、「東胡<sup>†</sup>」、「鮮卑」、「大理」、「吐谷渾」、「滇」、「回鶻」、「靺鞨」、「夜郎」、「南越」、「大真国<sup>‡</sup>」、「柔然」、「グゲ王国」、「楼蘭」のようにし、日本は「縄文・弥生」、「古墳」、「飛鳥」、「奈良」、「琉球」のようにした。

なお、殷と西周を含めて「殷西周」とし、東周は「春秋戦国」に含める<sup>§</sup>。つまり、記事中の東周は「春秋戦国」にチェックする。中原周辺をさらに離れた地域では、「青銅器時代」「鉄器時代」の研究がある。また、中国では「新石器時代」に属する考古学文化が多数あるが<sup>\*\*</sup>、「新石器時代」として一括する。ただし、研究の進展により夏王朝や早期国家に関して言及される河南省二里頭遺跡の時期は、「二里頭」として独立させた。このように独立させたものがある（「三星堆」）。

## 記事の種類

記事内容を種類分けしたものである。「論文」以外にも様々な記事があり、総数 27 項目がこれに属する。

中国で発掘調査の報告は、日本の報告書のように本として公刊されるよりも定期刊行物中で簡潔に発表されることが多い。ここでは、社会状況が反映している可能性を考え、遺跡の「発掘」と、トレンチまたは表面採集等の地表調査を「調査」とに区分した。

放射性炭素年代測定結果の報告が掲載されており、「炭素測定報告」とした。

「特集」は、不定期的に特定の地域やテーマをめぐる発掘報告が集中して掲載されることがあり、それを扱う。特集は本来記事の種類ではないが、地域やテーマへの注目のしかたな

---

\* 漢王朝の西部地域にある 36 か国の 1 つである。

† 中国東北部では春秋戦国時代から秦までの 1000 年の間には存続していた遊牧民族。

‡ 中国では「東夏」と呼ばれ、13 世紀に中国東北部にある国である。

§ 周は西周と東周からなるが、制度が異なる 2 つの王朝とみて、東周は「春秋戦国」とする考えに基づく。

\*\* 広範囲で長期存続した龍山文化や仰韶文化などのほか、中国東北部の興隆窪文化、紅山文化のような地域的な文化があると認識されている。

どの参考として設定した。また、特集への編集者の評価や目的が書かれた「特集追記」もある。

「手紙」は、読者からのごく短い記事である。論文や著作への異議を提出するものは「論争」とした。私見を強調するだけの小文も含まれる。

著作の一覧を掲載した「論著目録」、出版された考古学の著作について薦める記事で、内容や定価などの紹介を「新書案内」とする。また、それとは別に、著作を評する記事である「書評」がある。考古学会議の要旨が「会議紀要」、発言をそのまま記載したものが「会議発表」である。「消息情報」は、国内外の考古学の動きや、会議の開催、研究者の訃報などの情報が含まれる。「翻訳」は、外国の考古学の論文や諸発見の記事を翻訳して掲載したものである。

ある期間内の調査や研究の成果を紹介するのを「収穫」、個別の発見についてのものを「新発見」、館蔵のコレクション、あるいは以前出土したある種の遺物をまとめて紹介した記事を「コレクション」とした。また、研究活動の呼びかけやアピールであり、しばしば政治的なキャッチフレーズなどもある。これを「アピール」とした。

中国の考古学者に限らず亡くなった考古学者の生涯を紹介したり、業績を総括的に述べたりするノスタルジックな記事が「追悼文」である。その他、「毛沢東」に関するもの、「編集者言」などがある。

## 研究対象

何を対象とした記事かを扱うものである。総数 165 項目がこれに属する。

発掘で検出される遺構には「灰坑」、「灰溝」、「洞柱」などの中国的といえる独特の名称があるが、そのまま用いた。「墓葬」、「王陵」、「陪葬坑」、「貝塚」などの遺跡や遺構に関するものも挙げている。

対象となった遺物も多く、名称 1 つ 1 つで項目を設定すれば膨大になるため、必要な情報が得られる程度にまとめた。

「陶器」、「石器」、「磁器」、「骨角器」、「玉器」、「漆器」、「玉器」などのほか、金属器は青銅器が多く、「青銅容器」、「青銅装飾」、「青銅工具」、「青銅武器」、「銅剣」、「車馬具」、「青銅楽器」などとした。その他、「銅鏡」、「鉄器」、「金銀製品」もある。また、金属原料や冶金に関するものとして、「鑄范」、「銅原料」、「鉛」、「アルミニウム」、「錫」などがある。素材としての「玉」も製品とは別にとりあげる。ほかに「竹木器」、「宝飾」、「甲骨」、「象牙」、

「貝殻」などがある。

「織物」は、糸を織った布地を指し、専門研究も多い。服や、帽子、画などの製品を含む。竹簡や木簡のように文字を書いた織物は「書簡」に入れる。ほかに「石碑」、「買地券」、「墓誌」、「銘文」など文字のある資料がある。「毛皮製品」、「紙」、「窯道具」、「建築部材」、「磚」、「瓦」もとりあげる。

墓に関しては、墓壁の「壁画」、「鎮墓獸」、「陶俑」、「模型明器」、漢代に見られる明器の一種である「搖錢樹」、「石俑」、含蝉などの「口含物」、皇帝または諸侯が使用できる金縷・銀縷玉衣などの「玉衣」もあり、さらに「馬車」もあるが、これは部品を指す「車馬具」とは別にして、それが一体となり馬を伴って馬車としての構造をなすものを指す。ほかに、「貨幣」、「印章」（封泥を含む）、「岩絵」、「雑帳」、「算木」などの資料もある。

しばしば城壁を伴う大型集落については「都市」とする\*。「城門」、「城壁」、城壁ではない「壁」、敵を防ぐために土や石で堅固に築いた建物・設備である「防衛施設」などがある。また、「街道」、「井戸」、都市や宮殿などの「排水」設備、「河道」、「埠頭」、「橋」などがある。

建築物に関して、「建築物」、「宮殿」、「池」など、さらに「住居」、「炉・竈」、生産関係の「精錬」、「製塩」、「製鏡」、「鉦山」などを設定した。

宗教関係では、「仏教寺院」、「石窟」、「摩崖」、「仏像」、「仏塔」、「経典」、「仏教用具」など、また、「道教」、道教の「羅盤」、「非仏教像」を設定した。仏教と道教以外の宗教は「他の宗教」とした。その他、「葬式」などである。

より自然科学的アプローチとなる項目として、「人骨」、「動物」、「昆虫」、「植物」、「作物」、「食物残滓」、「絹」、「環境」、「顔料」などがある。

また、考古学の理論や方法論の研究がある。型式学や層位学などの考古学的研究法などを「方法論」とした。野外調査の方法や報告書編集までに関係する「調査法」、先端技術を考古学に適用するものを「先端技術」とした。仰韶文化や龍山文化のような「考古学文化」の研究も多く、それらは単に遺物をメインにするものではなく、遺構などもセットとして研究することが一般的である。ある課題の歴史や、ある地域の考古学研究の歴史などを「学史」とした。「製陶技術」などもある。中国考古学は歴史との関係が重視されているため「歴史との関係」の項目を設ける。

---

\* 城壁がない二里頭、外郭の城壁がないか未発見の遺跡もある。



パブリック考古学にしばしば関係するものとして、「考古資産」、「万里の長城」、「文字学」、「アート」、「レプリカ」、「文化財保護」、「盗難防止」、「盗掘坑」、などを挙げた。「沈船」などの項目もある。

## 研究方法

論文等で使用された研究方法について、総数 85 項目がこれに属する。

形態や装飾などの諸特徴による分類で、しばしば編年にも関係する「類型\*」、層位学に関する「層位」がある。中国の考古学研究では、殷王朝以降は青銅器などの文字に基づく研究や、文献との対照を行う方法が見られ、「文献対照」とした。また、「比較」のほか、型式学的手法を使用せず器物を文章で記述することがあり、「記載」とした。

その他、地質的な情報が入る「埋蔵環境」、あるいは「接合分析」、「石器分析」、「分布」、「機能論」、「堆積学」、「文化因素分析†」、「区系類型‡」、「マルクス主義§」、セトルメント・パターン\*\*に関する「セトルメント」を挙げている。

また、年代測定のうち、放射性炭素年代測定法に関する「放射性炭素」のほか、「年輪年代」、「ウラン系列法」、「光ルミネッセンス法」、「熱ルミネッセンス法」がある。また、「化学分析‡‡」、「岩石学」、「土壌分析」、「花粉分析」、「澱粉」、「脂質」、「同位体‡‡」、「DNA」の諸分析がある。そのほか、遺跡探査やその記録法などに関して、「リモートセンシング」、「磁気探査」、「GPS」、「GIS」、「3D」、「赤外航空撮影」、「低空撮影」、「トータルステーション」などがある。

さらに、自然科学的な分析方法や分析装置について、「X線マイクロアナライザ」、「電子顕微鏡」、「実体顕微鏡」、「金属顕微鏡」、「スペクトル分析」、「ラマン分光法」、「測微濃度計」、

---

\* 中国考古学では型式分類に関する研究では、必ずしも編年という意図があるとは限らず、分類に時間的変化が意図されないか見られないこともある。

† 俞偉超（1985）が「文化因素分析法」として提示した方法論。遺跡を構成する様々な考古学文化の異なる要素を定量化して比較し、要素の比重により遺跡やその考古学文化の系譜を研究するものであるが、広く採用されるには至っていない。

‡ 多数の考古学文化間の関係を解明するため、蘇秉琦が型式学を踏まえて「区系類型論」を提唱したもので、中国考古学的方法論である。

§ マルクス主義思想を根拠として考古学の問題を解釈するものである。通常、マルクス、エンゲルス、毛沢東の著作を使用する。

\*\* 中国考古学では「聚落考古学」と呼ばれ、欧米考古学由来の方法論では最も受け入れられているといえる。フィールドワークから研究まで実践例がある。

‡‡ 具体的な分析法を示していない化学分析も含む。

‡‡ 炭素、鉛、窒素同位体等による研究。

「プラズマ発光分析」、「X線分析」、「赤外吸光分析」、「原子吸光分析」、「中性子放射化分析」、「微化石分析」、「植物珪酸体」、「フローテーション」、「灰像法」、「動植物種同定」などをとりあげる。

そのほか顕微鏡で微細な痕跡を観察する「痕跡」、統計解析と関係する「計量」、「多変量解析」、プロセス考古学と関りがあるものを含む「民族考古」、「実験考古\*」、「実験室考古」を挙げている。ただし、これらのうち「民族考古」は、既にみたように少数民族の歴史を扱うものや、楚文化または蜀文化などに関するものなどを指すことも多く、そのような場合は含めない。「実験室考古」は、発掘現場から実験室に遺構を運搬しそこで各種の先端的手法を用いて発掘するものである。

理論に関して、プロセス考古学を意味する「プロセス」、ポストプロセス考古学「ポストプロセス」、ジェンダー考古学「ジェンダー」、認知考古学「認知」、また、プロセス考古学と深く関わる「システム論」も挙げた。さらに、「系統区域調査法」、「水中考古」、「動物考古†」、パブリック考古学を意味する「パブリック‡」、そして「環境考古学」がある。

## 研究目的

研究目的や記事の意図が何であるかについて扱うものである。基本的には明示されているものをチェックしたが、内容を読み込んで判断したものもある。総数 85 項目がこれに属する。

まず、「分期§」、「断代\*\*」、「墓主††」、「文化内容」、「分布範囲」、「用途」、「壁画の解釈」、「天文」、「伝播」、「起源‡‡」、「集団移動」、「変遷§§」、「葬制」を挙げる。また、社会制度に関係するものとして、「社会発展段階」のほか、「礼制」、「父系母系」、「度量衡」、「屯田」、

---

\* 実験的方法を行うものである。なお、実験考古学は実験室考古と区分すべきである。

† 動物考古学も外国の影響を受けて発展したものであり、中国考古学における「请进来走出去」の一環である。

‡ 中国式の理解・実践法をとるものも含めている。

§ 中国考古学の分期断代は、日本考古学の編年と類似したところがあるが、「分期」は対象物を時間的に分けることであり、「断代」は対象物がどの時代かを判断することである。

\*\* 上記を参照。

†† 墓誌や買地券その他を手がかりに具体的に人物、または、ある階層や官職などに属することを確定しようとするものを含む。

‡‡ 磁器、農業、中華文明などの起源。中華文明の起源に関する研究は、「起源」をチェックしたうえで「文明」をチェックする。

§§ 遺物や習俗などが時間的に変化していくことを指す。分期断代とも似るようだが、小型遺物の変化よりも建築様式、あるいは宗教や思想などの無形のものを主に意味する。

「暦法月相」、「祭祀」がある。「神仙」、「音律」、「集落」、「文字内容」、「算数」、「漢方」、「文明」、「復元\*」、「夏†」、「早期中国」、「スポーツ」、「証史‡」もとりあげる。

そして、人類に関することとして、「年齢」、「形態」、「血液型」、「性別」、「健康」、「病理」、「エスニック・グループ§」、「人口」、「開頭術」を挙げる。

生産に関するものとして、「狩猟」、「採集」、「農業」、「稲作」、「畜産」、「製陶」、「石器製作」、「冶金」、「鋳銅」、「鋳鉄」、「製塩」、「打製石器技術」、「磨製石器」、他の工芸を指す「工芸」、「骨角器製作」、「製玉」、「利き手」、「産地」、「貿易」がある。

また、人類学に関わる「年齢」、「形態」、「性別」、「病気」、「エスニック・グループ」をそれぞれに設定した。

さらに、以下の項目の中には先端的な分析機器や、外国の考古学由来の新しい方法などが含まれるものが多くある。「応用\*\*」、「成分††」、「鑑定‡‡」、「人口規模・社会形態」、「社会の複雑化」、「遺跡と人の活動§§」、「研究計画\*\*\*」、「遺跡分布†††」、「データベース」、「里坊制度」、「遺跡保護利用‡‡‡」、「環境・気候」、「地形変化」、「食物構造」、「食品加工」、「災害§§§」、「シルクロード」、「海のシルクロード」、「定義・命名\*\*\*\*」を挙げる。

考古学が存在する社会や、特に政治やイデオロギーとの関係に関するものとして、「政治意義」、「考古学とブルジョワ」を挙げる。

\* 遺物を接合し復元することが主で、住居の復元なども含む。

† 夏王朝に対して抑制的な考古学者も多いが、直接言及しなくても夏王朝に関係する場合があるため、「夏」を設置した。

‡ 史書など古代文献の記載内容を証明する研究。記録のないことを補充したり誤りを修正したりする。

§ 被葬者のエスニック・グループを推定することも便宜的にここに含める。さらに、遺跡や遺物などがどの国や集団に所属するかも含む。

\*\* 外国由来のものを含むが、新理論や方法などを中国考古学に適用して、有効性を説明しようとするもの。

†† 遺物の成分を公表するもの。成分から一歩踏み込んで産地や他の考古学的な結論などがないため、「産地」などの項目に該当しない。

‡‡ 遺物の化学成分など科学的手法で、時代や真偽などを鑑定する。玉質の研究も含める。

§§ GISなどの手法によって一定範囲内の遺跡の分布状況や、遺跡数などを把握する研究。

\*\*\* 将来の研究計画を述べるものがある。計画を目的とするため、項目を設定する。

††† 一定範囲にある複数の遺跡について、時代や地形などによってどのように分布するかというものである。

‡‡‡ 文化財を保護・活用する研究。パブリック考古学の一環として、いつの時代、どこの遺跡、どのような遺跡をメインするかを把握する。

§§§ 遺跡の状況などから過去の災害の発生を分析する研究である。

\*\*\*\* 考古学的文化の命名、時代の定義や名称、考古学におけるあらゆる概念についての定義を定めるとともに、その呼び方を定めようとするもの。

本節では以上のようにして、上位カテゴリーとそれに包括される下位カテゴリーとしての諸項目を設定して、データベースを作成した。次節では、その分析結果を示すとともに、それを受けての考察を行うことにする。

## 第2節 研究動向分析の結果と考察

前節では、中国考古学の研究動向を分析するための準備として、方法の検討と分析項目の検討と設定を行い、『考古』のデータベース化を行った。本節では、その分析結果を示し考察を行う。

### 第1項 はじめに

得られた『考古』のデータは、1955年からの9,545件分×490項目であり、その分のセル数だけでも4,677,050個にのぼる非常に膨大なデータとなった（図1）。

項目の設定時に、ある程度まとめながら項目数の無制限の肥大化を抑えてはいるが、できるだけ生に近い状態で読みとりを行うためと、無理にまとめて敏感な情報が得られなくなってしまうのを避けることに配慮したため、項目数がかなり多いデータとなっている。したがって、そのような本データの性質と状況を活かすよう、本節では基本的にデータ項目の統合などの加工はあえて施さずに、できるだけ生のデータに近い状態で読みとっていくことにしたい。その際、データマトリクスをそのままの形でヒートマップ化して、読み取りに役立てた（図2）。

ただし、要所で時系列に沿ったグラフや、一定の期間ごとに区切ったヒートマップなどを作成するなどして、読み取りと検討に役立てることにする。なお、上位カテゴリーとして大別した「地域」、「研究基金」、「時代」、「記事の種類」、「研究対象」、「研究方法」、「研究目的」の7つのそれぞれについて以下で結果を述べるが、まずは『文物』の全体的動向について次項で見ることにする。

### 第2項 『考古』における通時的発行動向

時系列でデータベースを確認する前に、『考古』の冊子の現物の定性的な変化を見ておきたい。

1990年には表紙にISSN番号（国際標準逐次刊行物番号）が表示されるようになっていく。そして、2000年からは記事に英文のabstractが付けられるようになっていく。

その直前から、表紙の「考古」の下に「Archaeology」という英文タイトルが表示されるようになってきている。このように1990年以降、段階的な「国際化」の進行がうかがえるようである。

また、2012年の4期からは紙質がより上質になっており、かつてのように裏写りすることがなくなった。翌2013年の1期からは、表紙に「国家社科基金資助期刊」という文字が表示され、記事本文の全写真がカラー化されるとともに、全頁がやや厚手のマットコート紙になりさらに品質が良くなっており、カラーが映える作りとなっている。それと同時に表紙も変化し、「考古」の文字が特殊印刷化されて高級感が出ており、現在に至っている。なお、『文物』の場合も、表紙のカラー化とタイトルの特殊印刷、カラー写真の使用など同様の変化が見られ、そのような高級感のある学術誌や書籍がよく見られるようになってきていることは、中国の学術界の全体的な傾向といえよう。

さて、1955年に『考古』の前身である『考古通訊』が創刊されてから、2019年末までの年間発行号数と年間掲載件数を時系列グラフで可視化した(図3)。背景の棒グラフは年ごとの発行号数である。既に述べたように、当初は隔月刊行の年6冊、3年を経て1958年からは月刊となり年12冊となった。しかし、1966年は5月発行号までしか出ておらず、1967年から5年間休刊し、1972年から隔月刊行として復刊、それが1983年に月刊となって現在に至る。発行号数からみると、1966年からの文化大革命の影響がいかに大きかったかわかる。

年間発行号数のグラフに重ねて、年間掲載件数の時系列に沿う変動を折れ線で表示している。大きく見れば、折れ線は年間発行号数と対応するように大幅な増減を見せているが、完全には対応していないことに気付く。復刊後、徐々に掲載件数が増加していったことがわかるが、隔月刊であった11年間を通じて、ようやく創刊時の件数に届く程度に回復したことになる。これは、文化大革命(1966-1976)と、同時期の「上山下郷運動」などによって、考古学者も学生も研究の場から遠ざからざるを得なかった、と言われていることを反映しているものであろう。また、月刊に回復した1983年には261件になっており、それまでのピークであった1958年を超えたが(250件)、その後は発行号数に変化がないにもかかわらず、緩やかに件数の減少傾向があり、2019年にはピーク時の半分近く(129件)になっている。

記事の種類やページ数などはもちろん同じではないが、概ねこのような通時的傾向があると考えてよからう。1970年代末からの改革開放と経済発展を背景として1980年代にな

ると各地で出版物の増加、すなわち掲載媒体の増加があったことは大きな要因の 1 つと推測される。それに加えて、全体的に掲載記事が短いのが特徴であるが、主要記事は 10 ページ未満の短いものが各号に多数掲載されていたものから、発行年が新しくなると 1 件あたりのページ数が増えて十数頁の記事が普通になっていることが挙げられる。中には 20 ページを超えるものもあり、写真を含めて情報量が増している。つまり、掲載件数の緩やかな現象の別の要因として、このように掲載記事 1 件あたりのページ数が増加したことも挙げられる。さらに、発掘調査自体が大きく増え、重大な発見や知見が相次いだことなども背景に働いていると思われる。

### 第 3 項 「地域」に関する動向

#### 中国国内

ここでは、「地域」について検討する。まず、便宜のため対象地域を図示する（図 4）。この図は中国（一部は周辺地域）の省（・自治区・直轄市）単位の名称を示しており、それを地域ごとに色分けした名称（ゴシック体）を示している。以後、地名はこの図を参照していただきたい。

創刊以降 10 年ごと（ただし、直近の 2015-2019 年については 5 年）に集計した掲載件数に基づき、地図上にヒートマップで示す（図 5；図 6 も参照）。250 件を上限とした絶対値で示しており、色が全体に薄い期間は件数が少数であることを示す。なお、右下は 1955 年から 2019 年までの全部の合計を示したものである。

全体を概観すると、文化大革命と重なる 1965-1974 年は全体に色が最も薄く、回復期にあたる 1975-1984 年がそれについて薄い。

さらに、各期を見ると、全体に共通して河南省が最も値が高く、それが初期から一貫していることが注目される。それに次ぐのが山東省である。河南省を中心にその周囲で頻度の高い所が多く、いわゆる辺境の地域は頻度が低いこともわかる。周辺地域のほうが広大な省・自治区であるため、もし中国全土で均等であるならば、面積の大きい省・自治区のほうが件数は多くなるはずである。しかし、実際はそうではなく、逆転していることになる。この地域的な偏りは、文化大革命を挟むその前後でも変わっておらず、一貫した傾向であることが明らかである。

後述するように、河南省と湖北省に関する調査研究は、1990 年から 2019 年の間に研究

基金による調査が目立ち、続いて山東省、内モンゴル自治区、山西省、陝西省、吉林省の順であった。この図から得られた結果は、研究基金による記事が多かった河南省、湖北省、山東省の3つの地域を中心として、山西省、陝西省にかけて放射状に広がっていた。すなわち、「中原」とその周辺に当たっていることが注目される。

国家戦略としての「夏商周年表プロジェクト（年表プロジェクト）」と、それに継続する「中華文明探源プロジェクト（探源プロジェクト）」という近年の大型プロジェクトの実施は、このヒートマップにおける山東省での調査研究の一層の増大に反映しているようである。しかし、「探源プロジェクト」で重要な研究対象として考古学者が注目している遼河流域、すなわち内モンゴル自治区、吉林省、遼寧省への影響は、さほど顕著に出ていないようである。また、遼寧省に次ぐ助成により発掘と研究が行われている新疆ウイグル自治区も同様である。

このことは、ヒートマップ上に表れた、それらの大型プロジェクトが開始される以前の状況からも言えることであり、『考古』が創刊された1955年では、河南省（10件）をトップに、江蘇省（7件）、河北省・山東省（6件ずつ）という順であった。河南省は、歴史上しばしば中国王朝の都（洛陽）となっており、中国の近代考古学の幕開けの場でもあり世界的にもよく知られる殷墟、さらに「夏」をめぐって大きな関心を集める二里头遺跡もある。この河南省とその周辺の「中原」への関心は、『考古』の初期から一貫して高く、調査研究が盛んであったということができ、これが中国考古学の特質における解釈上のポイントとなる。

## 外国

『考古』には外国についての記事も含まれている。対象とされる国についてはどうであろうか。

ソ連（54件）、ロシア（3件）、アルバニア（4件）、チェコスロバキア（2件）、ポーランド（1件）、ブルガリア（1件）、ウズベキスタン（1件）などが、旧ソビエト連邦の構成国や東ヨーロッパの国である。ソ連が全体のうちトップであり、2位の日本（37件）を大きく引き離している。

そのほか、アメリカ、カナダ、ギリシャ、メキシコ、ホンジュラス、イギリス、フランス、デンマーク、エジプト、ケニア、アフガニスタン、インド、カンボジア、韓国、オーストラリア、ポリネシアなどがあるが、いずれも数件以下に過ぎず、大半は1件のみである。その



点では、前記の旧ソ連と近い国と大差ない。

日本については、ソ連に次いで圧倒的に多く扱われており、3位の隣国モンゴル（9件）を大きく引き離している。日本（37件）、日中国交回復後は「中日両国」を扱うものが5件見られる。なお、対外開放政策である改革開放（1978年～）後は、1979年から2009年までの長期にわたって日本を扱った記事がほぼ毎年掲載される状況が続いていたが、最近10年については、日本や「中日両国」を扱ったものは、2012年の1件\*を除いて皆無になっている。

ソ連については、創刊年である1955年の記事は5件であり、それ以来、1959年の15件をピークとして1961年の3件に至るまで7年連続して数件ずつあったが、翌1962年の1件をもって一切掲載されなくなる。1960年にソ連が中国との技術援助協定を破棄して対立が深まっており、翌1961年の3件、翌々年の1962年1件という現象に表れているようである。このように、「新中国」成立後の中国考古学は、ソ連考古学との「蜜月」の数年を経て、中国とフルシチョフ政権下のソ連が対立した「中ソ対立」の影響で急速にそのような状況になったことは明らかであろう。中ソ間の関係が、『考古』という学術誌に極めて敏感に反映していることがわかる。

また、アルバニア社会主義人民共和国は、社会主義国ではあるがソ連と緊張関係が続いた国である。アルバニアの記事は、1962～1965年の期間で3件、1973年に1件ある。アルバニア考古学に関するものであり†、内容からはアルバニアに対する友好的な態度がうかがえる。これは上記の中ソの対立時期と重なっており、アルバニアが中国に接近した時期でもある。その後、文化大革命が終わってアルバニアと中国の関係が悪化してからは、掲載件数0件のまま現在に至っている。

なお、ソ連の記事が掲載されなくなって久しかったが、40年以上の無掲載期間を経て、2005年からはロシアの記事がこれまでに3件掲載されている。

以上のような顕著な例から、国家間の関係が極めて鋭敏かつ、大きく影響しているということができよう。

---

\* 日本出土の景初四年銘三角縁盤龍鏡を再論した王仲珠（2012）の論文が、今のところ最後となっている。

† それぞれのタイトルは、「アルバニアにおける考古学的発掘の最新成果」（1962）、「アルバニア考古学の現状—アルバニア学会議参加紀要—」（1963）、「アルバニアにおける新しい考古学的発見とその研究」（1965）、「アルバニアへの訪問記」（1973）となっている。

#### 第4項 「研究基金」に関する動向

「研究基金」については、国家プロジェクトとしての大型プロジェクトである「夏商周年表プロジェクト」、「中華文明探源プロジェクト」のほか、「国内基金」、「外国基金」の総数4項目をとりあげたが、「研究基金」によることが明記された記事は1990年から見られ、今日に至っている。データベースの検討から、当初はそうした記事が少数であったが、2000年代に入って増加してきたことがわかる（図7）。

国家プロジェクトとして1996年から開始された「年表プロジェクト」と、その後継ともいえる2004年から行われた夏王朝以前の文明の源を探る「探源プロジェクト」は、どちらも大型プロジェクトであるが、これらによる直接的成果は『考古』に散見されても総数としては多くなく、件数としては下記の国内プロジェクトに飲み込まれるほどである。独自の成果報告がなされ、マスコミなど様々な媒体を通じて発表されてきたことも影響していると思われる。

そこで、中国における上記2大プロジェクトを除く各種の研究基金を取得した調査研究である「国内基金」を眺めると、対象となる時期については漢とそれ以前を主とすること、そのうち夏商周と新石器時代が圧倒的に多数を占めていることがわかる。つまり、時期としては新石器時代から漢代までの古い時期に偏りがあるといえる。これは、上述の2大プロジェクトが対象とする時期と重なっており、興味深い。

また、扱われる地域については、増減が大きく一概に言えないが、最近では、湖北省、吉林省が多く、山東省も伸びているようである（図8）。

「国内基金」において対象とされる地域と時代を集計した表で確認する（表1）。まず、地域では、河南省、湖北省、山東省の順であり、次いで内モンゴル、山西省、陝西省、遼寧省・吉林省の順となっている。やはり中原が中心ではあるが、内モンゴルや遼寧省・吉林省という周辺地域にも資金が配分されていることが示唆される。中原の河南省、山東省、湖北省は、新石器時代と殷西周が多いことがわかる（湖北省では春秋戦国時代が最も多い）。これらは、やはり2大プロジェクトと時代が重なっている点で興味深い。

なお、基金を得たもののうち対象とされた時代は、「新石器」（73件）、「殷西周」（44件）、「春秋戦国」（34件）、「旧石器」（23件）、「漢」（21件）、「青銅器時代」（13件）、「隋唐」（7件）の順であった（表1）。次項で確認するが、旧石器時代や青銅器時代が入っているのは、周辺地域への資金配分の影響かもしれない。

なお、外国基金については、極めて少数であるため傾向を読み取ることはできなかった。

#### 第5項 対象とされる「時代」に関する動向

対象とされる「時代」については、多い順から「新石器」(1439件)、「漢」(1292件)、「殷西周」(975件)、「春秋戦国」(809件)、「隋唐」(491件)、「宋」(339件)という順になった(図9)。やはり、新石器時代が多く、漢代がそれに次いで多い。この状況をみると、新石器時代を除き、有名な中原王朝が並んでいることが注目できる。漢は関心の高い王朝ということになり、それを遡る春秋戦国時代、さらに遡る殷西周がよく研究されているということであろう。また、新石器時代は中国全土に広がっており時期も長いことからそれを一括して扱っている影響が考えられるが、この一部には夏王朝への関心も影響している可能性は考えられる。

上位の「新石器」、「漢」、「殷西周」、「春秋戦国」は、各年度ともに一定のシェアを占めており、時系列的に見て安定しているといえる。したがって、これらの項目は、中国国内の社会変動や考古学への影響をさほど受けずに、不動の地位を保ってきたということができよう。

一方、新石器時代をさらに遡って旧石器時代になると少なくなる。「旧石器時代」(127件)はさほど多くなかった。これは『考古』の性格とも関係するであろうが、旧石器の専門家は『人類学学報』などの他誌に書くことが多いことも理由として考えられよう。しかしそれでも、年間1~3件程度だった旧石器時代に関する記事は、2010年前後からわずかに増加しているようであり、特に、5件掲載された2013年以降では、2016年7件、2017年8件、2018年6件、2019年9件と、以前より増加していることがわかる。

「鮮卑」(11件)、「吐蕃」(9件)、「西夏」(17件)、「匈奴」(11件)、「契丹」(9件)、「高昌」(5件)、「渤海」(22件)、「滇」(6件)などの、周辺の王朝や周辺民族に関するものは極端に少なく、それ以外に挙げた「異民族」は数件~1件とほとんど見られない。漢への関心は高いが、漢と緊張関係にあった匈奴の研究は比較にならないほど少ない、という対比が可能かもしれない。

ちなみに、日本については、「縄文・弥生」(16件)、「古墳」(7件)となっており、善戦している。

## 第6項 「記事の種類」に関する動向

「記事の種類」については、全体の9,545件中、「発掘」(3,506件)、「論文」(2,514件)、「概報」(1,831件)、「新書案内」(733件)、「調査」(678件)、「特集」(487件)、「書評」(203件)、「消息情報」(141件)、「論争」(124件)となり、そのほかは数十件以下であった。

やはり、発掘と論文が圧倒的に多い。「発掘」と「論文」を合わせた件数は、全体の63.1%を占め、3位の「概報」まで含めると、82.2%を占める。なお、それに5位の「調査」を含めると89.4%であり、調査関係と論文が記事の9割を占めることになる。論文数は全体の26.3%であり、1/4強が論文ということになる。

主要記事については、基本的に通時的変動が比較的小さく、調査関係の報告が集中してきた『考古』の伝統をよく表すものといえよう。

また、「新書案内」は1980年代から散見されるが、1990年代半ば以降大幅に伸びており、2000年代になると安定している。代わりに「概報」が急激に減少しており、現在「概報」は極めて少数となっている。

「調査」は、トレンチまたは表面採集等の地表調査によるものであり、文化大革命前と、1980年代～1990年代前半までは多いが、それ以降は減少し、2000年頃からは非常に少なくなり、現在は無いといってよい。これは、文化大革命以前にはそうせざるを得なかった社会的・経済的状况を反映している可能性が考えられる。また2000年以降は経済的發展のもと、発掘による成果で重要なものが増加したことが要因として挙げられよう。

「翻訳」については、基本的に極めて少ないが、1955年の創刊年から1962年に至るまで毎年連続して掲載され続けていることが注意される。中でも1950年代が多く、1958年がピークとなっているが、その後減少していくことが特徴的である。そのほとんどは、ソ連の研究者の論文等がロシア語から翻訳されて掲載されたものであり、ここでも「新中国」建国以来のソ連との数年間の「蜜月」がよく表れているといえる。また、1956年にチェコスロバキアとルーマニアが1件ずつ、前述した1960年代のアルバニアに関するものが2件ある。また、朝鮮(北朝鮮)やモンゴルを含む、同時期の中国と外交関係のある国の考古学の情報の記事がある。

なお、1957年5期には、イギリス、アメリカ、日本に関する翻訳が1件ずつ見られるが、例外といえる。ちなみに、イギリス、アメリカのものは、それぞれ古ローマ時代とニューメ

キシコ州の石器に関する内容であり、いずれも、政治的にも学術的にも当たり障りのないものであったと思われる。日本のものは中国科学院の招きで日本考古学協会と毎日新聞社の訪問団が訪中した際の記事で、原田淑人の西北大学での講演「長安所感」、杉原荘介の北京大学での講演「日本農業文化の出現」に基づいたものであった。

したがって、基本的には 1950 年代に盛んだった翻訳掲載は、ソ連考古学との「蜜月」を背景とするものということができ、中国考古学にとってソ連考古学の思想や方法の導入・理解に資するものであったろう。1956～1959 年には、研究活動の呼びかけが政治的キャッチフレーズと結びついて行われる「アピール」も見られる。

このように、『考古』のデータを通覧すると、中国考古学の歩みや特徴、時代背景などが読み取れるようである。また、インターネットのない 1980 年代までは、著作の一覧である「論著目録」は全国の考古学者・学生に考古学の著作を紹介する方法であったが、その後「新書案内」に置き換わったとみられる。

#### 第 7 項 「研究対象」に関する動向

「研究対象」の項目は非常に多岐にわたっていたが、掲載が最も多かったものから順に、「陶器」(3,195 件)、「墓葬」(3,004 件)、「石器」(1,614 件)、「青銅容器」(1,107 件)、「磁器」(1,058 件)となっており、1,000 件を超えるものは以上であった。次いで、「貨幣」(933 件)、「鉄器」(845 件)、「青銅装飾」(806 件)、「青銅武器」(729 件)、「銅鏡」(771 件)などとなっている。これらについては、基本的に通時的変動が小さく、コンスタントに扱われてきたということができよう。

上のように「陶器」と「墓葬」が非常に多いことについては、おそらく他の国の考古学でも似た傾向があると思われるが、両者が同程度の件数に上っていることは興味深い。これはむしろ、「墓葬」に関する研究が際立っているとみてよい。なお、墳墓関係では「王陵」となると 79 件であり絞られてくる。また、「壁画」(223 件)、「馬車」(55 件)（その部品である車馬具は 197 件に増える）、「鎮墓獸」(56 件)、「陶俑」(358 件)、「模型明器」(406 件)、「口含物」(1 件)のように、墓の構造で目立つ要素やその遺物は、多寡がありながらも様々な研究があるが、明器・陶俑・壁画をはじめ中国に特徴的な資料が繰り返し研究対象となっている。

遺物としては、上記のように「陶器」が多く、「石器」がそれに次ぐ。これらは世界的に

普遍的な資料といえるが、それに次いで「青銅容器」と「磁器」が多いことは中国の特徴といえよう。青銅製品が目立つが、これらはそれぞれの項目単独というより、複数が対象となった記事では複数にチェックを入れたことも反映している。それにしても、青銅器を対象とした研究はかなり多く、また鉄器も多い。これらの中には墳墓の副葬品として出土したものが多く含まれている。貨幣を対象とするものも多く、「金銀製品」(403件)も比較的多い。そのように金属器研究が多いのも中国考古学の一つの特徴であろう。

また、「墓誌」(273件)、「銘文」(258件)をはじめ、文字とその内容を対象とした研究も比較的多い。このことも、歴史学としての考古学が強く自覚され、金石学の伝統もある中国の特徴といえよう。その背景には、古くからの金石学の伝統が反映している可能性も考えられる。

それらの遺物に対して、生産関係については一部を除き意外なほど目立たないという印象を受ける。金属生産についても、指摘したように金属製品自体を対象とした研究がかなり目立っているにもかかわらず、多いとはいえない。「鑄范」(91件)や「精錬」(37件)はやや多いものの、特に製作法については「製鏡」(2件)など少ない。また、農耕関係では、「水田」は1件のみ、「穀倉」は3件であった。しかし、「作物」(33件)は少ないながらも稲作関係より多く、農耕といえば稲作に集中してきた日本考古学とは大きく異なるところであろう。

なお、生産関係のうちで「窯跡」(280件)は多く、陶磁器研究の多さと対応しているようである。「製塩」はわずか5件しかない。やはり生産関係は、「窯跡」など一部を除けば意外に少ないといえよう。

遺跡・遺構のうちでは、「都市」(353件)の研究が多く、特徴といえよう。それに伴う「城門」(78件)、「城壁」(93件)、「壁」(19件)などがある。また、「建築物」(119件)は意外に多くなく、そのほか「宮殿」(77件)、「池」(14件)、「井戸」(86件)などとなっている。

また、宗教関係では、「仏教寺院」(32件)、「石窟」(41件)、「摩崖」(14件)、「仏像」(97件)、「仏塔」(21件)のようになり、仏像はやや目立つが全般的には少ない。なお仏教以外の宗教では、「道教」(36件)があり、それを除けば「他の宗教」(18件)、「非仏教像」(3件)である。キリスト教やイスラム教など他の宗教が対象となることはかなり少ないということができ、「仏像」と「非仏教像」の差は際立っている。ことに宗教考古学的な研究が盛んな国とそうでない国があるが、中国は後者といえよう。

「人骨」(111件)、「抜歯」(3件)など人骨関係はさほど多くない。一方、「動物」(153件)、「昆虫」(1件)、「植物」(53件)となっており、これらも時間的な変動が少ない。

近年漸増しているものとして、「沈船」(28件)がある。1978年から1~2件散見される程度であったが、2011年からはほぼ毎年見られるようになり、中には3~4件の年もある。これは、近年中国で沈没船の調査に力を入れるようになっており、それと関係していると思われる。

学史や調査の方法に関するものでは、「歴史との関係」(90件)、「学史」(140件)は比較的多く、中でも「考古学文化」(279件)に関するものは予想どおりかなり多かった。そのほか、「方法論」(55件)、「先端技術」(52件)、「調査法」(26件)などとなっており、これらの項目の中には先端的な方法以外のものも含まれているが、方法論に関する事柄が研究対象となることはさほど多くないといえるようである。

#### 第8項 「研究方法」に関する動向

用いられた「研究方法」については、多いものから順に、「記載」(3,424件)、「類型」(2,486件)、「層位」(861件)、「文献対照」(814件)、「放射性炭素」(327件)、「比較」(310件)、「計測」(69件)、「セトルメント」(61件)、「X線分析」(60件)、「マルクス主義」(56件)などのようになっている。

「記載」と「類型」が圧倒的に多い。ただし、「記載」は1980年代までは多いが、その後1990年代からはやや減少している。しかし、掲載件数にやや減少傾向が出る時期であることから、基本的にはコンスタントに見られるとあってよかろう。「類型」はそれ自体、中国考古学らしさがうかがえるものである。創刊後の最初の2年は2件ずつと少なかったが、その後は基本的にコンスタントに見られる。したがって、記事(特に論文)の論述方式や、分類を行うという方法については、基本的に一貫しているということができよう。したがって、特に近年は欧米考古学に由来する手法などは採用しても、基本的な考え方や枠組み、論述方式などには大きな変化がないとあってよかろう。一方、「層位」については一貫して重視されていることがわかる。

「文献対照」と「放射性炭素」についても、中国考古学らしさがうかがえる。「文献対照」は、ほぼ一貫して安定して存在しており、これも歴史学としての中国考古学のあり方を示すものといえよう。すなわち、考古学研究の結果を通して歴史学を研究する、という意識の研

研究者が多く、伝統的な考古学研究として史書に記録される事件や人物などに関するものは継続しているといえよう。

「放射性炭素」は、1962年に1件出現しており、その後1972年に『考古』が復刊して以来、コンスタントに継続している。この1972年の報告以来、2019年までに計45回、「放射性炭素測定年代報告」としてまとまったデータの報告がなされている。これは特に、炭素年代について装置や技術は国内にあっても、考古学研究においてあまり重視されなってきた日本考古学と比較すると、著しい違いがあるといえる。

ここで、説明を加えると、放射性炭素年代測定法は、1955年に夏鼐（1955）によって中国考古学界に紹介され、仇世華・蔡蓮珍（1962）がその原理と方法を述べた。その後、実験室が設けられ、1965年末から1966年に初回のサンプルが出された結果が、1972年に復刊した『考古』の初号で発表された。以来、まとまった報告が行われるようになったものであり、中国では重要視されて推進されてきたものであった。特に、1996年に開始された「年表プロジェクト」では、年代区分の主な根拠であるとともに、年代を決定するために歴史学、地理学、天文学など幅広い分野からもこのプロジェクトに参加しており、つまり、同プロジェクトは自然科学、社会科学、人文科学の研究手法と研究成果を結び付ける総合的なものという側面をもっていた。2000年、2003年にそれぞれ3つの大規模な国内および国際的討論会が行われている。

さらに、1980年から1995年の間には、炭素年代測定について開催された全国的会議が5回あり、それは1996年からの「年表プロジェクト」のための準備であった。「年表プロジェクト」の前後にも、炭素年代測定についての論文が本データベース中でよく見られ、2010年以降も相変わらず最も頻繁に使われる科学的分析方法といえる。しかし、関連する論文は見られなくなっている。

「計測」、「セトルメント」、「X線分析」、「マルクス主義」のうち、前三者は自然科学的手法、またはそれと親和性の高い手法といえる。このうち「セトルメント」については、1995年から出現しており、手法自体はプロセス考古学から導入されたものである。その後は安定して見られ、欧米考古学に由来する手法のうちで中国考古学に最も定着したものといえるかもしれない。

当然ながら、「マルクス主義」も中国の考古学を特徴づけるものと考えられよう。それは1974～1976年に多くなるが、それまでも基本的に少数ずつ見られた。ところが、1978年に1件あるのを最後に、その後は見られなくなって現在に至っている。その要因は不明で



あるが、この年から改革開放路線が開始され、それ以後、欧米の情報が多く入ってくるようになった。

「セトルメント」のほか、それに関係して普及してきたとみられる「リモートセンシング」(10件)、「GPS」(6件)、「GIS」(13件)などの技術は、いずれも1990年代半ばから見られるようになっており、「セトルメント」と対応している。また、「多変量解析」(43件)は1988年から見られる。

こうした新しいも技術のほか、「電子顕微鏡」(43件)をはじめとする分析機器等を使用した実験室での調査研究に関わる項目は、それらより前の1980年代半ばごろから出現している。本データベースの項目で顕微鏡や他の分析装置が多数あるが、それらの多くは1980年代かそれ以降に始まっていることがわかる。逆に、ごく新しく出現したものとしては、「3D」(22件)があり、2013年から見られる。2019年までの7年間で22件ということになる。

上で見たように、「セトルメント」は1990年代半ばから見られる一方、その母体といえる「プロセス考古学」(9件)は2006年からであり、逆転ともいえる現象が見られることは注目できよう。また、「ポストプロセス考古学」(0件)は、あえて項目として設定しておいたが、皆無であったことは興味深い。また、「プロセス考古学」と関連が深い「システム論」(0件)も見られなかった。このように、理論と方法がセットになった体系的な導入ではないことは注目されるところである。

一方、「認知考古学」(0件)、「ジェンダー考古学」は2009年に1件あるのみであった。第1章でふれたように中国考古学界としてはそれらが見られても、浸透しているとはいえない状況であることがわかる。それに対し、「パブリック考古学」(6件)は2005年から出現し、以降は散見されるようになっており、2006年からの「水中考古学」(5件)も同様の傾向である。やはり、中国パブリック考古学や水中考古学への政府としての力の入れ方の影響が推察される。

## 第9項 「研究目的」に関する動向

「研究目的」については、多いものから「断代」(2,729件)、「分期」(853件)、「文字内容」(351件)、「用途」(330件)、「証史」(311件)、「墓主」(297件)、「葬制」(277件)、「社会発展段階」(195件)、「政治意図」(180件)、「伝播」(164件)などの順となってい

る。

これらを眺めると、「断代」や「分期」のように資料の時代を決定することなど、時期の同定と区分に関する問題を明らかにしようとした例が極めて多いことがわかる。また、その他のものについては、まず「葬制」やそれに関わる「墓主」の解明が目的とされるものがあることがわかるが、これは既に見たように、「墓葬」を対象とした研究が多いことと対応している。

また、「葬制」については、伝統的にマルクス主義的発展段階論との関係において行われてきた「墓葬」の研究に関係していると思われる。マルクス主義に関係するものとして、「発展段階論」や「政治意図」がここに上がっており、マルクス主義をめぐる問題が研究のトピックとしてあることがわかる。一方、先に述べた、時期の同定と区分に関する問題とも関係して、「文字内容」、「証史」などがある。やはり、歴史学としての考古学を標榜する中国考古学の特徴が表れているようである。さらに、「伝播」も重要な問題として伝統的に挙げられており、以上の項目は伝統的かつコンスタントに存在してきたといえる。ただし、これらのうち「政治意図」のみは、1980年代前半までしか見られず、その後はほとんど無くなっている。

なお、「考古学とブルジョワ」（33件）は、創刊年以来して1959年までの5年間で集中するという特異なあり方をしている。その後は全く見られない。すなわち、型式学など、ある研究法や考え方に関してブルジョワ的として批判するなど、いわゆる新中国の考古学の成立期においてどのような立場をとるかということについて、国内の政治的イデオロギーとの関係や、ソ連との「蜜月」のコンテクストの中で考えられたことを明瞭に示していると思われる。

## 第10項 おわりに

本データベースに基づき、以上のように分析と検討を行ってきた。その結果は以上の通りであるが、主要なものについて述べる。

①中国考古学の関心が、「中原」とその周囲に集中する傾向があったことが明確になった。「新中国」成立以来、国家の政治的方針やソ連との蜜月と断交、文化大革命、改革開放から経済成長、近年の「一路一帯」など、中国は激動してきたといえるが、そのような中でも一貫して「中原」が考古学の求心力を持ってきたことが判明した。「中原」についての関心は、「新中国」成立以前からも同様であったと考えられ、基本的に当初から一貫したものと見な

してよかろう。

また、②そのような激動の中、中国と諸外国との政治的な関係や文化的な交流関係も大きく変化してきたが、それに鋭敏に反応するように中国考古学が諸外国から影響を受けてきたということも明確に言えるようになったと考える。ただし、年代的に社会状況の変化と中国考古学自体の発展の状況が変化するため、影響の内容や程度は一様ではない。

③歴史学としての考古学という意識が強く、それが実際に論文や実践に表れている。この意識ないし立場もかなり一貫してきた状況がみてとれる。「新中国」の成立から間もないうち、すなわちソ連考古学との蜜月の時期にはイデオロギーとともに考古学の考え方や手法が学ばれ、考古学が政治的に貢献することが謳われた。ソ連考古学は独自のイデオロギーから歴史学としての立場を強く主張したが (Trigger 1989)、その影響も考えられる。ここでこの分析では早くとも「新中国」成立後のことしかうかがえないが、しかし歴史学としての立場をことさらに強調するかしないかは別として、「新中国」成立以前のあり方や伝統からみても基本的に中国では自然に維持されている考え方といって間違いなからう。1980年代以降に中国考古学に影響を与えていくプロセス考古学のインパクトには強いものがあつたが、体系的な導入ではなくプロセス考古学中の要素や技術的な導入が主であった。このように、取捨選択が行われているということが出来る。そのような独自化は、中国パブリック考古学などの独自性にも表れているのかもしれない。

④ソ連考古学の型式学批判の影響は大きいと思われ、型式学的研究が低調であったとされる。実際にそのような面が看取されるが、日本とは異なる形で区系類型論が展開しており、分析の結果、区系類型論による研究は数多くなされていた。これはやはり型式学的分類や伝播論と無関係ではありえないと思われる。

⑤いうまでもないことであるが、あらゆるものがまんべんなく考古学の研究対象となるのではなく、それは各国・地域の考古学によって特徴があるであろう。つまり、好まれる・熱中される対象とそうでないものがある。中国の場合、墳墓や埋葬に関する研究は多く、金属遺物に関する研究や文字に関するものも目立つことなど、いくつかの特徴が抽出されたが、一方で土器の詳細な技法やその他の器物を含む製作法の研究が少ない、宗教考古学的対象となるものについても少ないことなども指摘できた。これらは、おそらく中国におけるイデオロギーや考古学への外国からのインパクト、歴史的脈絡・伝統、中国人の文化的に形成された好みの体系のようなものが絡み合って要因となっていると考えられる。なお、方法論や解釈での議論はあっても、特に欧米と比較して、中国で受け入れられている理論的枠組み

やパラダイムに挑戦するような提言や議論に欠けることも大きな特徴といえるかもしれない。

⑥また、欧米考古学からの影響があるといっても、中国の状況になじまないとみられるポストプロセス考古学のように、ほとんど影響を与えていないものもあった。本来それとも関わりをもつパブリック考古学も中国的な色彩が出ている。本論の第 1 章での検討のようにジェンダー考古学も新しい動きではあるが、実際にはまだまだ少なく、内容的にも伝統的な立場を言い換えたものも多く大きな展開を見せるには至っていない。したがって、欧米由来の考古学理論については、理論と方法、さらに言えば考古学者の考え方や態度までが総体として導入されるのではないことがここでも確認される。

なお、本データベースには様々な情報が詰まっている。ここではこの膨大なマトリクスから比較的単純な方法を用いて集計・可視化したものであり、分析手法を変えることで読み取れる情報は多いと思われる。つまり、これを利用すればこれからも様々な観点からさらに解析が可能であると思われ、今後の課題としたい。



中国考古学の研究動向分析



図2 各項目別のヒートマップ（一部）

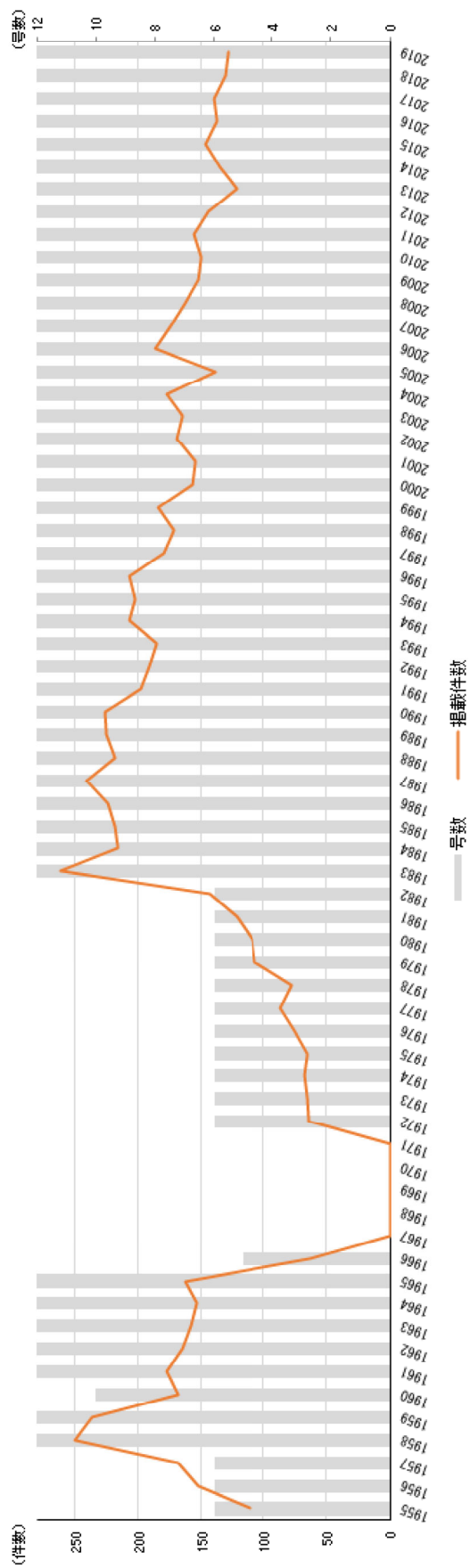


図3 年間掲載件数と発行号数



図4 主な対象地域と区分



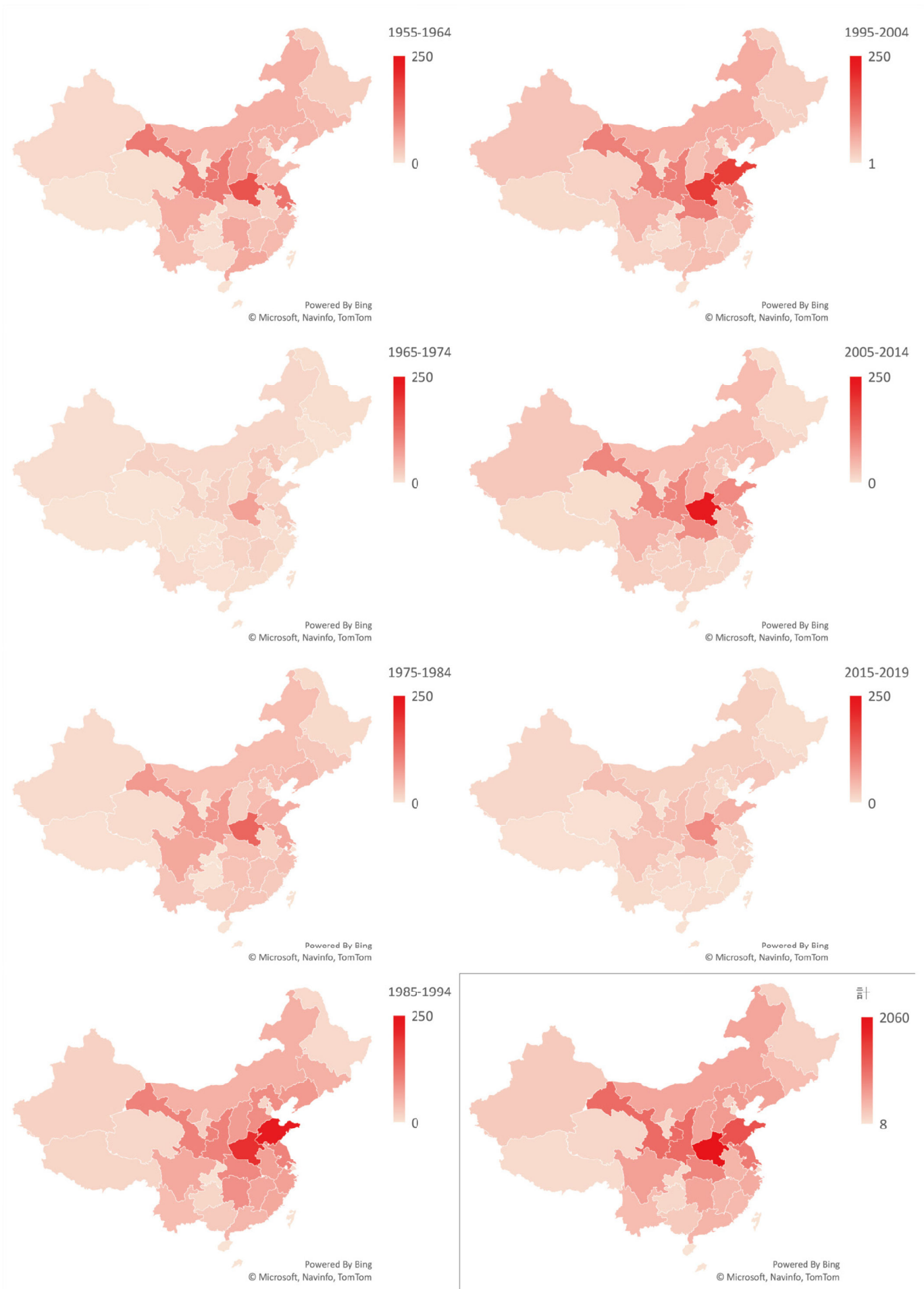


図5 地域による掲載件数の時系列ヒートマップ

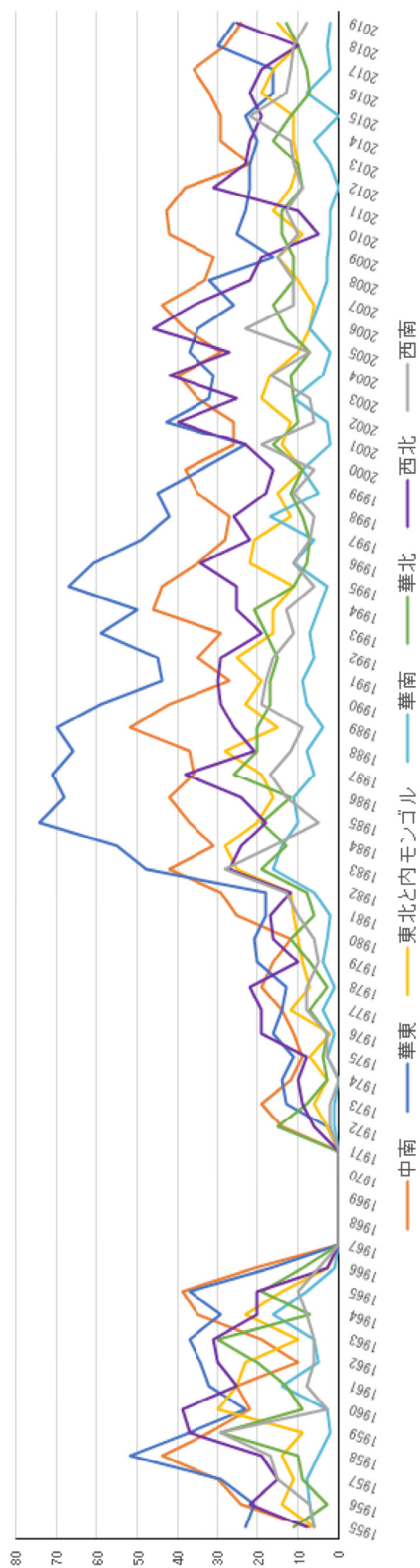


図6 対象地域による年間掲載件数の推移

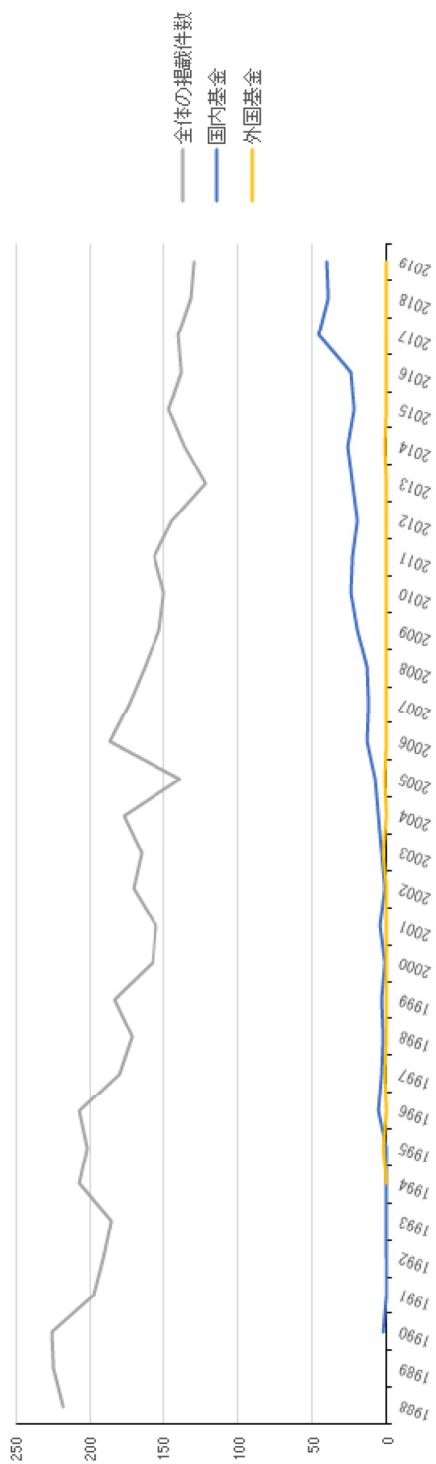


図7 全体の掲載件数と研究基金の推移

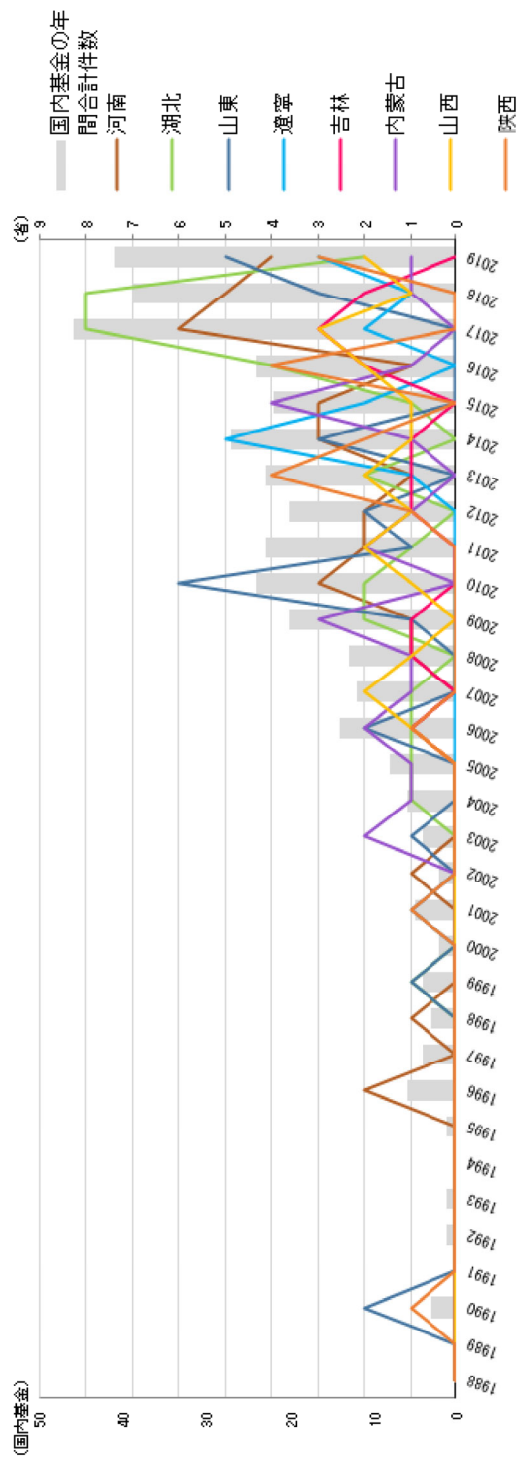


図8 地域による国内基金掲載件数の推移



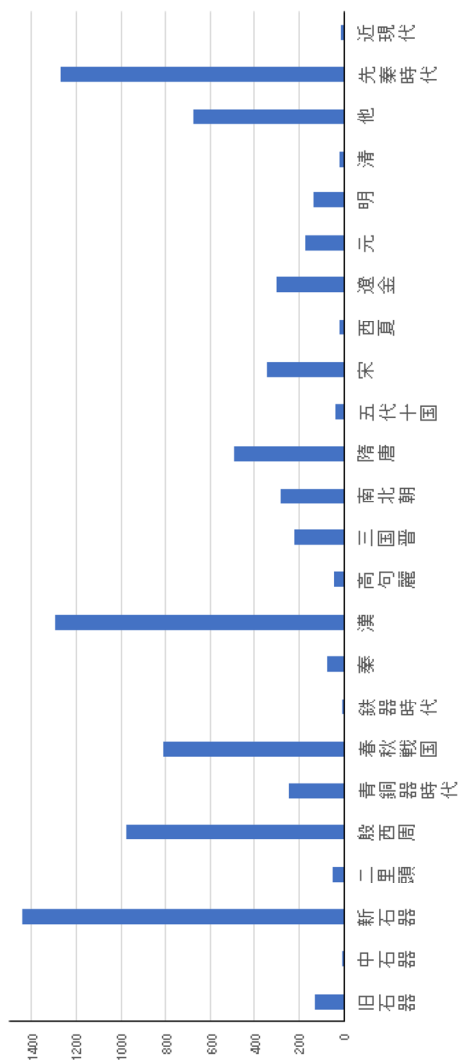


図9 研究対象となった時代 (主要)

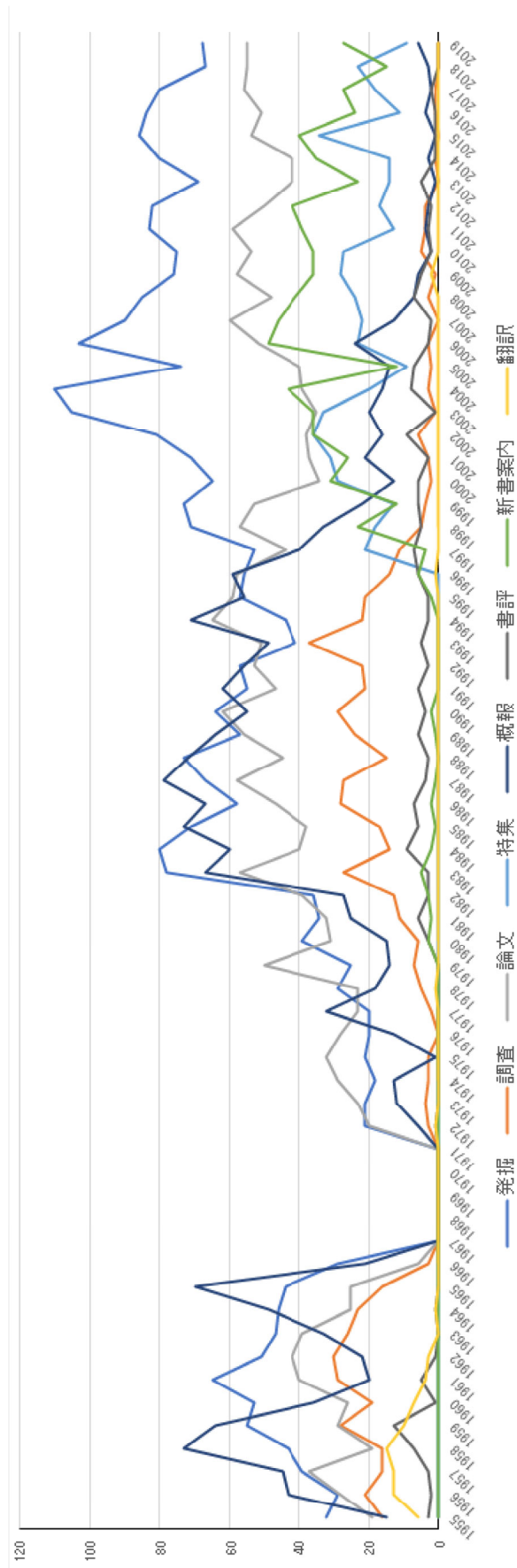


図10 記事の種類の変遷

## 第5章 中国考古学の特質

これまで、各章での様々な検討を踏まえて、本章では本論の重要な目的である中国考古学の特質について考察し、本論のまとめとする。

### 第1節 抽出された諸特徴から

中国考古学の特質を把握するために、以上の各章で明らかになったことを再度点検すると、次のようになろう。

第1章では、中国の考古学史について欧米考古学を中心として一部日本も含む外国考古学の影響について検討し、中国考古学の経過を捉えようとした。現代の中国考古学は発展の一途をたどっており、華々しい成果が次々と出されている。また、欧米考古学で新しい展開で生じてきた考古学の理論ないしパラダイムに由来する、様々な名称や調査研究手法など、先端的なものも含めて多く導入されつつある。しかし、表面的な理解だけでなく、より深く中国考古学を理解するために、3つの時期に分けて学史をたどった。

中国の近代考古学の始まりにおいて、科学的志向・民族主義的傾向と相俟って、中国考古学は考古資料と文献資料を対照すること、そして中国の歴史を復元することが目標となった。これは現代まで通底する中国考古学の基本的な立場である「歴史学としての考古学」の形成につながったと考えられる。中国考古学は成立以来、外国考古学の影響を受けており、それを取捨選択しながら現代に至っているといえる。初めは欧米や日本から学び、そして新中国成立後は短期間ながらソ連から濃密にマルクス主義的考古学を学びベースを獲得した後、文化大革命を経て、より独自の考古学を展開するようになった。さらに国家戦略を背景として1990年代以降には欧米考古学に接近して、さらなる近年の国家戦略のもと大きな展開を遂げていると理解される。

中国考古学の外国考古学からの影響は各時期で確かにあったが、ただし、それらの受け入れ方と定着の度合いには差があった。理論より技術が重視される傾向が強く、欧米考古学の理論についても深く理解しようとせず、表面的に無理に当てはめるなどの問題も見られた。すなわち、民族考古学、ジェンダー考古学、認知考古学、パブリック考古学の検討はそ

れを強く支持する結果であった。さらに、中国国内の国際的な関係や政治状況の変動に考古学は大きく影響を受けてきたことがわかった。

中国考古学の変化は、内部的な発展というより外部的要素、つまり国家間の関係や国内の政治状況、国家の方針といった周囲の状況が極めて大きく働いてきたという特性が看取でき、以上のような歴史的経緯と相俟って、外国からの要素をある意味でつぎはぎして選択したこと、そしてその結果として今日のユニークな中国考古学が形成されたということができよう。

第2章では、型式学に関して日本との比較を念頭に置いて、学史的、方法論的、あるいは実践的に検討を行った。非欧米国において古くから自国民が考古学を行ってきた日本と中国は、距離的にも近く、戦前から戦中には日本からの方法論的影響も受けてきたにもかかわらず、現在の考古学の実践には大きな違いが生じている。特に日本考古学では型式学や型式学的研究法に基づき、精緻な分類と編年が形成されてきて久しいが、中国とは大きく考え方や実践法に差がある。

中国では日本に比べれば分類・編年の実践が活発ではなく、その方法への理解も含めて不徹底なものとなった感がある。それは、戦争による外国人考古学者の撤退により、考古学の初期において早々に自国民による独自の考古学研究が開始期と重なったことが、個性の強い考古学を生み出す一因として考えられた。また、戦後はソ連考古学との接近があり、マルクス主義的考古学の色彩が強まるとともに、「ブルジョワ考古学」として型式学が批判されたことも中国考古学に強い影響を与えたと考えられる。その結果、日本の考古学者から見れば、大雑把な分類や編年であり、またそのベースとなる細かな観察などもしないという態度を形成した可能性が考えられよう。

筆者なりに中国東北部の新石器時代の土器に対して、現代の日本式の型式学的研究法を意識した方法を実際に適用したが、そこでは高解像度で土器の年代変化が追えること、そして集落の展開に対して有効な解釈が可能になることを示した。日本式の研究法は優れた方法だと考えるが、しかしながら、多様な考古学のあり方という点からすれば、中国考古学のやり方も否定してしまふことはできない。

考古学者が自らの考古学を他の考古学との比較において自省的であるべきであるし、また多様な考古学のあり方を知り選択肢を増すことが重要であるといえよう。

第3章では、中国考古学における3D技術の適用について検討したが、このような新しい手法の導入が近年の中国考古学では顕著といえる。既に中国では著名文化財をはじめとし



て三次元計測が多様な考古学の現場で適用されている。また、適用される 3D 技術の具体的な種類は多様であり、かなり高度な適用がなされて成果を上げている。さらに、考古学教育においても、3D 技術を用いた先進的な施設が導入されるなど、先端的な取り組みも始められている。

こうした状況は、日本考古学の現状と比べれば大きな差であり、中国のほうが先行しているところも多いと言えそうである。しかしながら、中国では考古学者自身が実践しているというよりは、専門の技術者や研究者との「分業」が基本であり、そこにも中国考古学の大きな特徴の一つが表れていると考えられる。おそらく、考古学者と 3D 技術の専門家との間の真の協業による考古学研究上の問題解決にはまだ距離があると思われる。ただし、筆者の経験から、若い学生には関心を持つ者がいることを指摘したが、世代交代により将来的には状況が大きく展開する可能性があると考えられる。

中国考古学での状況は、明らかに経済成長と国家戦略とを背景にもっていると考えられ、それが欧米考古学の先進性にも比肩できるような高度な状況を急速にもたらしつつある。しかし、筆者の経験からもそれで考古学界全体が覆われているわけではなく、多くの取り残された考古学者や地域が存在するのが実情だといえそうである。ここでも考古学者の二極分解ともいえる状況が生じている可能性が考えられる。

第 4 章では、中国考古学の研究動向分析を行った。『考古』を用いた 1955 年以降の全冊に及ぶデータベースを作成し、通時的な動向分析を中心に実施した。検討項目は多岐にわたり、入力した項目は多数に及んだが、ある意味で『考古』に関する多角的な検討となったと考える。

その結果、中国考古学の関心が中原に集中する傾向が持続していることが判明した。また、考古学者に好まれる対象とそうでないものがあることが明確になった。さらに、中国の考古学者の意識として、「歴史学としての考古学」という信念が、学史的にも社会的にも形成されており、それが論文や実践に表れていることなど、多くのことが判明した。特に、文化史的、伝播論的な考えに基づく考古学の実践がなされている傾向が強く、それは激動ともいえる中国考古学の歴史においても、基本的に変わらずに保ち続けられた持続的傾向と言うべきものである。

一方、そのような持続的な傾向がある反面、1950 年代の露骨な政治的イデオロギーのように、ある期間で収束したものがあることがわかった。全体的に、政治状況の変化とかなりよく対応していること、そして国際関係を含む政治的変化がかなり鋭敏に考古学の実践に

反映していることが示された。

結局、欧米考古学の理論に由来する先端的技術は採用される傾向が強く、特に 1990 年代以降になるとそれが顕著になって今に至るが、そうした欧米由来の考古学理論については、理論と方法、さらに言えば考古学者の考え方や態度を総体として導入せず、また理解することなしに、技術や用語などを表面的に導入することが目立った。

## 第2節 中国考古学の特質について

中国考古学の特質に限らず、あらゆる考古学の特質は本来簡単に示せるものではなからう。まして、非欧米国において日本に次いで長い考古学の歴史をもち、しかも激動の時期を乗り切ってきた中国考古学については、なおさらであろう。しかしながら、これまでの検討によって、その特質をある程度は抽出することができたと考える。

すでに述べてきたことにその特質が示されていると考えるが、特に現代の中国考古学の持つ特質について、これまでの検討結果を集約して示すとするならば、次のようになるであろう。

すなわち、

- ①欧米考古学に由来する用語や技術を幅広く、総花的に採用することができ、そこには迅速性、徹底性、進歩性が見られること。

しかし、ポストプロセス考古学の導入やそれ以降の考古学理論の本質的理解が進んでいないことが示すように、

- ②無意識のうちにも、中国考古学に適合する方法とそうでないものを峻別する取捨選択が行われていること。

が挙げられる。これは非欧米諸国における日本考古学の場合とも非常に類似したところがあり、必ずしも政治体制云々とはいえない面があろう。

換言すれば、中国考古学は、マルクス主義に基づくの主たる理論が背景にはあるが、現在までの本質とその実態は、

- ③伝統的な文化史的考古学に基礎をおいており、パラダイムの変更を伴うような理論的な変化には極めて保守的であること。

その背景には、既存の価値観を尊び、新しい理論を好まない考古学者の心性がある可能性も十分考えられる。マルクス主義的理論の枠組みが厳然として存在しており、それを含むメタ認知が行われにくいことも要因として考えられる。さらに、

- ④中国国内の政治的状況や国際関係の状況に極めて鋭敏に反応してきた過去をもっており、現在の状況からも、今後とも鋭敏である可能性が高いこと。

これについては、好むと好まざるとにかかわらず、政治との関係が密接な状況となって今日に至っているようである。これは多かれ少なかれ他の国の考古学にも見られる要素であ

るが、特に密接なものといえよう。当分の間、国外の考古学理論やその思想をフォローし対応していくことよりも、中国国内の考古学界を取り巻く状況が最も優先されていく可能性が考えられる。

中国考古学は現在、以前よりはるかに国民の関心が高まっており、新発見のニュースや「パブリック考古学」的活動と相俟って、当面、国内向けには大きな成果を上げていくことは間違いないであろう。

しかし、特に国外向けには、新発見や過去の歴史の偉大さを提示する以外にも重要になることがあると思われる。既に述べてきたように、改革開放が開始されてから欧米の著名な考古学者たちによって、発見だけでなく理論やパラダイムの面を重視するよう繰り返し指摘されて今日に至っている。中国は古代文明が成立し展開した場所であることを考えれば、なおさら、そこから人類の未来のために何を得ていくのかは世界が注目するところとなろう。そうであれば、おそらくこれから重要になるのは、これまでの外国考古学の影響から得てきた恩恵を中国考古学が形成してきた独自性の中でいかにうまく咀嚼し、新たな価値を帯びた現代的な理論や方法、さらにそれに沿った価値ある実践法を創出して、それをいかに示していくかということであって、そのことは中国考古学にとって大きな課題といえるであろう。

## 結 語

本論は、鹿児島国際大学大学院国際文化研究科博士後期課程において研究してきた、中国考古学の特質に関する筆者なりの検討である。筆者は、中国人留学生として同大学の国際文化学部に入學して以来、日中の考古学あるいはそれに関連する諸分野にふれてきた。それから早くもかなりの期間が経過したが、その間、紆余曲折を経ながらも、「国際文化」を学ぶ者としての視点は一貫して持ち続けたと考えている。

そのため、本論の中にはいわゆる研究だけでなく、これまでの日本での生活や活動において筆者が経験し体感してきたことが、多かれ少なかれ反映しているはずである。本論の中でも触れたが、考古学という学問分野は歴史的・社会的コンテクストにしばしば依存するとともに、考古学者の個人的なコンテクストにも依存するため、当然のことながら筆者自身にも反映しているはずだからである。したがって、本論のテーマ設定も、中国人である筆者が中国考古学の外側から中国考古学を眺めるという点や、中国考古学を国外とのかかわりの中でとらえること、特に日本考古学との比較も念頭において相対化に努める点、さらに単なる論評ではなく筆者の実践や分析なども加えながら、より積極的な比較をするという点など、筆者なりの視点をとっており、それなりにユニークな内容になったのではないかと考えている。

本論が中国考古学のより多様で豊かな発展はもとより、考古学を通じた国際的な対話・研究交流の促進、さらに中国考古学と日本考古学という東アジアのユニークな 2 つの考古学の相互理解などに役立つところがあるとするならば幸いである。

最後に、本論が基づいた筆者の論文等との関係について、下に列挙する。ただし、本論をまとめるにあたり、加筆・修正や統合・分割を行ったところがある。

第 1 章第 1 節は、「中国考古学における欧米考古学の影響とその現状」(『日本情報考古学会講演論文集』Vol.22 (通巻 42 号) 2019 年) に加筆したものである。

第 1 章第 5 節は、「中国におけるパブリック考古学の現状と課題」(『日本情報考古学会講演論文集』Vol.20 (通巻 40 号) 2018 年) に加筆したものである。

第 2 章第 1 節は、「型式学的手法と中国考古学—新石器時代中期土器での実践を通じて—」(『情報考古学』Vol.26 2020 年) の前半部分、第 2 節は後半部分を用いている。

第 3 章第 1 節は、「中国における 3D 考古学とその現状」(『日本情報考古学会講演論文集』

Vol.19 (通巻 39 号) 2017 年)、「中国考古学における三次元計測とその現状」(『情報考古学』Vol.26 2020 年)を用いている。

第 3 章第 2 節は、「中国東北地区における新石器時代土器の調査と SfM による記録(2)」(『日本情報考古学会講演論文集』Vol.18 (通巻 38 号) 2017 年)をもとに改稿しつつ、「中国東北地区における新石器時代土器の調査と SfM による記録」(『日本情報考古学会講演論文集』Vol.17 (通巻 37 号) 2016 年)の一部も含めた。

第 4 章第 1 節は、「中国考古学における欧米考古学の影響とその現状」(『日本情報考古学会講演論文集』Vol.22 (通巻 42 号) 2019 年)を大幅に改稿した。

本論のその他の部分は未発表のものであり、新しく書き起こしたものである。

## 謝 辞

本論を作成するにあたっては、多くの方々と機関にお世話になった。まず、指導教員として学部生の頃からこれまで一貫してご指導いただいていた大学院国際文化研究科の中園聡先生に御礼を申し上げます。また、研究と執筆に当たっては、平川ひろみ氏、太郎良真妃氏、若松花帆氏をはじめとする同研究室の方々には多くのご教示とご協力を得た。さらに、共立女子学園名誉教授の植木武先生、元同志社大学の鈴木重治先生には、筆者の研究内容についてご教示と温かい励ましをいただいた。また、中国での調査や研究、あるいは文献検索などにご協力をいただいた現地の先生方や学生の方々、博物館や調査研究機関等の方々をはじめ、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

ただし、本論において誤りや問題があるとすれば、すべて筆者の責任に帰することを明記する。

## 文 献

### 日本語文献

- 赤木 清 (1937) 「考古学的遺物と用途の問題」『ひだびと』5 (9) : 1-4.
- 飯島武次 (2003) 『中国考古学概論』、pp. 11-13、東京：同成社.
- 小澤正人・谷 豊信・西江清高 (1999) 「中国の考古学」『世界の考古学』7、藤木強・菊池徹夫監修、pp. 8-12、東京：同成社.
- 金田明大・木本挙周・川口武彦・佐々木淑美・三井猛 (2010) 『文化財のための三次元計測』、東京：岩田書院.
- 川宿田好見 (2009) 「多変量解析を用いた研究動向分析—土器研究を対象として—」『鹿児島国際大学大学院学術論集』1 : 13-26.
- 甲野 勇 (1937) 「遺物用途問題と編年」『ひだびと』5 (11) : 18-21.
- 小林行雄 (1935) 「弥生式土器の様式構造」『考古学評論』2 : 1-2.
- 後藤 明 (1984) 「欧米考古学の動向—理論と方法論の再検討を中心に—」『考古学雑誌』69 (4) : 87-137.
- 西藤清秀 (2017) 「パルミラでの3次元計測プロジェクト」『季刊考古学』140 : 86-88.
- 高橋龍三郎 (1981) 「亀ヶ岡式土器の研究—青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について—」『北奥古代文化』12 : 1-51.
- 田中良之 (1982) 「磨消縄文土器伝播のプロセス—中九州を中心として—」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上、森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会編、pp. 482-505、福岡：森貞次郎博士古稀記念古文化論集刊行会.
- 田中良之・松永幸男 (1984) 「広域土器分布圏の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」『古文化談叢』14 : 81-117.
- 太郎良真妃 (2017) 「ありふれた遺物の記録と応用」『季刊考古学』140 : 38-41.
- 都出比呂志 (1986) 「日本考古学と社会」『岩波講座日本考古学』7、pp. 31-70、東京：岩波書店.
- 勅使河原彰 (1988) 『日本考古学史』、東京：東京大学出版会.
- 中園 聡 (1988) 「土器様式の動態—古墳の南限付近を対象として—」『人類史研究』7 : 31-69.



- 中園 聡 (1991) 「甕棺型式の再検討—“属性分析”と数量分類法による型式分類—」『九州考古学』66 : 1-28.
- 中園 聡 (2003) 「型式学を超えて」『認知考古学とは何か』、松本直子・中園聡・時津裕子編、pp. 36-53、東京 : 青木書店.
- 中園 聡 (2004) 『九州弥生文化の特質』、pp. 132-207、福岡 : 九州大学出版会.
- 中園 聡 (編) (2017) 『季刊考古学』140 (特集 3D 技術と考古学)、東京 : 雄山閣.
- 中園 聡 (2017) 「九州出土中世中国系瓦の三次元記録と検討」『季刊考古学』140 : 34-37.
- 西嶋定夫 (1976) 「Ⅲ 中国」『考古学ゼミナール』、江上波夫監修、pp. 271-278、東京 : 山川出版社.
- 野口 淳 (2017) 「3D 記録への熱いまなざし」『季刊考古学』140 : 84-85.
- 濱田耕作 (1922) 『通論考古学』、東京 : 大鐙閣.
- 平川ひろみ (2009) 「考古学におけるエスニシティとエスニック・アイデンティティ」『鹿児島国際大学大学院学術論集』1 : 53-68.
- 平川ひろみ (2017) 「三次元考古学の今と未来—海外と日本—」『季刊考古学』140 : 64-67.
- 松本直子 (2000) 『認知考古学の理論と実践的研究—縄文から弥生への社会・文化変化のプロセス—』、福岡 : 九州大学出版会.
- 松本直子 (2003) 「今なぜ認知考古学が重要なのか」『認知考古学とは何か』、松本直子・中園聡・時津裕子編、pp. 3-10、東京 : 青木書店.
- 松本直子・中園聡・河口香奈絵 (1999) 「フェミニズムとジェンダー考古学—基本的枠組み・現状と課題—」『HOMINIDS』2 : 3-24.
- 松本直子・中園聡・時津裕子編 (2003) 『認知考古学とは何か』、東京 : 青木書店.
- 溝口孝司 (1987) 「土器における地域色—弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として—」『古文化談叢』17 : 137-158.
- ミハエリス, アドルフ (濱田耕作訳) (1927) 『ミハエリス氏美術考古学発見史』、東京 : 岩波書店.
- 宮本一夫 (1999) 「欧米における近年の中国考古学研究と日本における中国考古学研究」『日本中国考古学会会報』9 : 82-95.
- 森本六爾 (1934) 「弥生式土器に於ける二者—様式要素単位決定の問題—」『考古学』5(1) : 3-8.
- 森本六爾・小林行雄 (編) (1938) 『弥生式土器聚成図録』、東京 : 東京考古学会.

- モンテリウス, O (濱田耕作訳) (1932) 『考古学研究法』、東京：座右宝刊行会.
- 山内清男 (1928) 「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』 43(10) : 463-464.
- 山内清男 (1930) 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』 1(3) : 1-19.
- 山内清男 (1937) 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』 1(1) : 29-32.
- 楊 帆 (2013) 「中国東北地区遼西地域の新石器時代中期土器を素材とした土器編年」『日本情報考古学会講演論文集』 11 : 37-43.
- 楊 帆 (2017a) 「中国東北地区における新石器時代土器の調査と SfM による記録(2)」『日本情報考古学会講演論文集』 18 : 63-65.
- 楊 帆 (2017b) 「中国における 3D 考古学とその現状」『日本情報考古学会講演論文集』 19 : 27-29.
- 楊 帆 (2018a) 「中国におけるパブリック考古学の現状と課題」『日本情報考古学会講演論文集』 20 : 73-76.
- 楊 帆 (2018b) 「中国東北地区遼西地域の白音長汗遺跡における土器の編年分析」『日本情報考古学会講演論文集』 21 : 82-87.
- 楊 帆 (2019) 「中国考古学における欧米考古学の影響とその現状」『日本情報考古学会講演論文集』 22 : 80-85.
- 楊 帆 (2020a) 「型式学的手法と中国考古学—新石器時代中期土器での実践を通じて—」『情報考古学』 26 (1・2).
- 楊 帆 (2020b) 「中国考古学における三次元計測とその現状」『情報考古学』 26 (1・2).
- 楊 帆・太郎良真妃 (2015) 「SfM による土器の三次元化—中国新石器時代の土器を対象として—」『日本文化財科学会第 32 回大会研究発表要旨集』、pp. 366-367、日本文化財科学会.
- 楊 帆・太郎良真妃 (2016) 「中国東北地区における新石器時代土器の調査と SfM による記録」『日本情報考古学会講演論文集』 17 : 80-83.
- 横山浩一 (1985) 「型式論」『岩波講座日本考古学』 1、近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原真・田中琢・戸沢充則編、pp. 44-78、東京：岩波書店.

## 中国語文献

- Michaelis, A. (郭沫若译) (1929) 『美术考古学发现史』上海：乐群书店.
- 艾 婉乔 (译) (2013) 「伊安・霍德 (Ian Hodder) 教授访谈录」『南方文物』 1: 40-44.

- 白 路 (2009)『先秦女性研究—从社会性别视角的考察与分析』南开大学博士论文.
- 滨田耕作 (俞剑华译) (1931)『考古学通论』上海: 商务印书馆.
- 滨田耕作 (郑师许·胡肇椿译) (1936)『考古学研究法』上海: 世界书局.
- 北京大学考古文博学院 (2017)「北京大学 2017 年中学生考古暑期课堂结课仪式在杭州举行」  
<http://www.gotopku.cn/index/detail/628.html> 2017-08
- 北京大学考古系商周组·陕西省考古研究所 (2000)『天马一曲村 (1980-1989)』, pp. 171-172、  
图-177、北京: 科学出版社.
- 北大考古专业资产阶级学术批判小组 (1958)「论资产阶级器物形态学的伪科学性—批判苏秉琦的“斗鸡台沟东区墓葬”一」『考古通讯』11: 19-30.
- 克林·伦福儒 (1994)「序」『外国考古学史』杨建华著, pp. 1-2、长春: 吉林大学出版社.
- 蔡 元培 (1926)「说民族学」『一般』4: 478-485.
- 蔡 葵 (1992)「论中国民族考古学的形成和初步发展」『思想战线』4: 67-72.
- 曹 芳芳 (2011)『以安阳殷墟女性墓葬为例再析当时女性的社会地位』河南大学学士论文.
- 陈 淳 (1992)「“民族考古学”的译法、涵义及其他」『东南文化』Z1: 40-41.
- 陈 淳·沈 辰·陈 万勇·汤 英俊 (2002)「小长梁石工业研究」『人类学学报』1: 23-40.
- 陈 淳·孔 德贞 (2006)「性别考古与玉衡的社会学观察」『考古与文物』4: 31-37.
- 陈 淳 (2017)「考古学理论: 回顾与期望」『中国考古学年鉴 2016』, 中国考古学会编, pp. 3-25、北京: 中国社会科学出版社.
- 陈 淳 (2018)「从考古学理论方法进展谈古史重建」『历史研究』6: 4-20.
- 陈 理·李 玉牛 (2012)「田野考古三维测绘的应用探索—以四川郫县波罗村遗址发掘为例」『四川文物』3: 88-96.
- 陈 虹利·韦 丹芳 (2018)「中国民族考古学研究回顾与反思」『广西民族大学学报 (哲学社会科学版)』2: 25-34.
- 陈 铁梅 (1985)「多元分析方法应用于考古学中相对年代研究—兼论渭南史家墓地三种相对年代分期方案的比较」『史前研究』3: 101-108.
- 陈 铁梅·Rapp G. Jr.·荆 志淳·何 笃 (1997)「中子活化分析对商时期原始瓷产地的研究」『考古』7: 39-52.
- 陈 胜前 (2013)『史前的现代化—中国农业起源过程的文化生态考察』, 北京: 科学出版社.
- 陈 胜前·李 彬森 (2015)「作为科学的考古学」『东南论坛』2: 6-12, 127-128.

- 陈 星灿 (1995)「考古学和中国历史学」『考古与文物』3: 1-10.
- 陈 星灿 (1997)『中国史前考古学史研究(1895~1949)』、pp. 625-356、北京: 生活·读书·新知三联书店.
- 陈 洪波 (2011)「蒙特柳斯考古类型学思想在中国的译介」『考古』1: 91-96.
- 陈 苇 (2008)「从居室墓和石雕像看兴隆洼文化的祖先崇拜」『内蒙古文物考古』1: 74-66.
- 曹 兵武 (1991)「谈“ethnoarchaeology”的译法及内涵」『东南文化』5: 236-238.
- 曹 兵武 (2009)「中国考古学六十年」『文史知识』10: 4-14.
- 曹 勇 (2011)「三维激光扫描技术在考古工作中的应用」『福建文博』2: 32-36.
- 曹 源 (2017)「基于广义回归神经网络的敦煌壁画数字化修复技术的研究」西北师范大学硕士学位论文.
- 程 虎伟·高 振华·陈 鑫 (2013)「浅谈三维数字技术在古代青铜器保护中的应用—以绛县横水西周墓地青铜墓地青铜器扫描为例」『文物世界』6: 57-60.
- 程 小龙·程 效军·贾 东峰·李 杰 (2015)「三维激光扫描技术在考古发掘中的应用」『工程勘察』8: 79-86.
- 丹尼尔·史泰尔斯(谢仲礼译)(1989)「民族考古学方法及运用的讨论」『南方文物』2: 64-72.
- 刁 常宇·李 志荣 (2018)「石质文物高保真数字化技术与应用」『中国文化遗产』4: 61-67.
- 丁 绍通·韩 滨娜 (2018)「辽宁地区辽金古城分布与环境关系研究」『佳木斯大学社会科学学报』2: 149-154.
- 杜 侃 (2011)「馆藏文物保护中数字建模技术应用研究」『文物保护与考古科学』1: 62-67.
- 樊 锦诗 (2009)「敦煌石窟保护与展示工作中的数字技术应用」『敦煌研究』6: 1-3.
- 樊 鑫 (2010)『甘青地区新石器时代性别考古研究初探』中山大学 2010.
- 范 文澜 (1958)「历史研究必须厚今薄古」『考古通讯』8: 5-9.
- 傅 斯年 (2003)「历史语言研究所工作之旨趣」『傅斯年全集·第三卷』、欧阳哲生编、pp. 3-12、长沙: 湖南教育出版社.
- 冯 友兰(赵复三译)(2004)『中国哲学简史』、pp. 40-41、北京: 新世界出版社.
- 付 泉 (2017)「公众考古新闻的发掘—以南昌海昏侯墓的新闻报道为例」『新闻前哨』4: 87-89.
- 付 心仪·麻 晓娟·孙 志军 (2019)「破损壁画的数字化复原研究—以敦煌壁画为例」『装饰』1: 21-27.

- 高 蒙河·郑 好 (2013)「论中国公众考古学不是西方舶来品」『东南文化』6: 24-29.
- 高 蒙河 (2014)「中国公众考古的典型案列」『中国文物报』2014年10月24日第7版
- 耿 超 (2010)『性别视角下的商周婚姻、家族与政治』南开大学博士论文.
- 耿 超 (2017)『性别视角下的商周婚姻、家族与政治』北京: 人民出版社.
- 国家文物局 (2018)「吉林省田野考古工作汇报会评选出 4 项优秀考古项目」  
<http://www.wwbh.net/gateway/infoDetail.html?id=31984> 2018-12-15
- 国家文物局 (2009)「2007 年文化遗产日新闻发布会」  
<http://www.wenwuchina.com/a/23/36935.html> 2009-05-13
- 郭 立新 (1997) 1997「民族考古学三题—关于名实问题、理论基础和研究方法的探讨」『南方文物』4: 24-30.
- 郭 沫若 (2011)『中国古代社会研究』北京: 商务印书馆.
- 郭 璐莎 (2012)『天马一曲村遗址西周时期墓葬的性别考古学研究』广西师范大学硕士论文.
- 郭 治中·包 青川·索 秀芬 (1991)「林西县白音长汗遗址发掘述要」『内蒙古东部区考古学文化研究文集』、内蒙古文物考古研究所编、pp. 15-23、北京: 海洋出版社.
- 韩 康信·郑 晓瑛 (1992)「殷墟祭祀坑人骨种系多变量分析」『考古』10: 942-949.
- 韩 建业 (1993)「什么是“民族考古学”」『东南文化』2: 35-43.
- 杭 侃 (2016)「公共考古学推动考古学发展」  
<http://theory.people.com.cn/n1/2016/0926/c40531-28739705.html>  
2016-09-26
- 何 凯 (2017)「Altizure 和 Pix4Dcapture 在考古遗址三维重建中的应用」『三代考古(七)』、中国社会科学院考古研究所夏商周考古研究室编、pp. 600-611、北京: 科学出版社.
- 何 弩 (1989)「也谈“民族志考古学”的定义与方法」『中国文物报』1989年8月18日第三版.
- 何 勇 (2016)「大型高浮雕石质文物的数字化探索—以云冈石窟为例」『聚焦』2: 30-33.
- 贺 云翱 (编) (2011)『女性考古与女性遗产』南京: 南京大学出版社.
- 候 妙乐·吴育华·张 玉敏 (2009)「三维激光扫描技术在震后铁旗杆保护中的应用」『系统仿真学报』S1: 265-268.
- 花 晴 (2011)『民和阳山墓地的性别角色研究』西北大学学士论文.

- 华 忠·鲁 东明·潘 云鹤 (2002)「敦煌壁画虚拟复原及演变模拟模型研究」『中国图象图形学报』2: 181-186.
- 黄 慧敏·王 晏民·胡 春梅·王 国利 (2012)「地面激光雷达技术在故宫保和殿数字化测绘中的应用」『北京建筑工程学院学报』3: 33-38.
- 后 藤明 (袁靖·李峰译) (1986)「欧美考古学的动向—理论与方法的再探讨」『史前研究』Z1: 172-200.
- 霍 笑游·孟 中元·杨 琦 (2009)「虚拟现实—秦兵马俑遗址与文物的数字化保护与展示」『东南文化』4: 98-102.
- 胡 子尧·周 冰 (2016)「首届“文物考古领域中的可视化技术”交流会纪要」  
[http://kaogu.cssn.cn/zwb/xsdt/xsdt\\_3347/xshy/201612/t20161206\\_3939771.shtml](http://kaogu.cssn.cn/zwb/xsdt/xsdt_3347/xshy/201612/t20161206_3939771.shtml) 2016-12-06
- 吉迪 (李静霞译) (2006)「马克思主义及后马克思主义模式在中国新石器时代性别研究之应用」、『性别研究与中国考古学』、林嘉琳·孙岩编、pp. 3-14、北京: 科学出版社.
- 贾 博宇·杨 秀侃·郭 云菁 (2010)「考古教育: 在提高中普及—复旦大学开展公众考古教育实践的尝试」『中国文物报』2010年6月25日第7版.
- 贾 笑冰 (2017)「信息技术支持的博尔塔拉河流域考古调查」『考古』4: 113-120.
- 金 鑫 (2018)『GIS 支持下的浙江良渚古城地区聚落遗址的空间形态研究』南京大学硕士论文.
- 鞠 荣坤 (2016)「晋侯墓葬制度所反映的性别差异」『史志学刊』3: 72-76.
- 柯 长青·冯 学智·顾 国琴 (2006)「敦煌壁画数字图像的三维信息恢复」『南京大学学报 (自然学科)』6: 628-634.
- 林嘉琳 (2006)「安阳殷墓中的女性—王室诸妇、妻子、母亲、军事将领和奴婢」『性别研究与中国考古学』、林嘉琳·孙岩编、pp. 73-101、北京: 科学出版社.
- 林嘉琳·孙 岩 (编) (2006)『性别研究与中国考古学』北京: 科学出版社.
- 李 伯谦 (2006)「中译本序」『性别研究与中国考古学』、林嘉琳·孙岩编、pp. i-v、北京: 科学出版社.
- 李 济 (1990)「记小屯出土之青銅器 (上)」『李济考古学论文选集』、张光直·李光谟编、pp. 547-623、北京: 文物出版社.
- 李 春梅·裴 学胜 (2005)「龙门石窟数字化方案研究」『文化遗产的数字化保护研究—第三

- 届中华文化遗产数字化及保护国际研讨会论文集』、周明全编、pp. 182-186、北京：北京师范大学出版社。
- 李 丹（2010）「墓葬习俗中的性别角色和年龄结构观察—以忻州窑子墓地为例」『传承（学术理论版）』3：142-143.
- 李 东红（2005）「中国边疆考古学的学术取向：民族考古学的理论与方法」『中国边疆考古学术讨论会论文摘要』pp. 123-132.
- 李 东红（2008）「边疆考古的民族视角与范式思考」『民族研究』4：66-72，109-110.
- 李 富强（1988）「新进化论与战后考古学的变化—试论“新考古学”产生的理论基础」『史前研究』辑刊：285-293.
- 李 海刚（2007）「HDS 技术在古建文物测量中的应用」『测绘通报』7：73-74.
- 李 洁（2016）「故宫看展 首次用上 VR 技术」『法制晚报』2016 年 10 月 25 日.
- 李 静（2017）「GIS 支持下的辽东半岛地区新石器时代至青铜时代人地关系浅析—以小珠山遗址资源域为例」吉林大学硕士论文.
- 李 晶晶（2009）「35 年后重现马王堆汉墓发掘史」『生活周刊』8  
<http://www.lifeweek.com.cn/2009/0316/24197.shtml> 2014-5-29
- 李 鹏辉·史 宝琳·王 立新（2018）「基于 GIS 的镇赉县新石器时代和青铜时代遗址分布初探」『北方文物』2：32-37.
- 李 文怡·张 颀·杨 洁（2012）「三维扫描及快速成型技术在文物修复中的应用」『文博』6：78-81.
- 梁 思永（1959）「山西西阴村史前遗址的新石器时代的陶器」『梁思永考古论文集』、中国社会科学院考古研究所编、pp. 1-49、北京：科学出版社。
- 梁 钊韬·张 寿祺（1983）「论“民族考古学”」『社会科学战线』4：206-213.
- 刘 斌·王 宁远（2016）「数字化手段在大遗址考古工作中的应用—以良渚古城为例」『中国文化遗产』2：25-29.
- 刘 斌·张 婷（2016）「中国考古学发展中的苏联影响」『东南文化』5：32-39.
- 刘 斌·张 婷（2018）「从多元到一元：苏联考古学对中国考古学历史学定位的影响」『西部考古』1：331-341.
- 刘 刚·张 俊·刁 常宇（2005）「敦煌莫高窟石窟三维数字化技术研究」『敦煌研究』4：104-109.
- 刘 国祥（2004）「我国史前居室墓葬俗述略」『东北文物考古论集』、刘国祥编、pp. 34-38、

北京：科学出版社.

- 刘建国 (2015a) 「考古遗址的超低空拍摄与数据处理」『考古』11: 98-104.
- 刘建国 (2015b) 「三维重建在文物考古工作中的应用」『中国文化遗产』5: 43-47.
- 刘景芝 (译) (2001) 「外国学者看中国旧石器时代考古」『文物春秋』5: 75-78, 61.
- 刘绪 (2017) 「漫谈田野考古图的表示法」『李下蹊华：庆祝李伯谦先生八十华诞论文集』、  
何弩编、pp. 113-129、北京：科学出版社.
- 林永昌 (2008) 『晋系墓葬性别的考古学研究』北京大学硕士论文.
- 鲁东明·潘云鹤·陈任 (2002) 「敦煌石窟虚拟重现与壁画修复模拟」『测绘学报』1:  
12-16.
- 卢浩然·张宇·牛苗苗·税午阳·周明全 (2015) 「基于 Leap motion 的三维文物  
虚拟拼接方法」『系统仿真学报』12: 3006-3011, 3017.
- 陆益红·赵长胜·武宜广·李明哲·顾登明 (2013) 「楚王陵激光点云三维重建」  
『测绘地理信息』1: 55-57.
- 吕烈丹 (2013) 『稻作与史前文化演变』北京：科学出版社.
- 吕昕娱 (2011) 「认知考古学及其在史前文化中的应用—以红山文化精神研究领域为例」『赤  
峰学院学报』7: 3-5.
- 孟德斯 (郑师许·胡肇椿译) (1935a) 「考古学研究法」『学术世界』1(2).
- 孟德斯 (郑师许·胡肇椿译) (1935b) 「考古学研究法」『学术世界』1(3).
- 孟德斯 (郑师许·胡肇椿译) (1935c) 「考古学研究法」『学术世界』1(4).
- 孟德斯 (郑师许·胡肇椿译) (1935d) 「考古学研究法」『学术世界』1(5).
- 孟德斯 (郑师许·胡肇椿译) (1935e) 「考古学研究法」『学术世界』1(6).
- 孟德斯 (郑师许·胡肇椿译) (1936) 『考古学研究法』上海：世界书局.
- 蒙德里斯 (滕固译) (1937) 『先史考古学方法论』上海：商务印书馆.
- 马洪连 (2014) 『甘青地区新石器时代墓葬的考古研究』西北师范大学硕士论文.
- 马太·约翰逊 (王苏琦译) (2004) 「考古学与性别」『江汉考古』1: 89-94.
- 马艳 (2014) 「三维激光扫描技术在彩绘陶器保护中的应用」『中原文物』5: 115-117.
- 马冬冬·裴树文 (2017) 《旧石器时代早期石器技术与人类认知能力关系研究的回顾与探  
讨》《第四纪研究》4: 754-764.
- 穆艾嘉·陈靓 (2018) 「生物考古学视野下的梁带村芮国居民性别分工初探」『文博』5:



69-76.

内蒙古自治区文物考古研究所（2004）『白音长汗一新石器时代遗址发掘报告』北京：科学出版社。

南 竣祥·梁 爽·李 海泉·周 磊·周 曦冰·党 军勇（2017）「一种基于三维激光扫描技术的快速建模方法」『测绘通报』10：137-139，147.

潘 燕·陈 淳（2012）「农业起源研究的实践和理论」『江汉考古』2：51-69.

潘 云鹤·鲁 东明（2003）「古代敦煌壁画的数字化保护与修复」『系统仿真学报』3：310-314.

裴 文中（1959）「旧石器时代考古学常识（续）」『文物』5：65-67.

裴 文中（1999）『旧石器时代之艺术』、安志敏编、北京：商务印书馆。

濮 文清（2018）『人类学视角下的中国性别考古学』南京大学。

乔 玉（2014）「兴隆洼文化房屋内遗存所反映的性别问题」『北方文物』4：23-27.

仇 世华·蔡 莲珍（1962）「放射性碳素断代介绍」『考古』8：441-446.

仇 世华·蔡 莲珍（2001）「关于考古系列样品碳十四测年方法的可靠性问题」『考古』11：77-79.

曲 风（2012）「传统考古学视野下的“女神”学说」『社会学家茶座』4：149-154.

曲 风（2014）「“女神论”检讨」『重庆文理学院学报（社会科学版）』1：8-24.

容 观瓊（1985）「关于民族考古学发展史上的几个问题」『中山大学学报（社会科学版）』3：94-99，107.

容 观瓊（1999）「试论发展中的我国民族考古学」『广西民族研究』4：15-18.

吉迪（2006）「马克思主义及后马克思主义模式在石器时代性别研究之应用」、『性别研究与中国考古学』、林嘉琳·孙岩编、pp. 3-14、北京：科学出版社。

丹尼尔·史泰尔斯（谢仲礼译）（1989）「民族考古学：方法及运用的讨论」『江西文物』2：64-72.

索 秀芬·郭 治中·包 青川（1991）「林西县白音长汗遗址发掘述要」『内蒙古东部区考古学文化研究文集』、内蒙古文物考古研究所编、pp. 15-23、北京：海洋出版社。

苏 秉琦（1950）「如何使考古工作成为人民的事业」『进步日报』1950年3月28日。

苏 秉琦（1984a）「洛阳中州路（西工段）结语」『苏秉琦考古学论述选集』、苏秉琦编、pp. 65-90、北京：文物出版社。

- 苏秉琦(1984b)「瓦鬲的研究」『苏秉琦考古学论述选集』、苏秉琦编、pp. 137-156、北京：文物出版社。
- 苏秉琦(2010)『苏秉琦文集 1』、pp. 233、北京：文物出版社。
- 苏秉琦·殷玮璋(1981)「关于考古学文化的区系类型问题」『文物』5：10-17。
- 苏小幸·王嗣洲(1994)「辽东半岛新石器时代晚期文化的再认识」『考古』6：547-550，489。
- 宋德闻·胡广洋(2006)「莱卡 HDS 应用于秦俑二号坑数字化工程」『测绘通报』6：69-70。
- 宋兆麟(1986)「加强民族、考古比较学研究」『史前研究』22：135-142。
- 舒欢(2017)「三维重建和 3D 打印在兵马俑修复中的应用」『电子科学技术』4：160-163。
- 孙虎成(2012)「三维激光扫描技术在博物馆中的应用与实现」『河南科技』10：54。
- 孙晓鹏(2017)「石鼓山墓地性别考古研究」『三代考古』1：505-518。
- 孙岩·杨红育(2006)「中国西北地区新石器时代的男女葬俗及其反映的社会观念—以马家窑文化和齐家文化为例」『性别研究与中国考古学』、林嘉琳·孙岩编、pp. 15-32、北京：科学出版社。
- 佟柱臣(1961)「东北原始文化的分布于分期」『考古』10：557-566。
- 汤惠生(2004)「旧石器时代石斧的认知考古学研究」『东南文化』6：16-20。
- 唐仲明(2018)「基于三维技术的海外收藏“响堂”造像研究—以南响堂石窟第 2 石窟为例」『故宫博物院院刊』4：22-29，158。
- 塔拉·李少兵·李丽雅(2012)「内蒙古博物院馆藏文物三维数据采集及成果应用初探」『中国博物馆』1：32-35。
- 童恩正·张陞楷·陈景春(1975)「关于使用电子计算机缀合商代卜甲碎片的初步报告」『四川大学学报(自然科学版)』2：57-65。
- 王春玥·张振·李月从·李冰·李陈志(2017)「冀东地区新石器时代到青铜时代聚落遗址分布规律及环境变化的关系」『山地学报』4：477-478。
- 王建文·张童心(2008)「墓葬习俗中的性别研究—以贾湖遗址为例」『四川文物』6：39-44。
- 王建文(2009)『性别角色与社会习俗研究』上海大学硕士论文。
- 王金(2017)「基于三维扫描技术的计算机辅助陶器类型学研究」北京科技大学博士论文。
- 工莫(2011)「二维激光扫描技术在故宫古建筑测绘中的应用研究」『故宫博物院院刊』6：143-156，163。

- 王 鹏辉 (2012)「新疆史前“化妆棒”器物组合的性别考古学研究」『边疆考古研究』1: 329-341.
- 王 苏琦 (2004)「考古学与性别」『江汉考古』1: 89-94.
- 王 婷 (2012)「文物真三位数字建模技术在秦始皇兵马俑博物馆中的应用—以一号坑陶俑为例」『文物保护与考古科学』4: 103-108.
- 王 祁 (2019)「殷墟墓葬两性社会角色的考古学研究」『江汉考古』1: 81-90.
- 王 巍 (2019)「新中国考古学 70 年发展与成就」『历史研究』4: 23-30.
- 王 志·孙 升·唐 仲明·梁 建忠 (2017)「基于倾斜摄影测量技术的明中都城午门遗址的三维重建」『安徽建筑大学学报』1: 34-37.
- 王 仲殊 (2012)「再论日本出土的景初四年铭三角缘盘龙镜」『考古』6: 75-81, 114.
- 王 闯 (2011)「兴隆洼文化居室墓葬的认知考古学分析」『草原文物』1: 40-49.
- 汪 宁生 (1987)「论民族考古学」『社会科学战线』2: 315-320.
- 汪 宁生 (2007)「三谈民族考古学」『考古』4: 59-62.
- 汪 仁湘 (2005)「边疆考古与民族考古学」『中国边疆考古学学术讨论会论文摘要』pp. 103-106.
- 武汉大学考古学与博物馆学系·河北省文物局南水北调文物保护办公室·元氏县博物馆 (2018)「河北元氏县南白楼墓地唐代墓葬发掘简报」『考古』8: 77-94, 2.
- 武 松·王 春委·冯 恩学 (2018)「吉林省查干湖西南岸春捺遗址 2016 年调查简报」『地域文化研究』1: 112-118, 156.
- 吴 理吴里 (胡肇椿译) (1935)『考古发掘方法论』上海: 商务印书馆.
- 吴 学文 (1978)「江苏江宁东善桥南朝墓」『考古』2: 143-144, 96.
- 许 玉林 (1989)「辽东半岛新石器时代文化初探」『考古学文化论文集 (二)』、苏秉琦编、pp. 96-112、北京: 文物出版社.
- 徐 政 (2014)「代海墓地性别考古学的初步研究」『东方考古』1: 104-112.
- 夏 国芳·胡 春梅·范 亮 (2018a)「一种面向造像类文物的真三维模型精细重建方法」『敦煌研究』3: 131-140.
- 夏 国芳·胡 春梅·王 晏民 (2018b)「文物表面病害真三维检测方法研究」『中国文物科学』1: 89-96.
- 夏 鼎 (1955)「放射性同位素在考古学上的应用—放射性炭素或炭 14 的断定年代法」『考古通讯』4: 73-78.

- 夏 鼐 (1961)『考古学论文集』, pp. 161-162、北京: 科学出版社.
- 新华社 (1958)「周总理关于台湾海峡地区局势的声明」『考古』10: 1-3.
- 仪 明洁·樊 鑫 (2018)『甘青地区史前遗存的性别考古研究』北京: 科学出版社.
- 余 静 (2011)「多元统计分析方法在汉墓等级划分中的应用—以安徽南部西汉早期墓为例」  
『考古』12: 74-82.
- 俞 伟超 1985「关于当前楚文化的考古学研究问题」『先秦两汉考古学论集』pp. 243-253、北  
京: 文物出版社.
- 姚 伟钧·张 国超 (2011)「中国公众考古基本模式论略」『浙江学刊』1: 43-48.
- 姚 娅·宋 国定 (2017)「三维重建技术在考古中的应用探讨」『文物保护与考古科学』10:  
96-101.
- 颜 孔昭 (2008)『中原地区西周墓葬性别研究』北京大学博士论文.
- 杨 国平 (2011)「从曹操墓的纠纷看我国考古论证制度的缺失与完善」『阿坝师范高等专科学校学报』2: 63-65.
- 杨鸿 (1997)『美术考古半世纪』北京: 文物出版社.
- 杨 建华·张 文立 (1996)「认知考古学在欧洲的兴起」『华夏考古』2: 105-112.
- 杨 建华 (1999)『外国考古学史』吉林: 吉林大学出版社.
- 杨 林·盛 业华·阎 国年·裴 平安·毕 硕·陈 济民·孙 懿青 (2004)「数字摄影  
测量技术在田野考古制图中的应用」『工程勘察』5: 47-49.
- 杨 秋和·龚 建江·施 金祥 (2009)「杭州吴山广场石佛院遗像群三维激光扫描与数据处  
理」『浙江测绘』1: 20-21, 31.
- 杨 蔚青·李 永强·王 阁·白 丁 (2012)「三维激光扫描技术在土遗址保护中的应用—  
以隋唐洛阳城定鼎门遗址唐代道路遗址保护为例」『中原文物』4: 98-101.
- 袁 国平 (2018)「三维激光扫描技术在文物保护中的应用」『矿山测量』5: 93-97.
- 元 (1958)「粉碎美国侵略者的军事威胁和战争挑衅」『考古』10: 8.
- 中国社会科学院考古研究所·辽宁省文物考古研究所·大连市文物考古研究所 (2009)「辽宁  
长海县小珠山新石器时代遗址发掘简报」『考古』5: 16-25.
- 曾 福泉 (2017)「穿越七百年, 宋代航船再扬帆——浙大团队利用科技考古手段完成高保  
真三维数字化模型」  
[http://kaogu.cssn.cn/zwb/kgyd/kgzb/201704/t20170410\\_3941023.shtml](http://kaogu.cssn.cn/zwb/kgyd/kgzb/201704/t20170410_3941023.shtml)  
2017-04-10

- 曾 骐（1959）「评裴文中先生在“考古学基础”中的“旧石器时代考古总论”」『考古通讯』  
1：10-13.
- 战 世佳·董 哲·林 雪川（2017）「多重影像建模技术在打制石器制图及分析中的应用」  
『东南文化』5：12-20.
- 张 光直（1986）『考古学专题六讲』北京：文物出版社.
- 张 光直（1991）「序文」『时间与传统』、布鲁斯·炊格尔（蒋祖棣·刘英译）、pp. 1-5、北京：  
生活·读书·新知三联出版社.
- 张 佳（2018）「首个沉浸式考古虚拟教学实验室在西北大学建成」  
[http://kaogu.cssn.cn/zwb/ggkg/201812/t20181225\\_4799812.shtml](http://kaogu.cssn.cn/zwb/ggkg/201812/t20181225_4799812.shtml)  
2018-12-25
- 张 寿祺（1986）「论民族考古学与“民族考古学”一兼及对西方哲学“整体论”的分析和批  
判」『中山大学学报（社会科学版）』1：138-148.
- 张 森（2018）『东周时期齐国墓葬的性别考古分析—以新泰周家庄墓地为中心』山东大学硕  
士论文.
- 张 晓明（2019）「文物数字化标准有待突破」『中国商界』1：67.
- 张 荣·李 贞娥·徐 世超（2010）「安岳石窟目塔 5.12 汶川地震后抢救修缮—兼论三维激  
光扫描、计算机模拟技术在文物保护中的应用」『文物保护与考古科学』5：  
41-47.
- 章 梅芳（2008）「中国性别考古学开篇之作一评『性别研究与中国考古学』」『中国科技史杂  
志』1：90-95.
- 章 梅芳·孟 欣（2014）「新中国女性考古学家群体的形成发展与职业状况」『中原文物』2：  
35-42.
- 赵 昆·马 生涛（2007）「用数字传承文明—激光三维数字建模技术在秦俑遗址保护管理中  
的应用」『四川文物』1：91-93.
- 赵 蓉（2016）「敦煌石窟考古绘图中的佛龕展开图画法刍议—利用三维激光扫描数据的实践  
尝试」『敦煌研究』1：26-32.
- 郑 振铎·尹 达·夏 鼐·郭 宝钧·徐 旭生·裴 文中·苏 秉琦·贾 兰坡·许 道  
龄·安 志敏·王 伯洪·石 兴邦·王 仲殊·陈 公柔·马 得志（1958）  
「决心作左派，力争红与专」『考古』3：17
- 周 立·李 明·毛 晨佳·吕 晓洁（2011）「三维激光扫描技术在古建筑修缮测绘中的应

用]『文物』8: 84-89.

周 振宇·关 莹 (2017)「多视角三维重建技术在石制品研究中的应用」『人类学学报』2: 38-48.

周 蓬勃·李 姬俊男·税 午阳 (2014)「基于断裂面匹配的破碎文物的虚拟修复方法」『系统仿真学报』9: 2176-2179.

瞿 威·方 晓阳·苏 润青·朱 建平·孙 国平 (2019)「田螺山遗址灵芝遗存的三维重构及鉴定」『文物保护与考古科学』2: 46-52.

中国文物学会 (编) (2009)『中国当代文博专家志』北京: 文物出版社.

中国社会科学院考古研究所·辽宁省文物考古研究所·大连市文物考古研究所 (2009)「辽宁长海县小珠山新石器时代遗址发掘简报」『考古』5: 16-25.

中国社会科学院考古研究所 (编) (2010)『中国社会科学院考古研究所同仁录』北京: 科学出版社.

中国社会科学院考古研究所·云南省文物考古研究所·曲靖市文物管理所·师宗县文物管理所文物管理所 (2019)「云南师宗县大园子墓地发掘简报」『考古』2: 3-22.

中国新闻网 (2015) <https://www.chinanews.com/tp/hd2011/2015/11-17/582457.shtml>  
2015-11-17.

朱 泓·侯 侃·王 晓毅 (2017)「从生物考古学角度看山西榆次明清时期平民的两性差异」『吉林大学社会科学学报』4: 117-124, 206.

#### 欧米語文献

Binford, L. R. (1978). *Nunamiut Ethnoarchaeology*. New York, Academic Press.

Falkenhausen, L. V. (2006) *Chinese Society in the Age of Confucius (1000-250 BC): The Archaeological Evidence* (Cotsen Institute of Archaeology. California: University of California.

Forte, M., Dell'Unto, N., Issavi, J., Onsurez, L. and Lercari, N. (2012) 3D archaeology at Çatalhöyük. *International Journal of Heritage in the Digital Era*, 1: 351-378.

Forte, M., Dell'Unto, N., Jonsson, K. and Lercari, N. (2015) Interpretation process at Çatalhöyük. using 3D. In Hodder, I. and Marciniak, A. (Eds.), *Themes in Contemporary Archaeology: Assembling Çatalhöyük*, pp. 43-57.

Leeds: Maney Publishing.

- Hodder, I (2006) *The Leopard's Tale: Revealing the Mysteries of Catalhöyük*. London: Thames & Hudson.
- Johnson, M.H. (1999) *Archaeological Theory : an Introduction*. Hoboken: Blackwell Publishers.
- Linduff, K. M. and Sun, Y (Eds.) (2004) *Gender and Chinese Archaeology*. California: AltaMira Press.
- Montelius, O. (1903) Die Methode. In O. Montelius., *Die älteren Kulturperioden im Orient und in Europa I.*, Stockholm: Asher.
- Morgan, L. H. (1877) *Ancient Society*. New York: Henry Holt and Company.
- Olsen, J. W. (1987) The practice of archaeology in China today, *Antiquity*, 61(232): 282-290.
- Renfrew, C. (1982) *Towards an Archaeology of Mind: An Inaugural Lecture delivered before the University of Cambridge on 30 November 1982*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shanghai Archaeology Forum 世界考古論壇 · 上海 (2020) <http://shanghai-archaeology-forum.org/> 2020-10-1
- Stiles, D. (1977) *Ethnoarchaeology: A Discussion of Methods and Applications*. Man, 12(1): 87-103.
- Trigger, B. G. (1989) *A History of Archaeological Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Trigger, B. G. (1978) *Time and Traditions: Essays in Archaeological Interpretation*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Victor, K. L. and Beaudry, M. C. (1992) Women's participation in American prehistoric and historical archaeology: a comparative look at the journals *American Antiquity* and *Historical Archaeology*. In C. Classen (ed.), *Exploring Gender Through Archaeology: Selected Papers from the 1991 Boone Conference, Monographs in World Archaeology*, 11, pp. 11-21. Prehistory Press.